七日、己卯、幕府、書ヲ小山下野守、小田光重ニ與ヘテ之ヲ招ク、

〔御内書符案〕文明三、關東方　貞英　○筑前

從管領申飯肥案文出之

就關東事可參御方之趣、先度被仰之訖、不日馳參致忠節者、可有恩賞候也、

五月七日

小山下野守とのへ

同文章

小田太郎（光重）とのへ

○下野守、光重、共ニ幕府ノ招ニ應ゼシコト、本月三十日ノ條ニ見ユ、

八日、庚辰、下野守東氏數卒ス、

〔和泉吉見〕遠藤家譜　益之

氏數　下野守、○寛政重修諸家譜ニハ「下總守號素欣」トアリ、

住美濃國郡上郡篠脇城、文明三年辛卯五月八日卒、法名宗玄、氏數之和歌入勅撰集一首、○歌略ス、下ニ見ユ、

常緣　初稱野田下野守、

實東下野守益之五男、住美濃國郡上郡篠脇城、

法名宗玄

詠歌勅撰ニ入ル

〔東系圖〕胤綱　下總守、式部少輔、又益之ニ云、

氏數　下野守、法名宗玄、

元胤　三郎、早世、

常慶　下野守

氏胤　中務宮内少、法名素珊、

常菴　和尚　木蛇寺

常緣

和歌

〔新續古今和歌集〕十　羇旅歌

ゝへりみる雲はいつこゝそれならんゑらに月日を故郷の空　平氏數

十日、壬午、權中納言正三位坊城俊顯薨ズ、

〔公卿補任〕四十二　權中納言從三位藤俊顯、廿九、三月十六日敍正三位、○以上ハ既ニ三月十六日ノ條ニ收メタリ、五月十日逝去、

〔親長卿記〕二　五月九日、晴、○略　中次坊城中納言（俊顯）青侍來、黃門所勞（自去年辛所勞、）已及難儀、遺跡事可如何哉之由命之、愚息所望之樣語之、更無其仁之趣返答了、

遺跡ニツキテノ所望

其外經茂卿息事同談、新大納言（勸修寺教秀）在田舍歟之由被命之、○下略、春房出家、萬里（勸修寺）カハル、四月二十八日ノ條ニ收メタリ、小路家繼承ノコトニ

十一日、晴、坊城中納言俊顯、廿九歳、昨日申刻薨去云々、

十二日、晴、及晩參内、下姿、於殿上參會、新大納言教秀、廣橋大納言綱光等、坊城中納言俊顯、遺跡事談之、予息事雖申之、無其仁之間、勸修寺大納言（中カ）經茂、息十歳許歟、在田舍由有其沙汰、可被召上歟之由談之、其分可然云々、若無其仁者、大貳經熙朝臣新大納言教秀弟、在田舍、可被召上、可被相續歟、歳三十六云々、自俊顯卿兄也、爲之如何、其上於不相當之儀者、今可申武家安堵、可爲大儀、旁如何之由有沙汰、

〔宗賢卿記〕乙　五月十日、正三位行權中納言藤俊顯薨、廿九才、故坊城俊秀卿子也、

七月廿日、小河坊城故中納言俊顯子實勸修寺中納言經茂卿子也、童子九歳、來云々、昨日出仕、昨則叙爵云々、名字俊名云々、

〔諸家傳〕七下　坊城俊顯、俊秀卿男、母宮内卿卜部兼倚女、　嘉吉三年誕生、寶德二年正月六日從五位下、八歳、院當年御給、年月日從五位上、年月日左兵衛佐、康正三年二月十七日藏人、十五歳、同日右少辨、同年六月廿五日左少辨、長祿三年正月五日正五位下、十七歳、同四年正月六日正五位上、十八歳、寛正二年三月廿八日○坊城家譜、ニ十六日ニ作ル、

養子俊名敍爵

右中辨、○コノ間ニ、坊城家譜、同日兼右宮城使トアリ、同四年十二月六日權左中辨、廿一歳、同五年七月十九日新帝藏人、同年十一月廿四日從四位下、文正元年月日從四位上、同年三月廿九日左中辨、同日藏人頭、廿四歳、同年月日正四位下、同年月日右大辨、年月日正四位上、三ヶ度、應仁元年三月廿七日參議、廿五歳、右大辨如元、同年九月日左大辨、同年十月十九日從三位、廿歳、文明元年十一月二日權中納言、廿七歳、同三年三月十六日正三位、廿九歳、同年五月十日薨、廿九歳、

〔尊卑分脈〕藤原氏　坊城　高藤孫　俊秀

俊顯　母宮内卿卜部兼倚女、五藏、左兵佐、弁、參木大弁、頭、權中正三、文明三五十薨、

俊名　實經茂卿男

十二日、甲申、幕府、青蓮院尊應ヲシテ室町第ニ祈禱セシム、

〔華頂要略〕十一門主傳二十二　青蓮院尊應　（五月）同月十二日、於室町殿當月御祈御始行、助衆六口承仕兩人、明琳、善隆、

十四日、丙戌、地大ニ震フ、尋デ、賀茂社及ビ伊勢大神宮、大和七大寺ニ命ジテ、之ヲ祈禳セシム、幕府モ亦之ヲ命ズ、

〔親長卿記〕二　五月十四日、雨下、依所勞平臥、今日地震大動也、十七日、晴、依腹所勞終日平臥、新大納言教秀來、地震御祈事、政顯（勸修寺）、公家御祈事申沙汰之、亞相武家御祈申沙汰云々、奉書之樣談之、答所存之旨了、十九日、雨下、地震御祈事、可觸賀茂下上云々、新大納言教秀奉書、武家御祈、政顯奉書、公家御祈云々、及晚之間不相觸、廿日、晴、早旦御祈事下知兩社了、鴨社信祐上洛之由申之來、

〔賀茂史綱〕祈禱部　地災　後土御門天皇文明三年五月廿日壬辰、令下上社行御祈、依地震也、

〔內宮引付〕

御教書

一、地震御祈事、自來廿二日殊抽精誠、於一七ヶ日之間、可攘災孽於千万里外之由、可被下知神宮之旨、被仰下候也、謹言、

五月十六日　　（正親町）公兼

祭主（藤波秀忠）三位殿

祭主下知狀

——由御教書如此、仍案文獻之、可被下知神宮之狀如件、

七月九日　　（藤波秀忠）神祇大副在判

大司御館

追て、以前告知之處、不下着沙汰之間、重而令申候也、

地震御祈事、御教書并祭主下知今日到來、仍獻覽之、可令存知給候、恐々謹言、

七月廿二日　　大宮司判

謹上　內宮長殿　　大宮司氏長

解狀

皇太神宮神主

依御教書注進地震御祈、可攘災孽於千萬里外由、抽精誠仔細事、

右得去五月十六日御教書并次第施行偈、地震御祈、自來廿二日殊抽精誠、於一七ヶ日之間、可攘災孽於千萬里外之由事、謹所請如件、者任被仰下之旨、凝御祈禱精誠者也、仍注進如件、以解、

文明三年七月日　　大內人正六位上荒木田神主氏經

禰宜正四位下荒木田神主氏經

——從四位下——經興
永量
——正五位下——守秀
守朝
守氏
守則
——從五位上——經房
氏綱

禰宜

〔經覺私要鈔〕七十六　五月十四日丙戌、風吹雨下

一、今夜地震事外動了、後夜以後歟、月西ニ傾了、然者十五日分也、箕宿也、可爲龍神動、其慎如何、

廿八日庚子、霖雨以外也

一、申刻京都奉書トテ、自袖留木雜掌方給之、

去十四日大地震、公武御慎不輕、可抽丹祈旨、可被相觸寺門並七大寺之由、被仰出旨、可有披露寺務（經覺）樣由、可申旨所候也、恐々謹言、

五月十六日　　刑部卿忠弘奉

大進法橋御房

今日不日也、今日降雄日也、不可然歟、明旦寺門ヘ可仰遣者也、七大寺同前、

十六日、戊子、幕府、出雲隱岐國人等ノ守護ヲ舍キテ、濫ニ直訴スルヲ止メ、京極童子丸ヲシテ之ヲ裁斷セシム、

〔佐々木文書〕四〇周防

出雲隱岐兩國一族中、國人被官并寺庵等事、不帶守護吹擧狀、猥雖及直訴訟、不可有御許容、早任先例、可被成敗之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明三年五月十六日　　下野守（布施貞基）判
肥前守（飯尾之種）判

佐々木孫童子丸殿

出雲隱岐兩國一族中、國人被官并寺庵等事、以自由之儀、直訴訟之儀不可然候之間、被成奉書候、目出候、堅可被仰付候、恐々謹言、

文明三年五月十六日

五月十六日

佐々木孫童子丸殿

（細川）勝元御判

○幕府、孫童子丸ヲシテ、祖父持清ノ後ヲ承ケシメ、出雲隱岐飛驒近江ノ守護職ニ補セシコト、二年九月十五日ノ條ニ見エタリ、孫童子丸ノ叔父政高、出雲隱岐飛驒ノ守護職ニ補セラルヽコト、本年閏八月二十一日ノ條ニ見ユ、

十七日、（己丑）東兵、河内嶽山城ヲ襲ヒテ之ヲ取ル、

〔經覺私要鈔〕七十六　五月十八日庚寅、霽

一、古市胤榮來、嶽山城（河内南河内郡）事、夜前夜打入テ、敵方入替云々、城衆十廿人被打、或切腹云々、不可說々々々、若井（江）衆沙汰云々、

若江衆沙汰

○畠山義就、游佐長直ヲ攻メテ嶽山城ヲ復セシコト、文正元年九月十七日ノ條ニ見エタリ、若江衆、義就ノ部將甲斐莊某ト和泉ニ戰フコト、本年六月二十三日ノ條ニ見ユ、

二十一日、（癸巳）斯波義廉ノ部將朝倉孝景、氏景父子東軍ニ降ル、是日、幕府、孝景ヲ越前守護職トナス、

孝景幕府直參トナル　氏景越前ニ下リ斯波義敏ノ被官トナル

〔古證文〕二

越前國守護職事、被任望申旨畢、委細（細川勝元）右京大夫可申也、

文明三五月廿一日　慈照院殿樣御判

朝倉彈正左衞門殿

一、越前國朝倉彈正左衞門尉、京都自全世之比、旦夕之物語、古今聞能戰事、然而見合時節、彼越州擊取、三十餘年堅固持之、（上略）○上杉修理大夫カ定正在判

延德元年三月一日

江戶城主

曾我豐後守殿

〔大乘院寺社雜事記〕四十六　二月廿九日　雨下

一、自細川方申下云々、朝倉彈正孝景背治（斯波）部大輔義廉命、爲直奉公分、令參東方公方、子息（氏景）同沒落、下向越州、成兵衞佐（斯波）義敏被官、神妙云々、天下之弓矢令天變之間、每事無法量、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年八月十日裏

文明三年五月二十一日

片岡ノ繪

孝景裏返トノ説

片岡繪一合（廿弓）又進上候、修南院如此申候、□□者失而候由申候、早々被返下候者可畏入之由、御狀ゟ申候、○片岡繪ノコトハ、年末雜載學藝ノ條ニアリ、

一、新田年貢事、沙汰人之衆會へ被仰出候哉、進上之有無如何候哉、早進上□□□無其儀候哉、無御意之旨候者、先自私□不可申之通□□、但申候而可然候者、衆會へあて私ゟ被□（下カ）奉書御折紙可申遣候、沙汰人之衆之中へ□□（假儀カ）事被仰出候者、定而斟酌可存候、直ゟ被成御奉書、自然沙汰人衆ゟ心得候へと、依躰候次ゟ可被仰出候哉、廿五日之午貝定ゟ可有集會候、於新坊候へきと申候、但不可有法重（マヽ）候、○新田年貢ノコトハ、年末雜載寺領ノ條ニアリ、

一、越前之時宜、自川口（坂井郡）百姓兩人罷上申候旨者、朝倉可裏返之由物云色々候へ共、未現行候由申候、朝倉子松王ゟ對面候而、國へ下向候歟否をも不存知之由申候、去々年百姓公事ゟより、自寺門用錢を申懸候而、道ゟて被取候處、百姓公事ゟより候て如此候間、辨候へと申候、又去年反錢公事悉落居候、さ樣之事ゟ罷上候、返々自寺門武衞へ音信等細々候者、楠葉（元次）公事ゟ朝倉責取まていあるまゝく候、依無音當寺者東方之由申候而如此下知候故候、万一木津破候而も、西方へ無音候之間、此方沙汰□事自西方可當候、

越前ノ西黨孝景ノ反ヲ京都ニ報ズ

氏景細川成之ノ營ニ入ル

一、江洲者多賀豐後（高忠）者、持是院（齋藤妙椿）大勢ゟて入國故ゟ、先引退候由申候、○妙椿兵ヲ近江ニ出ダシ、一日ニ、ソノ本條アリ、

一、三藏會御始行之御日限若御治定候者、畏入（マヽ）□候者可畏入候、小五月會者式日御始行候哉、態々御返事無益候、被勘下候者可畏入之由、可有御披露候、恐々謹言、○三藏會、小五月會ノコトハ、年末雜載神社及ビ佛寺ノ條ニアリ、

卯月廿三日　兼雅（松林院）

大納言（尊饗）律師御房

〔大乘院寺社雜事記〕（四十七　文明三年七月二十四日裏）

昨日新田事、衆會へ可申用ゟ召仕候者罷寄候處、無衆會候、十五日ゟ又可罷寄候由申候、○新田ノコトハ、年末雜載寺領ノ條ニアリ、

一、越前之儀、朝倉成敵候條顯現之由、今月六日ゟ西方京へ自國注進實説候、甲斐左京亮者、上下二百人計ゟて、自西方可被下候分候、乍去延引候事もあるゑく候、○甲斐左京亮ノコトハ、七月二十一日ノ條ニ收ム、朝倉子孫二郎（氏景）者、今月八日ゟ於山名屋形大酒をさへ候て、其返ゟ讃州（細川成之）之御陣へ入候、公方へ御目ゟ直ゟ可

義政ニ謁ス

懸候段同實儀候、如此候間、國者十之八九可成東方候、自然不可成煩由、川口（坂井郡）坪江へ自寺門御下知狀申出候而可然候歟、不然者可成對陣候事も候へく候、自川口者朝倉城遠候、西方之下知狀をも爲寺門取候て可然候歟、但不存知候、江州敵之間、○三月二十一日ノ條參看、東方之下知狀一大事候、

加賀東軍ニ屬ス

一、關東も京方よく候て、利根川を越候、○關東ノコトハ、六月二十四日ノ條ニアリ、加賀一國參御身方候由、廣橋申候、

一、山城之稻八妻も、自木津夜打落候了、○稻八妻ノコトハ、六月是月ノ條ニアリ、

朝倉楠葉ノ和解ヲ謀ル

一、朝倉裏切候間、彌楠葉事一大事候、內々よて無爲之御了簡候者、可爲御興隆候

一、今日右衞門佐（畠山義就）勢下候而、可寄木津分候、依朝倉事延引候事もあるへく候、

一、今市公事可屬無爲候歟と申說候、御返事まても御座あるまゝく候由、可有御披露候、恐々謹言、○今市ノコトハ、六月十一日ノ條ニアリ、

六月十一日　兼雅

大納言律師御房

〔親長卿記〕二　六月八日、晴、今夜義廉被官人朝倉子降參云々、

孝景越前下向

〔見聞雜記〕○歷代殘闕日記八十四所收　一、（六月）同九日、朝倉孫次郎東方公方樣へ參了、

〔經覺私要鈔〕七十六　六月十日壬子、霽曇

一、畑來申云、只今自京都有風聞、朝倉孫次郎、去八日夜馳入細川讚州屋形、心替云々、於國定朝倉彈正罷成敵方云々、

十一日癸丑、自夜雨

一、朝倉孫次郎西方ヲ落テ東へ參之間、昨日十日懸公方御目云々、於國親父孝景心替分明歟云々、

〔經覺私要鈔〕七十七　九月十日己酉、霽自夜雨下

（信濃小路）兼益罷上由申之、語云、朝倉爲御合力在間ヲ被下越州云々、

十三日壬子、霽

下林與三下越前若黨一兩人相副云々、今日日次不宜、何者指南哉不審、

〔大乘院日記目錄〕三　六月十二日、朝倉參御方降參云々、下向越前國了、甲斐與連々合戰、○孝景、甲斐某ト戰フコト、七月二十一日ノ條ニアリ、

孝景東軍ニ屬シ金穀北方ヨリ通ズ

〔天陰語錄〕浦上美作守壽像讚

○上文ハ浦上則宗、赤松政則ニ會セシコトニカヽル、應仁元年九月十八日ノ條ニ收メタリ、然後誘越前朝倉彈正左衞門

尉屬將軍麾下、因是金穀自北而通也、○下文ハ、則宗山崎ニ陣スルコトニカヽル、四年八月二日ノ條ニ收ム、

〔應仁記〕三　近江越前軍之事

○上文ハ、九月二十一日ノ條ニ收ム、朝倉父子兄弟、莫太ノ勳功ヲヌキンテ、文明三年五月廿一日、敎景ハ越前ノ守護職ヲ給リケル、

〔日下部系圖〕敎景（後敏景、後孝景、小太郎、孫右衛門、彈正左衛門尉、）文明三年五月廿一日、慈照院殿國事依勳、孝景被成下御內書、一國守護、

氏景（孫二郎、孫右衛門尉、）文明三年六月九日、爲東山殿上意、以北陸道可切明之旨、被召出被仰付、御劍被下、被任奉公訖、於越州孝景相共戰事數度也、

○孝景、子氏景ヲ京都ニ留メ、自ラ越前ニ赴キシコト、應仁二年閏十月十四日ノ條ニ見エタリ、孝景、甲斐左京亮ト戰フコト、本年七月二十一日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔重編應仁記〕六　朝倉彈正忠降參事、同畠山能登守護參御方事、

都鄙ノ合戰、每度山名方利ヲ得ル事多シト云ヘ𪜈、數年ノ在京ニ力屈シ財寶盡果、諸勢悉ク困窮ス、其上攝丹兩州ハ細川家ノ領國也、播州ハ赤松家ノ舊領ナルニ、今度政則拜領ノ上意ヲ蒙リ、思ノ儘ニ國人ノ心ヲ靡ケ、譜第ノ輩招集メテ、皆彼家ヘ歸服ス、然レハ山名方ノ西陣ヘハ、皆分國ヨリ運送ノ道ヲ遮レテ、兵粮ヲ可入樣無レバ、西陣ノ上下逐日勞苦ス、其上分國ノ土民等一揆ヲ企テ、家人國人ニ謀叛ノ者モ出來ケレハ、先ツ是ヲ退治シテ、重テ又攻上ラントテ、西陣ノ土岐一色等、其外山名一族ノ中モ、拔々ニ下國ス、サシモ一方ノ大將タリシ斯波左兵衞督義廉モ、分國尾張遠江ニ土一揆ノ亂起テ、國人騷動セシメケレハ、先ツ其亂ヲ鎭メントテ、急キ尾州ヘ下國セシム、○應仁元年五月十日條參看、且又東陣ノ細川方ニモ、ヌケヌケニ歸國ノ人モ有リ、次第京勢手薄ニ成ル、于斯（文明三年）同年五月五日、斯波ノ家長越州ノ朝倉彈正左衞門敏景、東陣花ノ御所ノ味方ニ參ル、是ハ此日來公方家ヨリ御招キ、細川家取持ヲ以テ、斯波治部大輔義敏ヨリ越前國ヲ可讓賜之間、味方ニ參ルヘキ趣依被約諾也、頓テ同月廿一日、越前國守護職拜領ノ御判ヲ被下、同六月九日、敏景カ嫡子孫次郎氏景ニ、公方家ヨリ御劍ヲ賜リ、急キ父子共ニ越州ヘ下向シ、彼國ノ亂ヲ鎭メ、追々北陸ノ道ヲ切開テ、軍勢ノ通路、兵粮ノ運送無妨樣ニ可相計由被仰付、誠以父子共ニ希代ノ面目、無雙ノ公恩也、抑此敏景ハ先

山名ノ軍窮乏ス

赤松政則播磨ヲ賜リ西軍ノ糧道ヲ絕ツ

西軍諸將軍ヲ拔キテ國ニ歸ル

斯波義敏越前讓與ヲ以テ孝景ヲ誘フ

北陸ノ運輸ヲ通ゼシム

祖ハ但州ノ人、本姓ハ日下部氏ニシテ、尾張修理大夫高經ヨリ以來、代々斯波家ノ被官也、敏景此年來斯波左兵衛督義廉ノ家長トシテ、彼家ノ執事ノ職ヲ勤メ、去ヌル應仁ノ亂ニモ、武功ヲ顯シ、宗全入道ノ褒賞ニ預ル、雖然此頃主君義廉ハ尾張ヘ下國シ其留主ヲ幸トシ、一方ノ主筋斯波義敏ニ招カレテ、御所方ト成リ、陪臣忽眤近ノ臣ニ列シテ、越國ヲ拜領シ、御敵退治ノ公命ヲ蒙リ畢ヌ、（下文ハ、四年八月ノ條ニ收ム、）

孝景黑丸ヨリ一乘ニ移ル

〔古今類聚越前國誌〕（六故蹟　足羽郡）

一乘故城　前波村ノ南白椿嶽ノ西山上ニ在、（福井ヲ去ル丁四里、）文明三年五月廿一日朝倉（彈正左衛門尉）敏景、足利將軍義政ノ命ヲ奉シテ、坂井郡黑丸（マヽ）ヨリ此ニ移リ城ヲ築キ、本州ヲ治ム、城戸口ヨリ南東城山ニ至テ三十丁餘、城基ノ東南ニ土臺三所、一ハ高サ一丈三尺余、縦五十七歩、横十二歩、一ハ高サ二丈、縦五十歩、一ハ高サ四丈、縦百歩、横三丈、縦五十四歩、横十二歩、城基ヨリ西北ニ土臺四ツ、一ハ高サ四丈、縦九歩、横十八歩、一ハ高サ三丈、縦十八歩、横二十歩、一ハ高サ一丈、縦九歩、横十二歩、城基ノ西北ヲ去ル丁三十五丁、上城戸口ニ高サ二丈、縦十八歩、十七歩、東西十五歩、南北四十八歩ノ土臺アリ、城基ノ西北ヲ去ル丁三十二丁、下城戸口ニ高サ二丈、東西二十四歩、南北三十六歩ノ土臺アリ、城基ノ西北三十二丁、館跡ノ西二百八十歩、南北二百四十歩、館跡ノ南ニ東西七十歩、南北百三十歩ノ居跡ニ所アリ、館跡ノ西南ニ居跡アリ、

〔越前國名蹟考〕（十黑丸村　坂井郡）

大黑丸城跡　足利高經黑丸城迹、（圖繪）村より東、朝倉孫左衛門尉廣景、同孫次郎高景、同彈正左衛門尉敏景、三宅村より貳町許東方山の內に四拾間四方許の所搔上の形あり、福井より三里、一說に朝倉の時代祈願所寺院の跡と云、（城迹考）新安手簡に云、越前朝倉祖黑丸入道なと、一條家の黑丸ノ庄を預られ候ひしより、彼國に竊據し候事は、一條の裝束抄の中にも見に候ひき、素良（井上）按するに、建武曆應の比は、高經此所に城を築れしか、其子孫は代々管領として在京し、當國ハ家臣に預け置れしなれは、其節より朝倉家斯波の舊趾を卜て此所に居住せられしと見えたり、其以前より黑丸庄は一條家の采地なれと、幸ヨ朝倉家へ預け置れしを、朝倉次第に勢を國中ヨ振ひ、早晩一條家の莊園をも押領せしなるへし、文明の初、朝倉家當國一圓を賜はり、一乘へ移られし後は、居館の跡に祈願所をも建られしあるへし、

〔附錄〕

〔尋尊大僧正記〕（三文明三年十二月十四日裏）

（包紙）「自播州□□□因幡入道

多門院　御奉行所　廣朝」

其後久不申承候、無御心元存候、仍而出雲庄私知行分一名本年貢事候、此間御恩ニ被下候、只今御かいさひあるへきよし候て、下地ニてんさつをさせられ候よ〳〵、下地ニてんさつをさせられ候よ〳〵、披官者注進仕候、誠驚入存候、私事ハ此方ニ候へとも、更以門跡さゑ御事如在不存候、於今候ても越前之御領地之事、所司代朝倉無他事申合候間、いろさゑ被憑入せ申合候、一段得御意候て、隨分可致奉公心中候、如此ゑうゑやくの御恩之事候を被召放候へ者、人目實無面目候、又於地下候ても、他所之人持候へハ、地下之煩彼是公私不可然存候、思召被分候て、今之一段無相違被返付候ハヽ、可畏入候、越前事ハ、依御返事罷越、得御意候て、可致奉公候、所司代方へハ我々御坊人之事候間、可致奉公由申合候、くれぐしく此御返事ニ蒙仰候ハヽ、可畏入候、又十市殿へも一端御申候て給候へと申候て、私を進し候、可然樣ニ預御取合、可仰御扶持候、いろさゑ重而御禮可申入候事候、恐惶謹言、

九月廿八日　廣朝(花押)

多門院御奉行所

所司代朝倉

二十三日、乙未、上杉政眞ノ將太田資忠、下野ニ入リ佐野師綱ヲ下シ、進ンデ上野ニ入ル、是日、館林城ヲ陷シイレ舞木城ヲ攻ム、尋デ、幕府、書ヲ下シテ其功ヲ褒ス、

〔古文書〕一

去廿三日、上州佐貫(邑樂郡)庄立林要害中城攻落時、家人被疵之由長尾左衞門尉(景信)注進到來、尤以神妙、可勸戰功候、謹言、

五月廿八日　豐島新次郎殿　顯定(花押)

豐島新次郎

〔御内書符案〕文明三、關東方　貞英　○筑前

(伊勢兵庫助貞宗)仰奉兵受領註進之趣委曲被聞含詑(食カ)、仍就小山小田參御方、差遣同名四郎右衞門、長尾左衞門尉(景春)於足利庄、攻落赤見樺崎兩城、南式部大輔以下數輩討捕之、○四月十五日ニ本條ヲ、次太田圖書助(資忠)依令進發佐野越前入道(師綱)館、彼等降參、將又攻寄上州佐貫(邑樂郡)庄立林舞木城之刻、圖書助其外數多被疵並討死有之云々、旁以尤感悅、彌可勸軍功候也、

文明三年五月二十三日

七月二日

上杉修理大夫（政眞）とのへ

（飯尾肥前守之種）飯肥奉案文出之
今度就小山下野守竝小田以下降參、（五月七日ニ本條アリ）近日攻寄舞木城合戰之時、
同名圖書助其外數輩、或被疵或討死云々、尤神妙、仍敵軍族事、彌廻計略、早速
令落居者、可爲本意候也、

太田資清

同　日

太田備中入道（資清）とのへ

同前
今度上州立林城（邑樂郡）進發事、差遣上州武州一揆輩、並長尾左衞門尉（景信）以下被官人
等、則時攻落之、數輩被疵之條、忠節異于他、彌可廻計策候也、

上杉顯定

九月十七日

上杉四郎（顯定）とのへ

同前
今度於上州立林城合戰之時、被官人數輩或討死或被疵之條、尤神妙、殊結城
以下降參之儀、一身忠勞被感思食訖、彌不可存疎略候也、

長尾景信

同　日

長尾左衞門尉とのへ

同前
今度於上州立林城合戰之時、被官人數輩被疵之條、尤神妙、殊年來至所令勳
戰功之旨、被聞食之訖、彌可抽忠節候也、

長尾忠景
大石顯重

同　日

長尾尾張（忠景）守とのへ　長尾能登守とのへ
大石源左衞門（顯重）尉とのへ　大石隼人佐とのへ
大石新左衞門尉とのへ

長尾景春

同前
今度於上州立林城合戰之時、被官人數輩被疵之旨、被聞食候訖、彌可抽忠節
候也、

同　日

長尾四郎（景春）右衞門尉とのへ

長尾定景

同前
今度於上州立林城合戰之時、被官人數輩被疵之條、尤神妙、彌可致忠節候也、
同　日　長尾但馬守（定景）とのへ

同前
今度於上州立林城合戰之時、被官人數輩被疵之條、尤神妙、彌可抽戰功候也、
同　日　長尾藤壽とのへ

同前
今度攻落上州館林城之時、被疵之旨、家純（岩松）註進到來、尤神妙、彌可抽忠節候也、
同（十二月七日）日　善四郎とのへ

○長尾景信等、赤見樺崎兩城ヲ取リシコト、四月十五日ノ條ニ見エタリ、古河城ヲ陷シイルコト、六月二十四日ノ條ニ見ユ、

二十八日、庚子、鎌倉圓覺寺周顒（虛中）寂ス、

小山下野守

〔扶桑五山記〕四　相陽瑞鹿山圓覺興聖禪寺
百卅九、虛中禾上諱周顒扁伯心、文明三年五月廿八日示寂、

三十日、壬寅、幕府、書ヲ東北ノ諸族ニ下シテ、力ヲ關東ノ平定ニ効サシム、

〔小山氏文書〕乾
就關東事、可參御方之趣、先年被仰下之處、應下知可致忠節之旨、顯定注進到來、尤神妙、一段抽戰功者、可有恩賞者也、
五月卅日　小山下野守とのへ（足利義政）（花押）

〔白川文書〕○前　陸
就關東事、度々被仰之處、一途不能現形之儀之條、何樣事哉、所詮小山下野守參御方、致忠節之上者、此刻抽無二戰功者、可有恩賞候也、
五月卅日　白川修理大夫（直朝）入道とのへ（足利義政）（花押）

白川直朝

〔御內書符案〕文明三、關東方　貞英　○筑前
從飯肥案文出之
就關東事、下野守參御方、可致忠節云々、尤神妙、同心可勵戰功候也、

（五月三十日）
同　日

小山三河守とのへ　小山治部少輔とのへ
白川刑部少輔とのへ　水谷壹岐入道とのへ

小山三河守
小山治部少輔
白川刑部少輔
水谷壹岐入道

就關東事、下野守參御方、可致忠節云々、一段計略之旨被聞食之訖、尤神妙、彌不存疎略、可勵戰功候也、

同　日

水谷右馬助とのへ

水谷右馬助

同前
關東事、年來度々忠節之段被聞食訖、殊今度小山下野守以計略參御方、可致戰功云々、尤神妙、彌勵忠勤者、可有恩賞候也、

同　日

結城水谷掃部助とのへ

水谷掃部助

同前
關東事、年來度々忠節之段被聞食訖、殊小山下野守事、以掃部助籌略參御方、

可致戰功云々、尤神妙、彌可抽軍功候也、

同　日

結城水谷伊勢入道とのへ

水谷伊勢入道

同前
關東事、小山下野守參御方之上者、此刻不日馳參、抽忠節者、可有恩賞候也、

同　日

佐野左馬助（重綱）とのへ
鹿嶋出羽守（實幹カ）とのへ

佐野重綱
鹿島出羽守

同前
就關東事、度々被仰之訖、小山下野守參御方之上者、同心勵忠節者、可有恩賞候也、

同　日

那須肥前守（明資）とのへ

那須明資

同前
就關東事、度々被仰之處、一途不能現形之儀之條、何樣事哉、所詮小山下野守

參御方、致忠節之上者、此刻抽無二戰功者、可有恩賞候也、

同　日　白川修理大夫入道とのへ　○上文白川文書ト同文ナリ、
小峰とのへ

同前
就關東事、可參御方之趣、去年遣内書之處、隨下知馳參條、尤神妙、彌致忠節者、
可有恩賞候也、

同　日　小田光重　小田太郎（光重）とのへ

同前
就關東事、小田太郎同心參御方之條、尤神妙、彌可抽戰功候也、

同　日　筑波大夫　筑波大夫とのへ

同前
就關東事、同名太郎同心參御方之條、尤神妙、彌可抽戰功候也、

同　日　小田右衛門大夫　小田右衛門大夫とのへ

同前
關東事、小田太郎參御方之上者、此刻不日馳參、同心致戰功者、可有抽賞候也、

同　日　小高（政家）とのへ　宍戸政家
宍戸安藝（政家）守とのへ　眞壁治幹
眞壁掃部（治幹）助とのへ

同前
關東事、參御方之條、尤神妙、彌可抽戰功候也、

同　日　佐野愛壽　佐野愛壽とのへ　佐野遠江守
佐野遠江守とのへ

同前
就關東事、佐野愛壽並親類被官人等同心參御方、可致忠節云々、尤神妙、彌可

抽戰功候也、

同　日　大貫三河守とのへ

同前
就關東事、度々可參御方之趣被仰之訖、至于此時可處先忠於無條、不歎存哉、
所詮不日馳參、致戰功者、可有恩賞候也、

同　日　常陸大掾（高幹）とのへ　大掾高幹

同前
就關東事、可參御方之旨、度々被仰之訖、不日馳參致戰功者、可有抽賞候也、

同　日　那須越後守（資之）とのへ　那須資之

同前
關東事、不忘代々忠節、不日參御方、抽戰功者、可有恩賞候也、

同　日　宇都宮四郎とのへ　宇都宮四郎

同前
關東事、參御方致忠節者、可有恩賞候也、

同　日　結城七郎（氏廣）とのへ　結城氏廣

同前
關東事、參御方致忠節者、可有恩賞候也、

同　日　簗田河内守（持助）とのへ　簗田持助

飯肥奉案文出之
參御方之條、被感思食訖、云先忠云當時、彌不存疎略、抽忠節者、可有恩賞、委曲
猶右京大夫（細川勝元）可申下候也、　宇都宮正綱等幕府ニ歸降ス

八月十九日　宇都宮右馬頭（正綱）とのへ

同前
正綱事、依計略、近日參御方之條、併一身之忠節、被感思食訖、彌致戰功者、可有抽賞候也、

同　日　芳賀左兵衛尉（興綱）とのへ

同前
宇都宮右馬頭事、依連々計略、近日參御方之旨註進到來、尤神妙、仍遣內書之訖、此刻方々時宜彌廻了簡、早速遂靜謐者可爲本意、巨細猶右京大夫可申下候也、

同　日　上杉四郎（顯定）とのへ

同前
今度於國寂前參御方之旨、上杉四郎註進到來、尤神妙、彌可抽戰功候也、

同（九月十七日）日　上總介とのへ

同前
今度相催親類以下參御方之旨、上杉四郎註進到來、尤神妙、彌可抽戰功候也、

同　日　本間近江守とのへ

同前
參御方之旨、上杉四郎註進到來、尤神妙、彌可抽戰功候也、

同　日　本間左近將監とのへ
佐々木左衛門尉とのへ

同前
上總介事、依計略、早速參御方之條、尤神妙、可抽忠節候也、

同　日　角田若狹守とのへ

同前
今度參御方之旨、上杉四郎註進到來、尤神妙、彌加談合、一段致戰功者、可有恩賞候也、

同　日

結城七郎とのへ

同前
今度寂前參御方之條、尤神妙、彌相談上杉四郎、可抽忠節候也、

同　日

常陸大掾とのへ

同前
關東事、連々依無等閑、今度寂前參御方之條、尤神妙、彌可抽忠節候也、

同　日

鹿島出羽守とのへ

那須肥前守とのへ

同前
今度參御方之條、尤神妙、彌相談上杉四郎、可抽忠節候也、

同　日

佐竹左馬助（義治）とのへ

同前
今度左馬助進退事、依計策參御方之條、尤神妙、彌可抽忠節候也、

同　日

江戸彦五郎（通長）とのへ

參御方之旨註進到來、被聞食之訖、彌相談上杉四郎、可抽忠節候也、

同　日

宇都宮右馬頭とのへ

同前
關東事、不日參御方、可致忠節候也、

同　日

那須越後守とのへ

同前
今度同心之族、並一族親類已下事、依計策悉參御方之條、忠節異于他候、彌相談上杉四郎、抽戰功者、可有恩賞候也、

同　日

小山下野守とのへ

同前
今度自寂前參御方之條、尤被感思食訖、彌相談上杉四郎、抽戰功者、可有恩賞
候也、

同　日

小田持家
小田讃岐(持家)守とのへ

同前
關東事、連年致粉骨之旨、上杉四郎註進到來、尤神妙、彌可抽忠節候也、

同　日

大平山城守
大平山城守とのへ

同前
關東事、連々致忠節之旨、上杉四郎注進之趣被聞食候訖、尤神妙、彌可抽戰功
候也、

同　日

小幡右衛門尉
小幡(實高カ)右衛門尉とのへ

長尾景信
長尾左衛門尉(景信)とのへ

〔集古文書〕六十六 書牘類　長尾景信 由良家藏

態啓候、抑今度宇都宮爲躰、無是非次第候、仍對當方在城衆可被成勇之由承
候間、令披露屋形證狀取進之候、園田事之半(マヽ)旨候之間、重而證狀可取進之、委
細大澤方可有披達候、恐々謹言、

文明三　長尾
六月六日　左衛門尉景信 判

謹上　横瀨信濃(國繁)守殿

横瀨國繁

○幕府、小山下野守等ヲ招キシコト、本月五日ノ條ニ見エタリ、又宇都
宮正綱以下ニ與フル內書ハ、コノ日ノ事ニアラザレドモ、便宜類收ス、

幕府、上杉房定ノ關東出陣ヲ促ス、

〔御內書符案〕文明三、關東方 貞英 ○筑前 從仮肥案文出之

關東事、小山以下參御方、敵城所々攻落之條快然候、此刻時節到來候歟、度々
雖被仰下之、閣万事不移時日、令出陣致忠節者、靜謐之儀不可廻踵候、巨細猶

右京大夫(細川勝元)可申候也、

同(五月卅日)　日

上杉民部大輔(房定)とのへ

○幕府、房定ノ歸國ヲ責メ、兵ヲ關東ニ出サシメシコト、四月十三日ノ條ニ見エタリ、又、岩松家純ヲ越後ニ遣シ、出陣ヲ勸メシムルコト次ノ條ニ見ユ、

幕府、岩松家純ヲシテ越後ニ赴キ、上杉房定ニ勸メテ、兵ヲ關東ニ出サシム、

〔御内書符案〕(文明三、關東方面　眞英　○筑前)

從脇肥案交出之

上杉民部大輔出陣事、委曲申含兵庫頭(岩松明純)訖、歡樂之旨雖被聞食之、關東靜謐時節到來之間、早速馳向越後國、嚴密進發之樣計略候者、可爲本意候也、

同(五月三十日)　日

新田治部大輔(岩松家純)とのへ

同前引合

上杉民部大輔關東出陣事、不日令下向、巨細之趣可申聞長純(家純ノ初名)候也、

同　日

新田兵庫頭とのへ

伊奉

就上杉民部大輔出陣事、遣内書之處、應下知馳向越後國、委曲可申聞之旨註進到來、尤神妙、彌可抽忠節候也、

十二月七日

新田治部大輔とのへ

家純越後ニ赴クノ命ヲ奉ズ

同前

今度令下向、巨細之趣申聞家純之由註進到來、尤神妙、彌可抽忠節候也、

同　日

新田兵庫頭とのへ

○義政、岩松明純父子ニ命ジ、關東ニ還リテ成氏ヲ討タシメシコト、應仁元年二月十六日ノ條ニ見エタリ、成氏、古河ニ敗レ千葉氏ニ依ルコト、本年六月二十四日ノ條ニ見ユ、

鴨社祠官等ノ訴狀

是月、山名持豐、禁榜ヲ京都盧山寺ニ揭グ、

〔盧山寺文書〕（山城）

禁制　盧山寺　付塔頭

一、令沽脚（却）寺中坊事　同本物返事

一、不及案內、號陣屋令亂入事

一、寺中敷地於號我物事

右條々堅令停止之畢、若於違犯之族者、速可處罪科者也、仍下知如件、

文明三年五月日　（山名持豐）沙彌（花押）

鴨社祠官氏人等、神事闕怠ノ事ニツキ、同社神人ト相訴フ、

〔賀茂社諸國神戶記〕坤　越後國石河庄（北蒲原郡）

鴨社祠官氏人等謹連署言上

欲早蒙嚴密御成敗、神事御祈禱致無爲之沙汰子細條々、

一、當社神人等背先例任雅意、或不勤所役、註文備于右或破法度致過分之振舞、每度令抑留神事、及違例之間、御祈禱之怠轉依不可然、雖閣是非之儀、無緩怠盡期之間、且神事之廢怠、且因茲及鷄鳴翌朝之條、神慮叵測者哉、然者任舊

神領大略西軍ニ押領セラレ日供以下諸下行半減ス

越後石河莊　丹波三和莊

下行過分ハ神人緩怠ノ基

例、可勤其役之由、急速堅可被加御成敗事、

一、當社日供神事之儀、就天下忿劇、諸神領大略爲敵國之間、依押領、自去應仁二年、日供神事以下諸下行被減少半分、于今雖致其沙汰、彌追年仁令失墜之間、猶無爲儀難叶之者哉、爰先々者神人等致過分之引違、雖無每日下行、致無爲之沙汰、結句就所職□□□□□□□先代之引違、不可懸後任之、任御法之旨、神人等令無足之訖、而近年爲令致向後之引違、以別儀先代之未下於令下行之歟、然間□□□□□□一向不致其沙汰、於先代之未下者、構新儀可致其辨之旨、就令申之、無謂抑留神事仕之條不可然間、今一社成評議申請趣者、日供御飯料半分之下行之定七拾五匹之內、二拾五疋分者、以越後國石河庄公用切向之、二拾疋分者、以丹波國三和庄（永上郡）公用并御服錢切出之、尙殘至于三十匹、爲當職每日可令下行之由、神人等仁加下知之處、不致承引條、神事怠轉之基也、其故者每日下行爲過分者、神事及翌朝、剩可令闕怠之段、無勿體之間、爲總社申付之處、令緩怠事、言語道斷之子細也、所詮於神供、爲社家令調進、至于神人之所役者、可參勤仕之由、可被仰付之處、若不可令參勤仕其役之由令申者、放神人之稱號、召上給田以下、以公人并社

中雜色、可致神事無爲之沙汰之由、被成下御奉書之者可畏存事、

右條々、如此於社家種々雖申付之、任雅意依不承引仕之、所令言上也、然者早任申請之旨、速蒙御成敗、神事御祈禱致無爲之沙汰、彌可奉祈天下靜謐之御願、仍粗言上如件、

文明三年五月日

貴布禰新權祝　鴨縣主秀輔
比良木新權禰宜　鴨縣主祐員
比良木權禰宜　鴨縣主祐長
比良木權禰宜　鴨縣主祐名
河合新權祝　鴨縣主秀興
河合權祝　鴨縣主祐宣
河合禰宜　鴨縣主祐崎
新權祝　鴨縣主秀盛
祝　鴨縣主秀顯
禰宜　鴨縣主祐康

神人等ノ訴狀

日供未下分アレドモ神事怠轉ナシ

鴨社神人等謹連署言上

今度社祠氏人無謂訴訟條々

一、神人等背先例、不勤所役由訴申云云、於往古勤分、于今無緩怠之儀、雖然神事及鷄鳴翌朝事者、相待社務之下行、動移時刻也、更以非神人遲參之過歟、

一、就天下忿劇、諸下行被減少半分、雖不便至極、於亂中事不及是非、違亂然者毎日御供料七拾伍匹者、嚴密可有其沙汰處仁、尙以時々有未下分、然日供無怠轉、神人忠節事、

一、越後國石河庄事者、爲先未下帶御奉書并社務副狀、所令知行也、然因社務

以上連判人數十四人

前官
前祝　鴨縣主秀清
前禰宜　鴨縣主祐樹
前禰宜　鴨縣主祐躬
前禰宜三位　鴨縣主祐香

之托事、以彼在所、同每日十四分致引違、令調進日供、于今無懈怠、是亦神人等忠義也、

一、丹波國三和庄公用并御服錢、以之被切向事、不殘承引、故彼公用事者、或及月迫、或及翌年矣、於御飯料、以每日所下勤來處也、先未下過分上、經年月引違、於無力神人一向難叶間、不領掌旨、非其過者歟、

一、在敵國神領中仁社納在之歟、就御尋之儀、重而可令注進者也、

右條々、爲一無背社家舊規、結句非難澁下行、寄事左右、搆乃言訴、申計會神人等事、甚惑亂之至也、爲御糺明一々令陳答也、所詮任理運之旨、蒙御成敗、日供以下無怠轉勤仕之、彌爲專天下靜謐之御祈禱、粗謹言上如件、

文明三年五月日　　鴨兼友
友範
貞丞
丞綱
友兼
友爲

雜掌神人等ノ奸計ヲ訴フ

美濃國梅原莊代官齋藤彌次郎公用ヲ沙汰セズ

鴨社雜掌謹重而言上

欲早被弃捐神人等姦謀、所役以下事、任舊記、被致其沙汰、日供下行任申請之旨、急速蒙御成敗之間事、

一、年中神人等所役、先度所進之註文、一向無先規由令言上之條、或無覺歟、或爲奉掠上聞、旁以御罪科不輕者也、仍所役令勤仕、社之日記少々撰出之分、案文備于右、而曾不致其沙汰云云、以外之處言也、殊彼註文內、於御箸之儀者、供御所造進之時、罷出而、任先規可致其沙汰之旨、於社家乍令返答之、至于御成敗之時、兎角陳申之條、云虛言云緩怠、令重疊之者歟、任先例註文之分可令勤仕之由、嚴密可被加御成敗事、

一、敵國神領不知行之註文、備于此內、美濃國梅原（山縣郡）庄代官土岐被官齋藤彌次郎請口之分、京着之定三百九十餘貫之處、亂世以來、公用不致沙汰者也、但自地下直進物兩季神服、并長日人夫等事者、于今令運上就而、爲請取彼神服、社使每年兩度下向之次ニ令催促公用之處、彼內壹二千匹之分、可致其沙汰之由、雖申請、以令難澁之、最少分致沙汰之歟、雖然使者路錢、并在庄公

用等仁引取間、不全社納之者也、神服以下於運上之通路者、自管領佐々木
故大膳大夫（京極持清）方江被加成敗之間、于今無爲者也、此外敵國神領一圓無足之
處知行在之云云、被加御糺明、虛言令歷然者、一段可被處御罪科事、
一、日供下行事、先度申請之旨、不可叶之由令言上之條、神事闕怠之基也、當知
行之神領土貢所々註文備于右、如此上者、年中社務始行神用不相當土貢者
也、若御不審之子細在之、可被遂勘定者哉、將亦石河庄事、帶御奉書并社務
副狀令知行云々、如先度連署言上、於先代之未下者、爲後任雖不致其辨、且
爲向後引違、且押神事可申成御奉書之旨、致嗷訴之間、爲當座無爲申與之
者也、雖然於引違分者、一向不可叶之由令申上者、可令勘落之旨、可蒙御成
敗、爰神人等引違過分之由雖令言上、無其儀者也、其故者乍取過分之下行、
毎日於日供者、以最少分令調進之、悉令犯用上者、號引違不可有未下者也、
日供調進入目之次第（マヽ）、與社家雜掌與神人等被召合、是亦可被遂勘定事、
右條々如此當知行之神領土貢、依不相當神用、一社加評議申請之旨（マヽ）上者、急
速無御成敗者、日供神事一圓可令闕怠、爲公爲神不可然者也、就中神人等事、
自往古無他門奉公之儀、令專社之所役之處、近年合乘（名カ）不思議之名字、成侍之

日供下行ヲ取ナガラ最少分ヲ調進ス
神人等名字ヲ名乘侍ノ振舞ヲナス

振舞、號所々被官、對社家毎事致緩怠之條、禁法之第一也、於當社者雜掌人已
下有社稱號者、悉不取別主人之處、爲致雅意諸家令奉公歟、殊今度如陳狀者、
爲下輩之身對祠官、緩怠之文言等、言語道斷次第也、一段無御罪科者、爲諸社
之神人、緩怠不可有盡期者也、
右再訴、按文明三年六月之事也、

態致啓札候、抑社納之事、二千匹片山入道へ渡之由、其風聞候歟、當國亂後、取
分石川庄之事、悉依爲亡所、土貢運送無之候處、有中意（惡カ）之人躰、如此申掠候哉、
爲向後候間、堅可被成御糺明候、若又國方之者候者、速校（交カ）名ヲ承、可加成敗候、
委細於片山藤左衞門入道令付與口上候、恐々謹言、

七月廿三日　德從在判

謹上　賀茂社家中

彼庄之時宜、以好便丸山方へ可申居候、依其樣躰、當納分いゝ程可有社納候
由可申達候、總別當國御本家數十ヶ所候へ共、國一亂以來、地下百姓等所々

石河庄ヨリ土貢運送セズ

迷惑故、嚴密ニ不遂其運上候、然共愚俗策配以後、耳(且カ)神慮且爲國被存故、嚴重申付候、乍去去今之事者前々ニ無比量時宜共候間、此分ニ候、猶以委曲丸山方可有傳達候、恐々謹言、

十月十日　　德從　在判

鴨御社家中御報

越後之國賀茂之御神領ゟハしの事、當年分之內殘而二十貫文之事、越後より飛脚上着候者、今月中ニ速立渡可申候、萬一夫賃共百三十二貫之內、少も相違之儀者、田舍(をカ)之自御代官申上候者、悉時宜可相替候之間、此折ゟミも不可立用候、如承候田舍領掌候者、甘貫今月中ニ立進候者、此折紙ヲ可給候、恐々謹言、

五月三日　　在判

下賀茂御神人

越後之御神領御取次へら

ゟハし

丹波國三和庄

文明三年五月、祠官等連署言上狀云、日供御飯料半分之下行之定七拾五匹之內貳拾五匹分者、以越後國石河庄公用切向之、貳拾匹分者、以丹波國三和庄公用并御服錢切出之、尙殘至于三十匹、爲當職每日可令下行之由、神人等仁加下知之處、不致承引條、神事怠轉之基也、其故者、每日下行爲過分者、神事及翌朝、剩可令闕怠之段、無勿體之間、爲總社申付之處、令緩怠事、言語道斷之子細也、(本文見于越後國石河庄下、)

同年五月、神人陳答狀云、丹波國三和庄公用并御服錢、以之被切向事不能承引故、彼公用事者、或及月迫、或及翌年矣、於御飯料、以每日所下勤來處也、先未下過分上經年月引違、於無力神人一向難叶間、不領掌旨、非其過者歟、(本文見于越後國石河庄下、)

〔賀茂社諸國神戶記〕　乾

梅原莊代官齋藤彌次郎

美濃國梅原庄

文明三年五月、祠官言上狀云、美濃梅原庄代官土岐被官齋藤彌次郎請口之分、京着之定三百九十余貫之處、亂世以來、公用不致沙汰者也、但自地下直進物兩季神服并長日人夫等事者、于今令運上訖、(以上、元文勘進賀茂社古代莊園御厨同ジ、)而爲

請取彼神服、社使每年兩度下向之次、令催促公用之處、彼內壹貳千疋之分可致其沙汰之由雖申、猶以令難澁之、最少分致沙汰之歟、雖然使者路錢并在庄公用等ニ引取間、不全社納之者也、神服以下於運上之通路者、自管領佐々木故大膳大夫方江被加成敗之間、于今無爲者也、（本文見于越後國石河庄下、）

朝鮮、書ヲ宗貞國ニ遣リ、我民ノ三浦ニ居ル者、關限ヲ踰越シテ、他境ニ商販スルヲ禁ゼラレンコトヲ請フ、

〔成宗大王實錄〕十　辛卯（文明三年大明成化七年）二年五月朔癸酉、乙亥（三日）、禮曹據慶尙道觀察使關啓、薺浦倭船八隻潛至漆原爾於浦等處、公行販賣、恣意出入、右道僉節制使憒然不察、偶因事至其處見之、不馳報擅釋之、其縣人民不以告、而私相貿易、皆不當請並鞫之、三浦禁標外、倭人毋得擅入、已有著令、若此不禁、恐爭利而鬪、必生釁隙、請諭對馬島主使之禁戢、又於三浦旁邑並令知會禁約、從之、丙子（四日）、禮曹奉敎諭對馬州太守宗貞國曰、貴島自先世謹守約束、凡可以永好之道靡不講究、貴島人寄居三浦者、約定戶數、其居止與互市入海釣魚、皆有常處、不得違越關限擅往他境、此所以息爭止亂、防患於未然、其爲兩利豈不大哉、法久而陵夷、近者來寓薺浦者不告邊將、亦不持路引、連船七八、多載物貨潛往他邑與我民商販、而爲我邊將所獲、若繩之以法、當論以賊船、第我邊將體殿下撫綏之仁、且憐其無知、姑釋不治、但慮無識之徒、狃於尋常、効尤不已、則非特有違前約、彼我買賣之間、爭奪小利、互相戕殺、因而搆釁、勢所必至、前者貴島左衞門五郎爲我邊民所殺、我國田孝閭等見殺於島人、是其驗也、苟不申明禁制、非所以結好長久之計也、本曹具此以啓、敎恁禮曹其諭島主使自禁戢、敬此開陳利害、惟足下一遵舊約、嚴加糾戢、以篤世欵幸甚、

○本書、是歲、日本國王以下使人入京ノ數ヲ限定スルコト、及ビ官私市易ノ禁ヲ嚴ニスルコト見エタリ、便ニ依リテ、左ニ附收ス、

〔成宗大王實錄〕十一　辛卯（大明成化七年）二年九月朔庚午、（十一日）庚辰、禮曹啓、日本國王、琉球國王使臣、諸大臣諸處常倭、九州都元帥源敎直、對馬島特送及五十船、受職倭等出來上京人額數不定、未便、今宜詳定、日本國王、琉球國王使臣則二十五人、諸臣酋使送十五人、對馬島主特送三人、別例則加一倍、九州都元帥使送三人、載物五馱以上加一人、每五馱遞加、毋過五人、諸酋使送一人、每五馱加一人、毋過三人、受職倭人堂上官三人、上護軍以下二人、對馬島主每年五十船、每船一人、每五馱加一人、毋過二人、從之、（使者ノ數ヲ限定ス）

〔成宗大王實錄〕十三　辛卯　二年大明成化七年十一月朔己亥、(二十八日)丙寅傳于禮曹戶曹刑曹曰、前此倭人細瑣之物、許於浦所近官私市、以此雖重禁之物、亦因緣買賣、一一摘發爲難、今後若銅鐵鐵蘇木等國家緊要之物、官自貿易入置浦所、其他皮物藥材等細瑣之物、不甚負重者、輸來京中、令公私貿易、其浦所潛相買賣者、一皆禁斷、違者物主以金銀買賣例論、其浦所通事知情者、斷以死罪、守令及節制使不能禁止者、永不敍用、以絕姦細、以杜邊釁、

銅鐵鐵蘇木等ヲ貿易ス

公武不和

六月小盡　癸卯朔

二日、甲辰、御料所越前高椋郷ノ事ニツキ、幕府ト紛議アリ、是日、之ヲ幕府ニ返付ス、

〔親長卿記〕二　四月廿九日、晴、及晩參內、吉服、新大納言教秀、武家次事被仰出、仍今日披露始也、賀茂下上間事可申云々、仍予奏聞、鴨社假殿造營遲々事、早々可被仰付候由可申云々、可被下女房奉書之由申也、○以上八、文明二年十二月十七日ノ條ニ收メタリ、只今就高椋御料所事、再往被申武家之時分也、只以詞可申云々、其子細仰了、

五月卅日、晴、參安禪寺殿、暫御物語、今度高椋郷事、就爲禁裏御理運、爲武家可被進入江殿之由、雖執申無御承引、仍武家被損氣、已三四十ケ日音信不通云々、其故公家方夏雜訴等事、不可被聞食入云々、爲天下惣別無勿躰之由有仰、世以此趣稱之、

六月二日、晴、下姿參內、今日御料所高椋郷可被返進武家云々、依公家御理運、先日雖被返進武家、猶不心行云々、依不快不可然之間、可被返進云々、珍重了、

三日、晴、○中略次參安禪寺殿、彼間事無爲珍重之由申入了、

公武和融

〔宗賢卿記〕乙　六月三日、夜前禁裏與武將御和睦、此間御不快也、條々有子細云々、公私珍重々々、

腫物

若狹安藝守護大膳大夫武田信賢卒ス、

武藏守ニ任ゼラル

〔宗賢卿記〕乙　六月二日、武田大膳大夫若狹國守護也今日逝去、五十二歳、累日腫物云々、或說、去比任武藏守、敍四品云々、後日聞、四品事不然云々、

家ヲ弟國信ニ傳フ

〔天陰語錄〕寶泉院(信繁)殿豆州前司日山大禪定門讚並序

宗熙ノ肖像贊

○上略日本安藝州有英雄、○中略春秋七十六而終矣、英雄謂誰、寶泉院殿豆州太守日山大禪定門也、長男長福寺殿信榮公、永享年中陣于大和州、受普廣相公之命、談笑討大敵、相公喜甚、割若狹全國以賞其忠、○永享十二年五月十五日ノ條參看、子孫至今襲封爵、人皆謂、有是父有是子、信榮公易簀之日、仲男大通寺殿信賢公立焉、與弟玉華院殿國信公連璧共被、應仁京師之亂、兄弟被堅執銳、百戰百勝名振天下、信賢公不傳其子、而傳玉華院殿、傳弟則傳弟、傳子則傳子者、五帝三覇之法乎、○下略、全文ハ寛正六年十一月朔日ノ條ニ收メタリ、

〔春浦錄〕○相模　武田大官(信賢)令大人宗武居士肖像、

長劍大人功名、竹篦飲氣呑聲、豁開鐵眼銅睛、作略七縱八橫、四海九州群驚、宗門公案現イ(嗄カ)圓成、骼慣戰作家獨分明、凱歌一曲奏太平、

赤松滿祐討手ノ大將

〔若狹國稅所今富領主代々次第〕○若耶群談所收　(政)義尙公ノ時

武田大膳大夫信賢、信榮子、實弟、陸奥守、安藝若狹守護、

赤松滿祐進討、大手大將ノ內也、文明三年辛卯六月二日卒、大人宗武、大通寺殿ト號、

安藝半國ヲ弟元綱ニ分ツ三武田

〔若狹守護代記〕六月二日、若狹ノ國主武田大膳大夫信賢卒、號大通寺殿大人宗武大居士、永享十二年ヨリ文明三年マテ領國三十二年、

信賢卒去ノ後、養子實弟國信家督タリ、若狹安藝半國ヲ領シ玉ヒ、居城ハ若州小濱ト是ヨリ定、後瀨山ノ麓ニ城ヲ築ナリ、安藝ノ國ノ事國信半國領シ玉ヒ、相ノコル安藝半國ハ弟武田安藝守元綱ノ領ナリ、元綱ノ居城ハ元祖ヨリ安藝ノ金山ノ城是名城ナリ、ヲヨソ日本ニ三武田アリ、甲斐ノ武田、安藝ノ武田、若狹ノ武田也、元一家ヨリ出ル、數代武田ハ甲州ノ領主也、足利氏ノ天下ヲ治メ玉フニ至テ、甲州ニ安藝ヲソエテ領ス、時ニ甲州ヲ捻領ニユスリ、藝州ヲ次男ニユツル、仍テ先ツ二家トナル、今又信賢安藝ニ若州ヲ添

テ領シ玉フ、若狭ヲ捻領國信ニユツリ、安藝ヲ其弟元綱ニユスル、依テ日本國中ニ武田三家ト別也、

若狭屋形
伊豆大人

〔武田系圖〕○清和源氏四諸家系圖纂四之二所收

- 信榮
  - 信賢彦太郎
    - 應永二十七年庚子生、永享十二年五月、奉大樹之命討一色直信、賜其領知若狭國、○幕府、若狭ヲ賜ヒシハ、信榮ノ功ヲ賞セシナリ、本書信賢ニ係クルハ誤レリ、嘉吉元年始入部、從是謂若狭屋形、同三年(元)赤松追討大將軍、大膳大夫、陸奥守、法名宗武、道號大人、世人云伊豆大人、受信榮之禪領兩國、又以舍弟國信相傳兩州、大通寺殿、文明三年辛卯六月二日卒、五十二、
    - 國信
      - 永享十年戊午生、治部少輔、大膳大夫、從四位上、文武達者、歌人、新撰菟玖波作者、寛正應仁年中、武略忠義越諸人、仍爲御相伴衆、以舍弟基綱爲安藝代官、○淺羽本若州武田之系圖ニハ、信繁ノ長子國信、次信榮、次信賢、次基綱トセリ、

〔武田系圖〕○諸家系圖纂一之二下所收　信榮

- 信賢母陸奥守信春女、
  - 伊豆安藝陸奥守、大膳大夫、正四下、法名大通寺大人宗武、虎賁猛將、身長七尺九寸、俗號伊豆大人、承義(教)猛將軍之命、永享十二五十五誅一色義範、世保持賴等、時(特カ)賜一色領若狭國、嘉吉元年移若狭國、聽屋形之號、同年征赤松滿祐、應仁二(マ)輔義視、義材等、文明三六二卒、建寺於若州西津、安藝若狭守護職、
  - 國信
    - 伊豆守、治部少、大膳大夫、正四下、法名玉華院功林宗勳、○中略
    - 基綱○藝州若州兩武田系圖ニハ、元綱トアリ、淺羽本若州武田之系圖ニハ、基經トセリ、
      - 號吉田又武田、從五下、安藝守、无双大力勇者、安藝國代官、
        - ○是ヨリ先、信賢、襲封ノコト、永享十二年七月二十三日ノ條ニ、幕府ノ命ヲ奉ジテ赤松滿祐ヲ擊チシコト、嘉吉元年七月十一日ノ條ニ、赤松敎康ト播磨人丸塚蟹坂ニ戰ヒシコト、同年八月二十四日ノ條ニ、毛利熙房ト入江保ノ地ヲ爭ヒシコト、三年十一月是月ノ條ニ、東寺信賢ノ寺田ニ用錢ヲ課スルヲ幕府ニ訴ヘシコト、長祿二年八月是月ノ條ニ、

軀幹長大

幕府、信賢ノ等持院ノ寺田ヲ押領スルヲ禁ゼシコト、寛正二年八月六日ノ條ニ、畠山義就ノ河内金胎寺城ヲ拔キシコト、三年五月十二日ノ條ニ、一色義直、斯波義廉ノ第ヲ攻メシコト、應仁元年五月二十六日、及ビ七月十一日ノ條ニ、西軍ト實相院ニ戰ヒシコト、同月十七日ノ條ニ、城郭ヲ若狹ニ築キシコト、二年二月是月ノ條ニ、細川勝元ノ命ニヨリ、義視ト共ニ叡山ニ登リシコト、同年十一月十三日ノ條ニ、北白川ニ城キシコト、文明元年五月是月ノ條ニ、幕府、信賢ニ命ジテ國富莊頭家職ヲ小槻雅久ニ交付セシメシコト、同年十一月二十八日ノ條ニ、信賢、弟國信ト如意嶽ニ陣セシコト、二年六月三日ノ條ニ、弟元綱背キテ西軍ニ應ゼシコト、本年正月十二日ノ條ニ見エタリ、ソノ他ノ事蹟ハ各條ニ散見ス、竝ニ參看スベシ、

九日、辛亥、大和奈良原某、室城ヲ攻メテ之ヲ陷シイル、

〔經覺私要鈔〕七十六　六月九日辛亥、霽

一、勝觀房來語云、只今沙汰候、今朝自奈良原（大和南葛城郡）室城（同上）へ押寄候、吐田（同上）ノ豐田ハ室郷ナル間、城馳入之處、捨身命責入之間、吐田、豐田被打候、若黨等大略生涯之間、室城被責落由申云々、以外大儀也、後聞、豐田被打事者不實云々、

豐田某室氏ヲ援ク

十一日、癸丑、幕府、上杉房定、織田伊勢守、同駿河守ニ命シ、兵ヲ發シテ朝倉孝景ヲ援ケシム、

〔昔御內書符案〕○後鑑七十所載

越前事、朝倉參御方上者、遣一勢令合力者、可爲神妙候也、
（文明三年ナルベシ）六月十一日　（房定）上杉民部大輔とのへ

相談朝倉、致忠節者、可抽賞候也、
同　日　織田伊勢守殿

同名伊勢守參御方上者、此時節馳參御方、相談朝倉、可致忠節候也、
同　日　織田駿河守殿

城兵多ク戰死ス

○孝景、東軍ニ降リ、越前守護職ト爲リシコト、五月二十一日ノ條ニ見エタリ、

畠山政長、舟橋宗賢ヲ陣中ニ延キテ、貞永式目ヲ講ゼシム、

政長勝元ノ館内ニ陣ス

〔宗賢卿記〕乙　六月十一日、是日於畠山尾張守政長前管領陣所、細川右京大夫(勝元)屋形内也、予講式目、兼日依所望如此、今日初度、

十八日、於尾州陣屋講式目、

廿八日、向尾張守陣屋、講式目、

七月八日、於尾張守陣屋、講式目、在盃酌、

筒井順永ノ部下今市新弃順、古市胤榮ノ部下今市東ヲ殺ス、是日、胤榮、弃順ノ城ヲ攻ム、弃順逃走ス、

〔大乘院日記目錄〕三　五月十六日、今市新弃順、今市東致害之了、珍事、新ハ筒井披官也、東ハ古市披官也、(被以下同ジ)

六月十一日、今日今市新發向、古市沙汰也、

〔經覺私要鈔〕七十六　五月十六日戊子、天氣曇

一、今市東ト云者、爲同新沙汰打之云々、不便次第也、

胤榮ノ警戒

十九日辛卯、自夜前雨下、甘雨云々、

一、今夜夜廻等、古市加下知之間、用心事外也云々、神妙、

六月八日庚戌、霽

古市胤榮來、就今市公事、此邊モ可用心事候、御内者共ニ被仰付て、不禰番ヲ可被沙汰之由申之間、不可有子細之由仰了、仍自今夜番事仰付了、

一、丑刻自山村馳人云、今市勢事外ニ色メキ候、可有御意得之由申云々、片山彌三郎申次テ、意得之由返事云々、

十日壬子、霽曇

今市公事、番條自一昨日彌勒堂ニ令堪忍、色々雖計略、古市不及對面式之間、號遁世今朝罷歸云々、堯善同前、

胤榮番條ノ調停ヲ斥ク

一、番條未罷歸云々、籌策事猶執心歟、比興、

十一日癸丑、自夜雨下

一、爲陣取巳刻古市出陣、於八島付着到處、今市不及自燒落了、仍今市分悉古市者共罷入燒拂云々、今市事過分於事任雅意之間、無程削跡了、冥罰之至殊勝々々、

胤榮弃順ノ城ヲ燒ク

一、今市ニ兩所寺在之（東光臺寺西蓮臺寺）云々、東光臺寺ヲハ今市東申預、西蓮（臺脫）寺ヲハ
發向之間壞取了、不便、

十二日甲寅、霽

一、泰尊（榮賢房）來、今市事、古市淵（緣カ）組之間、定自愛歟云々、對面了、

〔經覺私要鈔〕七十七　七月十三日甲申、霽

一、古市自万歲今日罷歸云々、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　七月十三日

一、自万歲歸陣云々、則古市歸了、

十八日

一、古市來、條々巨細仰了、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年八月二日裏

（端裏書）「禪定院御房へ」

きと申間一紙用候、

今日巳刻爲陣取、古市令出陣、於八島着到を付之處、今市取物も不取敢令沒落了、自燒□□不沙汰事、誠冥罰之至無申計候、仍古市者共罷入候て、父子城燒拂剋伐竹木候、先以目出候、定被聞食哉あれとも、令申古市、いまさ八島より陣取候、筒井大勢よてからへ罷入由風聞候、無心元なと申よし候、

今市東ハ古市ト緣組

亂榮八島ニ陣スヲ幷順城ヲ燒キ沒落ス

筒井ノ兵奈良ニ入ル

□□

六月十一日

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年七月廿六日裏

返〳〵文ニひとりそらいこそせられ候へつるとも、こゝへ候へゝ（こ）〳〵
と祈念候、腹をきらせ候て、御怒とを散候やよ存候つる所よ、年（マ）まさ〳〵
〳〵にけ候て心地あ〳〵く候、

都鄙申合候て令治定事よて候お、人々お成さりよ存候て、番條以下令折中候間、おゝしく候て昨日ハ申了、仍只今當方之儀無煩責落了、於山城事者、隨仰罷出可抽忠懃之由立飛脚候と申者候、（重々カ）すゝ今市自燒おさへ候へく（マ）候て沒落候とて、矢負以下まて口々ニむらひ候事ハ、誠冥罰至と覺樣候、只今彼跡可成荒野とて、光臺寺まて燒拂之由申候、寺ハ無勿躰事候歟、自是以前進人了、いまさ不參着哉、くせ事よて候、謹言、

六月十一日　□□

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年八月朔日裏

天下兵亂大和安全

番條蕘善調停ニ努ム

芽順雅意ニ任セ門跡領ヲ妨グ

又稱六方儀、中院庭石令引候事候、天下錯亂之時分、如此儀風流以下驚耳目樣ゟ承及候、一天下大略兵國之樣候處、當國獨安全候間、併大明神御擁護と、晝夜朝夕難有存事候間、有限懃行之外も、惣別懇祈のミよて候て可然之處、榮耀之時節おとの樣ゟ寺門くるひ候ハん事、云外聞云冥顯難測樣候、及八旬高齡、いゝおる不思儀おゝ見候ハんすらんと眞實非無怖畏候、隨而大內衆大佛お燒候て、後代の名をのこ〳〵候ハやと申おと聞候、淺增〳〵く存計候、近日若靜候ハゝ、一日參候て風呂をも可張行申候、兩三日樣と思召し候、

此間不申承鬱望無極候、さても今市公事、胤榮心中いゝ樣一矢射候ハてハと存候歟、都鄙欲申合之處、番條兩三度罷出、結句自一、昨夕敷居候て了簡之間、大略無爲ニ候ハんするゝおと口遊候、並蕘善同敷居候て計略候哉、一兩日以前胤榮來候て、東口番事申旨候間、內者も候ハぬ事候間、千万無沙汰事も候てハ可爲一大事間、難治之由再三雖固辭候、先蹔間よても可被仰付之由申間、畑已下五六人おらてハ候ハゝをとも、久事ハ不可叶候、十日廿日事ハ可申付之由申定候、其時今市此間任雅意、門跡領共煩、併此奴原所行處、蒙冥罰候て、致不思儀□とて御悅喜之由物語候間、胤榮も如法入興候ッ、妙量院と申者ゝ房領とも押留候間、每年信讀大般若講誦之躰候而、懇念もおそろ〳〵く候なと申つる處、相加番條候て、蕘善今日まて三日つめ候て劬勞候、よも御邊御心中左樣ゟ候ハゝ、如此候へ〳〵と楠葉（元次）以下申沙汰候間、尤なる樣ゟ今分ハ今日樣可成無爲候哉、然者彌今市可任雅意候間、爲諸衆可爲魔緣候、但受御意候（マヽ）やゝて非無疑□□也、ゝ〳〵く、

□□

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年七月十七日裏

（色紙）御番衆御中　古市胤榮

御書忝畏入候、以參上可申上候通可煩御披露候、今市樣定可被聞召候間□□不申上候之由可有御披露候、恐々謹言、

六月十一日　胤榮（花押）

御番衆御中

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年七月二十四日裏

一、〇上略、全文ハ五月二十一日ノ條ニ收メタリ、今市公事可屬無爲候歟ゝと申說候、御返事まても

御座あるまゝく候由、可有御披露候、恐々謹言、

六月十一日　兼雅

大納言律師（尊譽）御房

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年八月六日裏

將又井山之御用脚嚴密ニ申候間、先千疋進上申候、則此御使ニ付進し候、

自公方樣被下御書候、畏頂戴仕候、抑今度今市方公事、如今者不可有殊儀候哉、每度御懇被仰下候、忝畏令存候之由可有御披露候、恐々謹言、

六月十五日　家則（長田）（花押）

御番衆御中

○コノ後、井順兩頭屋ニ出仕ス、胤榮、兵ヲ擧ゲテ順永ヲ詰問ス、依テ井順復タ遁走スルコト、四年十一月二十六日ノ條ニ見ユ、

十二日、甲寅、義政、足利政知ヲシテ、造内宮料役夫工米ヲ關東諸國ニ督徵セシム、

〔御内書符案〕文明三、關東方　貞英　○筑前

（伊勢兵庫助貞宗）兵奉

造内宮料關東國々役者（夫カ）工米事、相副事書訖、嚴密可究濟之旨可被下知之狀如件、

六月十二日　御諱御判

（足利政知）左兵衛督殿

○役夫工米ヲ關東諸國ニ課セシコト、三月二十七日ノ條ニ見エタリ、

義政、之ヲ政知ニ督促スルコト、五年六月二十九日ノ條ニ見ユ、

東將野田泰忠、西兵ト山城粟生ニ戰フ、

〔別本〕前田家所藏文書〕

野田彈正忠泰忠軍忠事○中略、全文ハ應仁元年正月十五日ノ條ニ收メタリ、

一同（文明三年）六月十二日、於西岡（山城乙訓郡）粟生合戰仕、○中略

右所々忠節、大概注進如件、

文明六年三月日　一見了　判

○泰忠、西軍ト善峯寺ノ麓ニ戰ヒシコト、二月二十八日ノ條ニ見エタ

リ、コノ後勝龍寺ニ戰フコト、七月二十三日ノ條ニ見ユ、

大内政弘ノ兵、山城椿井城ヲ攻メテ之ヲ陷シイル、

〔大乘院日記目錄〕三　六月十二日、大内手者於山城合戰、山城衆自害了、

十四日、就山城事奈良中群勢在之、

〔經覺私要鈔〕七十　六月四日丙午、霽

大内勢少々山城へ下云々、山城椿井（相樂郡）等ニ有新城可責其用歟云々、

六日戊申、霽

春圓大來、世上事色々相語者也、山城事十日とも不可延引之由申之、然者十二三日比歟、暦を見ニ、日次可然旨令推知者也、

九日辛亥、霽

（楠葉入道）又云彼入道子四郎右衞門丞夜前下人云、明日十日下部一人山城マテ可給之由申之云々、山城沙汰事實事歟、先日春圓大密語云、京都ヨリ勢仕十二日由申了、實事歟、

一、越智岸田云者、今朝自京馳下、直越智ヘ下向云々、古市（胤榮）片時對面歟、

一、昨日鷹山奥、陵、狹川、笠間等來、古市合戰評定歟、今日モ陵又來云々、有談合子細歟、

鷹山等古市胤榮ト軍議ス

椿井城

十日壬子、霽曇

一、明日京勢二頭此邊ヘ可來云々、

十一日癸丑、自夜雨

一、今日譽田以下山城ヘ罷下候條治定了、仍爲古市使平清水源左衞門、長井與次郎兩人罷向由申之、子細者此方事卽時治罰了、然上者御用事候者罷出、涯分可致奉公之由申云々、可然、

十二日甲寅、霽

山城椿井上山ニ山城面々今度新搆城在之、然今日大内衆自後山取向テ責之間被責落了、立籠衆狛下司普賢寺中、下狛大北、田那部（山城綴喜郡）別所四人先被打之由、古市ヘ告來云々、其外事未分明、以外事也、如今者木津定可被責落歟、彼城責落後、軈取向云々、

十三日乙卯、霽

一、印盛（林教房）今日當番之間、自藥師寺來而、大内衆（大和生駒郡）蓬來ヘ取向歟之間、爲近所事無心元由申之、相誂番松若馳向了、

譽田以下山城ニ向フ

大内氏ノ兵背後ヨリ城ヲ攻ムル

椿井城ヲ拔キテ木津ニ及バントス

大内氏ノ兵大和ニ向フトノ說

大内衆木津へハ取向不及責分、在其所存難知云々、

〔大乗院寺社雜事記〕四十七　文明三年八月朔日裏

大内衆大佛ヲ燒候て、後代の名をのこ〜候ハやと、申あと聞候、淺增〜く存計候、○上下略、全文ハ十一日ノ條ニ收メタリ、

大内氏ノ兵大佛ヲ燒カントスト云ノ説

○大内氏ノ兵、木津ヲ攻メ、吐師、相樂等ヲ燒キシコト、四月二十一日ノ條ニ見エタリ、コノ後、河内ニ入ルコト、本月二十一日ノ條ニ見ユ、

十四日、丙辰、祇園御靈會ヲ停ム、

〔續史愚抄〕卅九　後土御門院上　六月十四日丙辰、祇園御靈會無沙汰、宣胤卿記追、

土寇、西將斯波義廉ノ營ヲ攻ム、

〔親長卿記〕二　六月十三日晴、今日有野伏云々、於山城合戰在之、自西構軍勢令合力之間、不散勢之樣、於此構有合戰者可然云々、仍如此歟、此事於他所有合戰之時每度如此也、但無殊事、無詮歟、結句山城在所可尋合戰不快、御方數十人被打取云々、

東軍利アラズ

十四日晴、今日有野伏、責武衞(斯波義廉)構云々、

十六日晴、○中略　着大寢之處、世間聊物忿、敵押寄誓願寺邊之由風聞、仍御近邊之間馳參安禪寺了、已靜謐了、

十七日、己未、赤松政則、播磨伊和神社ニ祈禱料所伊和東ノ公物二千疋ヲ與ヘ、其地ヲ返納セシム、

〔伊和神社文書〕三　○播磨(宍粟郡)

上月大藏丞跡播州伊和東事、爲御祈禱料所近年雖有御寄進、以公物內現脚貳千疋宛可致社納旨被仰付堀出雲守訖、然上者早下地ゟ可被去渡上月又三郎代之由候也、仍執達如件、

文明三　上月又三郎

六月十七日　阿閉重能

播州(伊和神社)一宮社僧祝御中　浦上則宗

播磨國一宮寄進狀之事

合壹段者但本所分狀安名之內、修理米田分米壹石貳斗貳升者、

右限永代ゟ御寶前大般若經、爲公私正月亥日、可有御祈禱候、若於此下地有違亂輩(カ)輩違亂者、爲社家仁御屋形へ歎可被申候者也、依狀如件、

安丸光綱

文明三辛卯十一月十五日　安丸河内守光綱(花押)

○政則、伊和東ノ地ヲ伊和神社ニ寄附セシコト、應仁二年三月三日ノ條ニ見エタリ、又安丸光綱ノ、祈禱料所ヲ同社ニ寄進スルハ本日ノコトニアラザレドモ、便宜合敍ス、

畠山義就ノ部將甲斐莊某、和泉ヲ徇ヘ二城ヲ取リ、守護代某ヲ斬ル、

古市胤榮甲斐莊ニ對面ス

〔經覺私要鈔〕七十五　三月五日戊寅、雨下

一、畠山内者甲斐庄、及晩付當所乞請、尋所、京都ヘ可罷通之由申間、古市(胤榮)罷出對面云々、

六日己卯、雨大風、但戌刻風止了、

一、甲斐庄於送料長田(マヽ)筑前(家則)若黨以下相副、至鷹山遣云々、

〔經覺私要鈔〕七十六　五月廿二日甲午

甲斐莊

一、畠山内者甲斐庄下着古市(大和添上郡)、甲百五十計云々、

廿三日乙未、雨

今日午刻甲斐庄向古市、自其河州罷下了、自古市送衆一族若黨等副遣了、

甲斐莊河内ニ下ル

(磯城郡)豐田邊マテ云々、豐田又十市(同上)邊マテ可送、自其又十市遣清送云々、何邊マテ送哉、

六月十七日、己未

甲斐庄打入泉國、城二追落云々、守護代被打間、頸ヲ上京都了、今一城在之、只今是ヲ責云々、武勇譽大哉、

○甲斐莊兄弟戰死スルコト、二十三日ノ條ニ見エ、

甲斐莊和泉ニ入ル

二十一日、癸亥、大内氏ノ兵、河内ニ入リ、東兵ト戰フ、

河内和泉騷擾

〔經覺私要鈔〕七十六　六月廿一日癸亥、霽

一、自覺朝方申云、大内勢打入(河州)闕郡間、河内泉兩國以外騷動云々、又及合戰云々、

○大内氏ノ兵、山城椿井城ヲ取リシコト、十二日ノ條ニ見エタリ、畠山義就ノ將遊佐五郎、河内ニ入リ、東兵ト戰フコト、七月二十日ノ條ニ見エ、

朝倉孝景、興福寺別當經覺ニ囑シ、一萬座觀音經、眞讀大般若經ヲ長谷寺ニ行ハシム、

紀伊衆根來衆河内若江衆相互ノ戰死者

〔經覺私要鈔〕七十六　六月廿一日癸亥霽

一、自北國商人罷上次、自朝倉孝景方申云、於長谷一万座觀音經、並信讀大般若經被仰付候て可被下候、於布施者以後便必可進上之由、楠葉元次申送、雖有朝倉狀、路次不快之間不進上云々、

二十二日、甲子、畠山義就ノ部將遊佐五郎、河内ニ入リ、火ヲ所在ニ縱ツ、

〔經覺私要鈔〕七十六　六月廿二日甲子霽

一、遊佐五郎此間野崎（河内北河内郡）ニ取陣、然近日打出客坊、追落其所被陣間、河内所々燒云々、

○義就ノ部將甲斐莊某、和泉諸城ヲ攻略セシコト、十七日ノ條ニ見エタリ、コノ後、遊佐五郎、河内三箇ニ陣スルコト、七月二十日ノ條ニ見ユ、

二十三日、乙丑、義就ノ部將甲斐莊某兄弟、東兵ト和泉ニ戰ヒテ敗死ス、

〔經覺私要鈔〕七十六　六月廿四日丙寅

一、於泉州昨日有合戰、根比衆（紀州來）、河内若井（江）衆與甲斐庄合戰、甲斐庄兄弟内者共百五十人悉被打云々、敵方ニモ貳百人計被打之由有其聞云々、以外事也、

〔大乘院日記目錄〕三　六月廿三日、於和泉國甲斐庄兄弟打死了、

上杉氏ノ兵利根川ヲ渉ル

○甲斐莊某、和泉ヲ略シ、守護代某ヲ殺セシコト、十七日ノ條ニ見エタリ、

二十四日、丙寅、上杉顯定ノ部將長尾景信、足利成氏ヲ古河城ニ攻ム、是日、成氏走リテ千葉孝胤ニ依ル、尋デ幕府、顯定ニ命ジテ之ヲ討ゼシム、

〔鎌倉大草紙〕○上文ハ、三月是月ノ條ニ收メタリ、

〻上杉方勝ふの已、同五月長尾景信大勢を引卒して古河城へ向、城中の兵共沼田高三浦の者とも馳出、爰を先途と防ぎれとも、長尾大勢入替責ぎれい、六月廿四日遂に落城して、成氏千葉をさしておちぎまひて孝胤を賴給ふ、此時諸軍散々ゟ成行々れとも、結城一人供奉す、房州乃里見、上總の兩武田、小金の原、其外近國の勢馳集て是を守護せ、○下文ハ、四年是春ノ條ニ收ム、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年七月二十四日裏

○上略

一、關東も京方よく候て、利根川を越候、○中略、全文ハ、五月二十一日ノ條ニ收メタリ、

六月十一日　　兼雅

大納言（尊譽）律師御房

〔御内書符案〕文明三、關東方　貞英　〇筑前

（飯尾肥前守之種）飯肥奉案文出之

關東事、連々依不存等閑、今度相催同心輩參御方、令對陣古河城之旨上杉四郎註進到來、尤以神妙、彌可抽戰功候也、

九月十七日　佐々木（政清）近江入道とのへ

（伊勢守貞宗）伊奉

就小山下野守、並小田（光重）太郎降參、〇五月七日ニ本條アリ、御方於所々得勝利、殊成氏引退下總國之由註進到來訖、先以目出度候之狀如件、

九月二日　左兵衛督殿　御諱御判

飯肥奉案文出之

成氏事沒落下總國之旨就註進、不日可進發之趣、被仰上杉（顯定）四郎訖、連々無等閑之由被聞食之條尤神妙、此刻一段可致忠節候也、

九月十七日　小峯下總守とのへ

白川彈正少弼（政朝）とのへ

同前

成氏事沒落下總國云々、不移時日相催諸勢令進發、可勵戰功候也、

九月十七日　上杉四郎とのへ

同前

成氏事沒落下總國云々、不移時日相催諸勢可進發之旨被仰顯定訖、別而廻計略嚴密可致其沙汰候也、

同　日　長尾左衛門尉（景信）とのへ

〔鎌倉大日記〕文明三辛卯、成氏古河城沒落、移千葉館、　長尾景信向古河進陣、古河沒落御陣、千葉御動座、

〔永享記〕古河城ノ事

其後世治リ、公方御代ヲ續セ給ヒシニ、〇前段應仁役ヲ敍ベタリ、又關東ハ彌亂テ、文明

武士ノ心根

三年辛卯、關東ノ公方成氏、古河ノ城ヲモ爲上杉被責落、憑千葉介爲迂千葉城玉ヲ、世已ニ雖及澆季、偏ニ衰行ハ今ノ武士ノ心根ナリ、弓矢取ノ本意ニテ、死ヲ善道ニ守リ、名ヲ義路ニ不失トコソ嗜ヘキニ、僅ノ欲心ヲ含テ、譜代ノ主君ヲ傾ケ、聊遺恨ヲ憤テ、年來ノ恩顧ヲ忘レ、忽ニ背テ敵トナリ、闕トナル、等持院贈左府公、爲武將以來、戴恩荷德夏、諸人皆是幾千万ソヤ、持氏將軍御運盡果テ給ヒ、御自害ノ後、諸家忽ニ飜テ、鎌倉ヲ追落シ申、剩古河城サヘ落サセ給ヒシコト、如何ニ口惜ク思召ケン、（下略、成氏、古河城ヲ攻メテ之ヲ復スルコトニカヽル、四年是春ノ條ニ收ム、）

〔鎌倉管領九代記〕五　成氏公與上杉顯定合戰敗北付和睦

文明三年乃春、成氏又軍兵を催〳〵て、山內乃管領上杉民部大輔顯定と戰ふ、成氏のなハにして敗北し、（以上ハ、三月是月ノ條ニモ收メタリ、）古河城よりもたまり得ず、千葉陸奥守康胤（孝下同ジ）を賴みて常州（總）千葉の城ふぜ籠られ〻ふ、諸方の軍勢をまゑくといへとも、一人も馳つくえのれ〳〵、

〔鎌倉九代後記〕文明三年、成氏ト上杉顯定相戰テ、成氏討負ケ、古河城ヲ去テ、常州千葉城ニ移ル、千葉陸奥守康胤是ヲ扶助ス、

多賀谷家植成氏ヲ千葉ニ送ル

〔喜連川判鑑〕左馬頭從四位下成氏、童名永壽王丸　辛卯文明二（三）成氏、上杉民部大輔顯定ト合戰、成氏公敗北、千葉康胤ガ館ヘ御移リ、

多賀谷高經卒ス

〔圓福寺記錄〕（多賀谷）高經氏家之弟之子、任下總守、（略）中文明三年、上杉民部大輔顯定攻古河、成氏出奔、往于總州、憑千葉陸奥守、歸也修造大寶八幡宮、十六日卒、（年、月闕、）法名祥英、道號傑叟、（自文正元至文明十五凡十八年、○高經卒去ノ年月詳ナラズ、傾宜茲ニ收ム、）

長沼朝重古河ニ戰死ス

〔長沼系圖〕（十一）（○下野國志所收）宗于　駿河守、藤四郎、法名一露覺無、

朝重　駿河守、初名泰重、文明三年辛卯五月五日從古河公方成氏、於古河討死、六十三歲、法名順譽覺道、

重政　亦四郎、

○成氏、兵ヲ伊豆ニ出ダシ敗退セシコト、三月是月ノ條ニ、小山下野守等ノ幕府ニ歸降セシコト、及ビ長尾景信等、下野赤見樺崎兩城ヲ拔キシコト、四月十五日ノ條ニ見ユ、成氏古河ヲ復スルコト、四年是春ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔新篇武藏風土記稿〕七　豐島郡十一　岩淵領　上駒込村　妙義社、祭神日本武尊、左ハ高產靈神、右ハ神功皇后、應仁

天皇凡四座、皆白幣ヲ神體トス、社傳曰、○中略又云、文明三年五月、足利成氏、古河ヨリ葛西ニ出張ノ、上杉ト對陣、然ニ上杉ハ、鎌倉ニ退テ、長尾太田等同六月古河ヲ攻落シ、成氏千葉ニ奔走ス、此出陣ノ前、太田道灌當社ニ神馬寶劍ヲ捧テ祈念シ、

太田持資戰捷ヲ武藏妙義社ニ祈ル

雲拂フ此神垣ノ風ノ音　道灌

草ヲモ木ヲモ吹シホリ行　兼信

凱旋ノ後社領ヲ寄附ス

兼信ハ、道灌カ近臣樋口與三郎ナリ、凱旋ノ後社領十五貫文ヲ寄附ス、其時ノ詩云、

秋風靡雲社前庭、一皇戎衣凶賊平、月光不敝（蔽カ）暉神武、千齒赫乎奉威明、

〔下總舊事考〕十一廢城　千葉故城址

千葉故城址

子孝胤自立稱千葉、後據此、未幾更築印播郡將門山移居、而後屬誰也不詳、○下略

本佐倉故城址、在印播郡本佐倉根小屋地、所謂將門山城是也、相傳、平將門始築、後千葉輔胤改築、或曰、長祿中胤將移此、或曰、勝胤移此、自千葉豬鼻移居焉、輔胤子孝胤、孝胤子勝胤、勝胤子昌胤、昌胤子利胤、利胤子親胤、兄富胤、富胤子邦胤相繼居此、○下略

二十五日、丁卯、幕府、朽木貞綱等ニ命シ、武田國信ト與ニ兵ヲ敦賀ニ出シテ、西黨ヲ討タシム、

〔朽木古文書〕甲六號ノ一

越前國敦賀郡境出陣事、申談武田治部少輔（國信）、速發向之、一段可被致忠節、依戰功可被行恩賞、若令違□（背カ）者、可有異御成敗之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明三年六月廿五日　右京大夫（細川勝元）（花押）

佐々木朽木彌五郎（貞綱）殿

〔朽木古文書〕甲六號ノ二

任先度上意旨、早越州敦賀津ニ出陣候者可然候、恐々謹言、

三月廿一日　勝元（花押）

佐々木朽木殿

○以下ノ文書、皆年ヲ缺ク、蓋本年ノモノナラン、

就鶴賀出陣事、被成御教書候了、仍而武田衆被申談、不日進發候ハヽ、可然候、恐々謹言、

六月廿二日　勝元（花押）

朽木彌五郎殿

〔朽木古文書〕無號茶表紙

文明三年六月二十五日

就出陣、御内書進之候、今度時宜乍上意被申、別而奔走候て、早々御出陣可爲祝着候、尙々不可御延引候、其分可有御心得候、恐々謹言、

九月九日　　朽木彌五郎殿　　（六角）政堯花押

進之候

是月、木津ノ兵、西兵ヲ山城稻八妻城ニ攻メテ之ヲ拔ク、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年七月二十四日裏

○上略、

一、山城之稻八妻も、自木津夜打落候了○中略、全文ハ五月二十一日ノ條ニ收メタリ、

六月十一日　　兼雅

大納言律師御房

○大内氏ノ兵、木津ヲ攻メシコト、四月二十一日ノ條ニ見エタリ、木津ノ兵、大内氏ノ兵ヲ斬ルコト、八月二十五日ノ條ニ見ユ、

七月小壬申朔盡

一日、壬申、前權中納言甘露寺親長ニ命ジテ、增鏡ヲ書寫セシム、是日、之ヲ獻ズ

〔親長卿記〕二　五月十三日、陰、參內、自禁裏依仰、令書寫眞寸鏡御本上中之間、有同事若（者カ）以他本可書歟之由、以源中納言（飛鳥井雅行）申入之、何樣可被尋他御本之由有仰、仍可尋申入之由申入了、

六月一日、晴、入夜參內、御祝之儀如前々、眞寸鏡下同可書進之由有仰、

七月一日、晴、早旦參內、自今日當番之故也、書寫眞寸鏡今日進上、可令校合之由有仰、於外樣番衆所仰人々了、

三日、晴、眞寸鏡校合、今日進上、於御前可直付之由有仰、有用捨事、以他本有校合、依叡慮予注直了、

〔親長卿記〕四　文明五年二月六日、晴、益鏡可書進之由有仰、去々年予書之殘也、

三日、甲戌、石淸水放生會ヲ追行ス、

〔續史愚抄〕卅九後土御門院上　七月三日甲戌、此日有石淸水放生會、社家沙汰、還幸

延引、去年分也、（秘抄、親長卿記追、）

十日辛巳、有放生會還幸儀、（去年分、秘抄、）

〔石清水八幡宮記錄〕二　石清水八幡宮放生會延引例文、

文明二年一向越年、同三年七月七日（申刻）御行、八日（戌刻）列、九日自辰刻行之、

十日（未刻）還御、

○放生會延引ノコト、二年八月十五日ノ條ニ見エタリ、

四日、（乙亥、）近畿旱ス、大和七大寺ニ命ジテ雨ヲ祈ラシム、

〔經覺私要鈔〕七十七　八月三日癸卯、旦小雨

京都御奉書（柚留木法橋）重藝取進之、只今在京云々、兩通同時到來了、

祈雨事、可抽懇祈致精誠之由、可令下知寺門並七大寺給由、被仰出候由、

可被披露寺務樣旨、可申旨所候、恐々謹言、

七月四日　　刑部卿忠弘奉

大進法橋御房（一通ハ、御不豫祈禳ノコトニカルヲ本ト、二十一日ノ條ニ收ム、）

於正文者遣供目代了、至七大寺者、寫案文各々別當所ヘ可遣之由仰繼舜了、

立願

踊念佛

學侶六方祈雨

大般若經讀誦

〔親長卿記〕二　七月九日、晴、近日炎旱過法、（五月二十二日以降八月末ニ至リ、雨降ラザルコト、本書毎日ノ記ニ見エタリ、）

廿一日壬辰、天曇雨下、雖不多田地潤、衆人悅也、（大和添上郡）八島一會今朝立願故歟、

廿二日癸巳、霽雨下、隨分甘雨云々、

於八島ヲトリ在之、雨乞云々、

〔經覺私要鈔〕七十七　七月廿日辛卯、霽炎旱勝事云々

廿三日甲午、天曇

今日於八島ヲトリ念佛在之、是モ雨乞云々、

八月十五日乙卯、天曇

一、爲祈雨學侶六方入高山、老若大般若讀誦云々、

十六日丙辰、晴、曇不定

一、爲祈雨學侶六方入招提、於龍池大般若云々、

十七日丁巳

一、今日爲祈雨學侶六方於秋篠野龍池懃行云々、雖有三方入雨不下、

廿五日丁丑、天曇風、月曜申時

一、爲果祈雨宿願、於八島有一會云々、衆人令群集云々、

祈雨結願庶民群集

一、今日於八島有一會云々、衆人群集之間、東假屋ノ上ニ人多上居之間崩了云々、

假屋壞ル

閏八月三日癸酉、旦大雨、自申刻止了、火曜卯戌時

一、學侶書狀

降雨ニヨリテ最勝王經願寫ノ願ヲ果サントス

去月比炎旱過法之間、祈雨事、學侶老若三方入以下盡篇候、結句沙汰、六部最勝頓寫事、籠願書於社頭之處、則降雨普潤滿足間、以吉日可令果遂候、御衣絹以下事、任先規御寺務御沙汰早々被仰付行事方者可目出之由、學侶評定旨、可有洩御披露候、恐々謹言、

八月三日（閏脫カ）　伊與法橋（繼舜）御房　供目代興憲

返事案

降雨ニヨリテ最勝圖繪ヲ供養セントス

當年依炎旱、老若粉骨之由被聞食及候、無勿體候、然而依左樣之儀、降雨之間珍重候、就其最勝圖繪就可有沙汰、御衣絹事、爲寺家可有沙汰由被申哉、御當職雖及度々、一度而無御沙汰之儀候由、可令披露集會給候也、

恐々謹言、

壬八月三日　繼舜

供目代御房

九日己卯、雨、月曜申時

一、學侶狀

學侶ニ寺務最勝圖繪衣絹ヲ沙汰セラレンコトヲ請フ

袖云、尙以無爲御領納無之者、忽可令違亂候、珍事題目之由、同可得御意候、

最勝圖繪御衣絹事、爲寺家御沙汰先規連綿事、御當職中不被經御沙汰旨御披露候、若御職中無最勝圖繪候歟、雖無御職中、寺家御沙汰不及子細候、所詮早々無爲ニ御領納可目出之由、可有御披露候旨、學侶評定也、恐々謹言、

後八月八日　伊與法橋御房　供目代興憲

返答云

彼御衣絹事、當門跡御沙汰跡候者、可被注進候、次樣寺務時事者不可被

知食之由、可被返答旨仰遣繼舜了、

一、申刻參大閤、○中略後向禪定院、條々談合了、先寂勝圖繪事、可爲寺務沙汰之由、學侶申條不可然候、其故者、

一、康正三年六月八日、圖繪候、以心落之儀、御衣絹事加下知了、

一、長祿二年六月十二日、圖繪御衣絹、爲學侶雖申候、不能下行候、是以後者無圖繪之儀歟之由存云々、

尋尊衣絹ハ寺務ノ役ニ非ズト答フ

其外條々事令談合、下向古市了、以狀僧正申給了、自是仰遣返事也、

誠此間者無殊事故不能言上候、長雨迷惑此事候、爲世中以外之由申、抑寂勝万陀羅圖繪御衣絹事、可爲寺務御役由、學侶申入事不可然候、更以不寺務役候、以心落之儀、一度ハ沙汰遣候、別段之儀哉、二度共不沙汰候、これハ近來時宜候歟、於十六善神圖繪者、一圓當職申付候、さ樣事ニより候歟、寂勝時も申勸ゝ覺候、隨而尋尊當職時、康正三年六月八日圖繪候、以心落之儀、御衣絹代下行候、長祿二年六月十二日圖繪御衣絹代、自學侶雖申不能下行候、これ以後者當圖繪候ハす候、寂勝王經供養頓寫計事ハ、度々其後も候歟、圖繪者候ハす候ゝ存候由、可然候樣可令申入給候、

壬八月九日　藤壽殿　尋尊

廿日庚寅、霽

一、學侶狀

學侶前說ヲ主張ス

就寂勝圖繪御衣絹事、御當職御沙汰趣申入之處、無其儀之由被仰出候、康正三年六月八日、寂勝圖繪施行之時、御衣絹爲御寺務御所役御沙汰之條分明候、然上者御衣絹佛臺等、無爲御下知可珍重之由、學侶評定旨、可有洩御披露候、恐々謹言、

後八月廿日　伊與法橋御房　供目代與憲

繼舜先例ヲ擧ゲテ之ニ答フ

返事

寂勝圖繪御衣絹事、度々雖被居其□候、一度號無爲御沙汰之儀候、然而有限事候者、可有御了簡之由思食候間、大乘院殿へ被尋申候處、康正三年六月八日圖繪時ハ、心落之子細之間被下行了、其後長祿二年六月十

二日圖繪候とて、御下行事自學侶度々雖被申旨候、不可叶之由被仰御返事由被申候、縱雖寺務御役候、當時寺領一向無正躰候間、可被故實申之由、可有御披露事候、況以御心落之儀御沙汰事候者、不可得事候、且可被祭申候哉、無足寺領所出、去年御八講維摩會、慈恩會、仏生會以下弁御沙汰之間、於于今者被盡事候、若被存不審候者、可被勘出候哉由、可令披露集會給候、恐々謹言、

後八月廿日　　繼舞

供目代御房

經覺學侶ニ舊記ヲ示ス

九月大朔日庚子、霽

一、就寂勝圖繪事、重學侶御衣絹事、可沙汰之由申之狀到來了、比興之次第也、

十一日庚戌、霽

一、寂勝圖繪御衣絹事、此間兩三代記錄少々見之處、曾以沙汰跡不見出之間、其分學侶へ可申遣之由、仰奉行繼舜畢、

十五日甲寅、霽

一、學侶狀

寂勝圖繪御衣絹事、康正近例勿論候、又舊記分明候、御寺務御沙汰無餘儀上者、枉而以御與隆之儀、御衣絹事被仰付候者可目出、於（候脫カ）御寺務御沙汰者連綿之條、重而可勘例申哉、無爲御成敗可目出由評定旨、可有洩御披露候、恐々謹言、

九月十四日　　供目代興憲

伊與法橋御房

學侶尙ホ前說ヲ執ル

就炎旱儀、寂勝圖繪可被沙汰候、就其御衣絹事、去年度々雖被申候、大乘院殿御寺務之時、康正三年六月八日、寂勝圖繪時、以心落之儀、御沙汰候間、長祿二年六月十二日、寂勝圖繪御衣絹事、又雖被申、以前以心落之儀御沙汰了、今度御沙汰者爲後々不可然由被開條々、終無御沙汰之由被記置候歟、近□（來カ）事上者、定被存知歟、縱又雖可有御沙汰事、他國寺領雖爲一所、無無爲之儀候間、難有御沙汰事、況依非寺家御役、長祿二年無御沙汰上者、非寺家御役之條眼前事哉之由、可令披露集會給候也、恐々謹言、

（文明四年カ）四月廿三日　　經胤（畑）

寺領違亂ニヨリ沙汰スル能ハズ

供目代御房

寂勝圖繪御衣絹事、去年度々雖被申候、大乘院殿御寺務、康正三年六月八日、寂勝圖繪、以御心落之儀御沙汰之間、□□□□□由、長祿二年六月十二日、□□□□□御沙汰候者、爲後々可爲芳例歟之間、色々雖被申、終無沙汰旨被記置候、近來事候間、定被存知歟、縱又雖可有御沙汰事、他國之寺領悉以無正躰間、難有御沙汰候、況依非寺家御役長祿二年無御沙汰上者、只今以同篇之由、可令披露集會給旨□□□□候也、恐々謹言、

四月廿三□(日)　　胤

供目代御房（右二通ハ、本書九月條ノ卷末ニ附載セリ、）

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　八月四日

一、南北鄕人雨乞相舞立願云々、近日請雨法會修之、

五日

一、雨請三方入、今日始之、

廿六日　雨下

南北鄕雨乞立願

八島會

一、昨日八島一會行之、爲祈雨毎度儀也云々、

閏八月九日　雨下

一、安位寺殿入御、（略）中雨乞立願歟、寂勝万々ラ可有圖繪儀、就其御衣絹代事、寺務毎度御役也、可有御下知之由自學侶申入之云々、以心落儀一度ハ御沙汰近例也、予當職中、康正三年六月八日、圖繪御衣絹事、以心落仰付之、長祿二年六月十二日圖繪ニハ、自學侶雖申入不致其沙汰、仍學侶之沙汰也、此後ハ寂勝圖繪ハ無之云々、

〔大乘院日記目錄〕四　明應二年癸丑十月廿九日、於馬場院祈雨立願、南北鄕出錢四座猿樂在之、但觀世不參、仍次日加罪科畢、先日至路次罷下處、令延引旨不居歟、令迷惑自道上洛了、近日又於公方細川方連日藝能在之(三カ)間無越度歟、且不便事也、此出錢兩門跡御童子力者等不出之、去文明二年此儀也、

幕府、興福寺ニ命ジテ、布施播磨守、高田中務丞ヲ還住セシム、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　七月十三日

一、安位寺殿入御就布施事奉書到來、去四日日付云々、

〔經覺私要鈔〕七十七　七月十三日甲申、霽

一、自京都有管領奉書、布施高田可還住事也、
廿三日甲午、天曇
一、布施播磨守並高田中務丞出頭事、去十二日被成管領奉書之間、遣學侶、當國衆徒可下知之由仰遣之處、今日學侶返事在之、悉以加下知之由奉行方へ書狀也、

五日、丙子、山名持豐。山内豐成ニ備後地毗本郷、河北、下原、伊豫領家半濟、信敷東西、津口半濟、岩成下村領家等ノ反錢ヲ安堵ス、

〔山内首藤文書 原題文徵〕三 豐成上

備後國地毗本郷、同河北（深安郡）、同下原（比婆郡）、同伊豫領家半濟、信敷東西（世羅郡）、津口半濟（深安郡）、岩成下村領家等反錢事、已前申下候之儀、不相替令免除畢、可有知行候也、謹言、

文明參 七月五日　山内新左衞門尉（豐成）殿

宗全（山名持豐）（花押）

○是ヨリ先、持豐。豐成ニ信敷東西、地毗莊、津口領家、岩成下村、伊豫半濟ノ公用反錢ヲ與ヘシコト、及ビ信敷東方一圓ヲ與ヘシコト、二年六月十七日、同年十一月二十四日ノ條ニ見エタリ、コノ後、山名政豊、信敷東西ノ内三澤信濃守ノ遺領ヲ豐成ニ與フルコト、七年六月二十五日ノ條ニ見ユ、

七日、戊寅、乞巧奠、

〔親長卿記〕二　七月七日、晴、禁中無指事、被遊梶葉事、雖諒闇不可苦云々、仍如例被尋關白歟、（近衛政嗣）

八日、己卯、出雲日御崎社撿挍日置政繼、杵築大社々司ノ、日御崎社境界、及ビ社領ヲ押領セシヲ幕府ニ訴フ、是日、幕府命ジテ之ヲ返付セシム、

〔日御崎神社文書〕二〇 出雲

出雲國御崎社與杵築大社界事、背往古之例、大社々司押領云々、太無謂、所詮任先規、彼堺並社領（八束郡）大野庄内國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付訖、如元全領知專神用、可被抽御祈禱之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明三年七月八日　下野守（布施貞基）（花押）
丹後守（松田秀興）（花押）

日御崎撿挍（政繼）殿

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社々司押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付御崎社畢、早可被沙汰付政繼代之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明三七月八日　貞基(花押)　秀興(花押)

佐々木孫童子殿

佐々木孫童子　尼子清定

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社々司押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付御崎社畢、早可被沙汰付政繼代之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明三七月八日　貞基(花押)　秀興(花押)

佐々木尼子(清定)殿

多賀高忠

(表書)「御崎撿校殿　御返報　多賀新左衛門高忠」

御狀委細拜見仕候、抑御屋形(京極孫童子)樣、少輔殿(尼子清定)樣、卷數一箱二百疋宛御進上候、致披露御返事取進之候、隨而杵築自兩國造方御知行分狼藉事、御註進之趣令披露候、仍如以前可被立置制札之由、尼子殿被進御書候、又於以後自杵築可停止其綺之由被成奉書候、目出度候、次杵築御崎大堺事、御支證趣御一見候、然間杵築被成召文候、定代官可有參洛候哉、將又御卷數三百疋上賜候、御煩迷惑至候、乍去祝着無申計候、京都時宜委細御代官可被申候、恐々謹言、

七月四日　高忠(花押)

御崎撿校殿　御返報

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社(大社堺事背往古之例歟カ)司押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付御崎社畢、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明四三月廿日　貞基(花押)

文明三年七月八日

佐々木塩冶五郎右衛門尉殿

秀興(花押)

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社司押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付御崎社訖、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明四三月廿日

貞基(花押)

松田參河守殿

秀興(花押)

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社司押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付御崎社訖、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明四三月廿日

貞基(花押)

秀興(花押)

村井信濃入道殿

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社司押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付御崎社訖、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明四三月廿日

貞基(花押)

秀興(花押)

多賀次郎左衛門尉殿

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社司押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付御崎社畢、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候

文明三年七月八日

也、仍執達如件、

文明四
三月廿日

貞基(花押)
秀興(花押)

廣田殿

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社司押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付御崎社畢、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明四
三月廿日

貞基(花押)
秀興(花押)

馬來殿

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社司押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所

々散在田地等、各被返付御崎社畢、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明四
三月廿日

貞基(花押)
秀興(花押)

湯殿

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社司押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付御崎社畢、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明四
三月廿日

貞基(花押)
秀興(花押)

佐世面々御中

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社司押領云

々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所
々散在田地等、各被返付御崎社畢、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候
也、仍執達如件、
文明四
三月廿日　貞基(花押)
秀興(花押)

熊野殿

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社司押領云
々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所
々散在田地等、各被返付御崎社訖、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候
也、仍執達如件、
文明四
三月廿日　貞基(花押)
秀興(花押)

牛尾殿

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社司押領云
々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所
々散在田地等、各被返付御崎社訖、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候
也、仍執達如件、
文明四
三月廿日　貞基(花押)
秀興(花押)

佐々木尼子(清定)刑部少輔殿

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、大社司押領云
々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所
々散在田地等、各被返付御崎社畢、早合力政繼代、可被沙汰居之由、被仰出候
也、仍執達如件、
文明四
三月廿日　貞基(花押)
秀興(花押)

當國中面々御中

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付御崎社畢、早可被逝渡政繼代之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明四三月廿日　貞基(花押)　秀興(花押)

千家直信

千家殿(直信)

出雲國日置撿校政繼申、御崎社與杵築大社堺事、背往古之例、押領云々、爲事實者太不可然、所詮任先規、彼堺並社領大野庄內國守名福富保、同所々散在田地等、各被返付御崎社畢、早可被逝渡政繼代之由、被仰出候也、仍執達如件、

文明四三月廿日　貞基(花押)　秀興(花押)

北島高孝

北島殿(高孝)

十二日、癸未、皇子勝仁疾ミ給フ、實相院准后增運ニ命ジテ之ヲ禱ラシム、

紫宸殿ニ於テ護摩ヲ行フ

〔親長卿記〕二　七月十二日、晴、依若宮御不例、自今日有護摩、實相院僧正參住(任カ)於宸殿有此儀、

十八日、晴、護摩今日結願也、御修法事不事行、有護摩、末代之儀可愁也、

〔華頂要略〕百四拾三　諸門蹟傳四　實相院增運准后、文明三年七月十二日、於紫宸殿爲若君御不例之御祈修護摩、

筒井順永調停

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　七月朔日

興福寺六方衆蜂起シ、沙汰衆某ノ坊舍ヲ襲ヒテ之ヲ毀ツ、

一、自六方可令發向衆中沙汰衆侍從公坊之小堂風評□(之カ)間、寺住輩相籠了、自去月此事興□(盛カ)、然不可有殊子細歟、但魔障不可有子細□□事歟、

二日

一、寺住衆用心□□番云々、各陣取之、六方沙汰、且可爲如何哉、沙汰衆侍從公在所及發向者、爲報答六方沙汰衆寶光院發向之由、內々衆中支度云々、

四日

一、筒井(順永)律師□□六方衆中事計略云々、則下向了、

十二日

一、今日早旦六時分六方蜂起、沙汰衆侍從公在所悉以進發、寶來佐川勢以下、並六方面々各々語勢以下數百出向了、觀禪院早鐘搥之、此間隨分ニ修造之坊舍也、同毋儀在所小路各別也、（春日摠一云々）進發了、此段者別段重科、此間寺住衆可相籠旨雖支度、自筒井方不可相籠之由申遣之間、寺住儀不及是非之沙汰、一向可任筒井云々、但寺住衆少々高畠吉田之在所ニ集會、此子細筒井方ニ申下、內々者寺住衆失面目旨申合歟、惣向事不及力事也、侍從公事外由斷也、少々矢ヲ雖放、無勢多勢之間、不叶沒落、且筒井之儀依相憑、一ハ令由斷云々、比興事也、

（觀禪院鐘ヲ撞キ警戒ス）（順永ニ一任ス）（寺住衆集會）（順永ヲ憑ミ警戒ヲ加ヘズ）

〔經覺私要鈔〕七十　七月十二日癸未、霽

卯下刻勸禪院早鐘搥之由、畑經胤來申、子細不審之處、沙汰衆侍從房自六方進發云々、甲二三百在之云々、此間色々及沙汰歟、然而衆徒棟梁筒井可加扶持之由申上、寺住衆徒等可罷籠由申間、其ヲ相憑用脚ヲサヱ不及隱之間、今朝早鐘時令仰天、資財等欲隱之處、既以公人以下馳入、見聞衆等同以入之間、自內少々雖防出、大勢取懸之間不叶而、物取共物を取罷出間、於屋內者被發向了、縱衆徒等雖加扶持、此間及沙汰上者、お資財可隱之處、無其儀、號、人々ニ被取之條、所存太不歟、次第、此後衆中進退如何、

（棟梁筒井）

○コノ他、六方衆蜂起シテ、宇多戒場、及ビ十市遠清ノ部下備後ノ家屋ヲ破壞セントスルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔大乘院日記目錄〕三　四月廿一日、六方衆發向宇多戒場發向、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　七月十四日

一、昨日相語、一昨日午貝定、學侶六方神水集會、悉以皆參、就神部進發事、衆中定而可申所存歟、雜說在之、自然子細在之者、無力一味同心、猶以可及嚴密之沙汰云々、於衆中者且半ハ失面目歟、雖然不及是非之儀之所、及神水等條、令拓事歟、或說（稱カ）講六方沙汰衆寶光院坊自衆中可返報之由云々、隨而天滿邊用心事、自六方申付歟云々、不審事共也、

（學侶六方集會神部進發）（六方衆宇多戒場ヲ毀ツ）（六方沙汰衆寶光院ヲ毀チテ讎ヲ報ヒントス）

八月六日、（午刻雨下）

一、筒井律師罷上、子細何事哉、今度於神部事、且失面目之間、無一途者不可罷上之由申歟云々、誠以不審無極振舞、千万存外事也、但不及是非沙汰者、先以爲寺社無爲珍重也、所詮此上者寂初成敗不足也、越度者也、此公事出來以後者、就大小衆中二七日集會等一向停止之、如無寺住也、

（順永面目ヲ失フ）（集會等停止シ無住ノ如シ）

七日

一、筒井今日下向云々、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年九月五日裏

御書趣畏承仰候了、抑今度神戸題目言語道斷候、御懇被仰出候、畏入存候、○中略、全文ハ本月二十日ノ條ニ收ム、

七月廿二日　順永(花押)

當御番衆御中

〔尋尊大僧正記〕三寺社雜事記　十二月十五日

一、衆中蜂起、六方沙汰衆罪科、所徒野田之六郎住屋破却了、去神戸間事報答云々、於于今者遲引事也、且又不足事也、但事子細能々相尋之處、自筒井方明舜、學專以下當方之方衆ニ申付、六方十餘人罷出令進發了、是先日神戸返答也、六方ヲ引分テ致其沙汰儀式云々、仍今日ハ六方蜂起也、衆中ハ軍勢少々出之計也、政快玄觀房補六方沙汰衆了、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　九月二日

一、六方蜂起廻文成之、來九日可發向備後云々、子細者卷向山事、穴世宮造作營ノ事ヲ白專ニスト鄕民怒テ卷向山ニ六方ニ寄ス進ス

野田六郎ノ住居ヲ破壞ス

政快六方沙汰衆ニ補ス

備後神主ト號シテ

以下ニ付テ、穴世鄕民等致自專之處、彼備後號神主、一向令自專之間、鄕民等ハ令見所云々、依此無念鄕民等爲所行、卷向山於一圓寄進于六方畢、然之間自六方指下仕丁中綱等、彼山木柴等於令沽却、五万疋計足云々、備後猶以及子細、六方不承引之間、爲備後沙汰買手甲乙人等相支之間、公人等無所詮在庄畢、依此事可進發云々、此事可爲十市之所存者也、十市方儀無承引者、於六方者可失面目事也、傳聞、近日十市事、學侶以下種々及評定、可令罪科之由云々、且一大事々々々、(遠清)

八日

一、明日進發延引云々、十市方儀不成不成哉、

十二日

六方備後可發向云々、

十三日

一、備後進發事、日々六方集會在之、爲寺門大事、旁以大儀共存立云々、內々口遊□大衆可出來云々、

十八日

六方備後ノ居館ニ進發セントス

六方備後ト爭ヒ十市ニ及ブ

一、傳聞備後發向事、沙汰人十五人內外之及神水等、如何樣可沙汰立云々、就其成否條々舜行房源舜房以下筒井方衆又連署取之、是非共可相支云々、內々備後方語故歟是一、就神戸發向事、筒井失面目間、六方事一切可見所之由相存之間、此事不可同心云々、是一、十市近日爲寺門可罪科之由及評定間、所存外ニ存時分、又備後ハ十市披(被)官人也、內々可合力之由申付云々、是一、古市(胤榮)番條等自六方相語之間、涯分可奉公之由存定歟、但筒井所存可背六方之由存定上者、彼兩人分不可成立事、是一、

備後順永ニ説キ相支ヘントス

神部ノ事ニ關シ筒井失面目ヲ

寺門十市遠清ヲ罪セントス

遠清備後ヲ援ク

古市胤榮番條某六方衆ヲ援ク

廿一日

一、就備後發向事、昨日學侶神水集會在之云々、

廿五日

○上略備後發向事廿七日云々、色々折中子細在之云々、

折中

〔尋尊大僧正記〕三寺社雜事記　十月八日

一、筒井今日罷上、何事哉、

九日

一、筒井律師來、見參了、

十五日

一、備後發向、六方衆十人下向、備後屋城並鄉少々、竹木少々可拂之云々、於根本卷向山者無一途之儀、追而可糺明云々、比興事也、自此一兩月種々及大邊事也、然而無殊儀者也、

備後邸宅等ノ竹木ヲ伐ル

十五日、丙戌、興福寺々主兼乘、超昇寺ヲシテ奈良北市新在家ヲ襲ハシム、

〔大乘院日記目錄〕三　六月廿四日、一乘院與新在家俄事出來、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　七月十五日

一、招昇寺(超カ下同)率人勢寄來北市(大和奈良)之新在家所、切門戸並被官人住屋破出令放火了、近所在家ニ亂入、以外時宜也云々、二條兼乘寺主相語故也、於于今者井戸又失面目畢、巨細去月記之、○六月ノ記事缺クルニヨリ、之ヲ知ルニ由ナシ、

井戸某面目ヲ失フ

十六日

一、就新在家事、自井戸方可有返報之由雜說、然之間超昇寺秋篠寶來以下、自一乘院(教玄)被召上、御坊中集會有之、自然子細在之者、爲鄉民等沙汰可追懸之由被相觸之、彼三人雖爲何時可罷上云々、先以下向、

井戸某返報セントスト説アリ

一乘院教玄超昇寺秋篠寶來等ヲ召シテ之ニ備フ

十八日

一、自一乘院内々以西殿承子細在之、自夜前御勢共馳參、以外物忿云々、

十九日

一、以西殿内々承事巨細、一乘院ニ申遣了、又奘舜進之了、

廿日

一、一乘院公事、佐保田（添上郡）庄事故出來也、仍佐保田之下司越昇寺城（超ヵ下司沙）ニ二條兼乘寺主引籠間、於于今者越昇寺與井戸公事邊ニ成了云々、先以珍重事也、

晦日

一、訓英方より書狀到來、一乘院公事、自東北院（俊圓）彡弘方ニ申遣、其使訓英致其沙汰、先日予内々不可然旨申遣故也、彡弘も畏入云々、自他不可然之由申遣了、

八月四日

一、一乘院御使ニ西殿入來、先日力者申也、又式部少輔來、色々物語、昨日一乘院主茶頭東北院云々、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年九月十一日裏

猶々條々無御等閑内々奉候、喜悦々々無極候、

就一ケ條事、御懇奉候條、返々本望至候、兩門之儀無御等閑候者、自然公事篇可事行候、眞實ニ不知所謝候、此子細聽而も可申候處、餘々取亂候間、乍自由無其儀候、さ候間下司令上洛候て、色々令申子細候間、兼乘事、彼在所へ預置候、返々心外事候へ共、計略旨如此成御沙汰候、委細者以西殿申入候也、恐々謹言、

七月廿日　大乘院御房　教言

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年九月八日裏

又太夫不殘令祗候候之由承及候、雖何事候、自然御用事候者、無御隔心可被仰出候由、可有御申候、

一乘院家之御公事計略候事、只今東北院之御使通よて、彡弘方相誘候、先日上意趣彡弘令入魂候之間、近比被入御心如此御定、忝畏存候由、能々可申入旨申候、自然よろしく成候者可申入候、其時一かと御成敗可然候、巨細以參上可申入旨、可預洩御披露候、恐々謹言、

七月廿九日　訓英

舜覺奈良ニアリ大内氏ノ來攻ニ備フ

興福寺衆徒疾ト稱シテ應ゼス

順永等三箇ノ攻撃ヲ他日ニ退朝シテ陣スス若松城兵數十人ヲ斬ル

御當番御中

二十日、辛卯、畠山政長ノ黨、畠山義就ノ部將遊佐五郎ヲ河内三箇ニ攻メントス、因リテ、東將筒井順永、十市遠清、箸尾爲國等若松城ヲ攻メテ之ヲ陷シイル、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七

一、筒井、(順永)十市、(遠清)箸尾(爲國)以下、河内國ニ罷越、可責三个之由云々、彼在所(北河内郡)(畠山義就)衞門佐被官之遊佐閉籠故云々、大儀沙汰、千万難成事哉、若松之城とやらん今日責落了、筒井息舜覺ハ在奈良畢、山城大内方儀、自然儀在之者、可相支之由用歟云々、甲六十計ニテ在奈良也、誠ニ自大内方可沙汰者、以此小勢不可叶事也、且如何、寺住衆徒悉以作病不出頭、是今度之儀○本月十二日、興福寺六方衆蜂起シテ、沙汰衆某ノ坊舍ヲ襲フノ條ヲ參照スベシ、失面目故也、舜覺雖相催不罷出者也、

廿一日、雨下

一、河内陣筒井以下引退了、於三个者追而可責之云々、昨日儀各高名云々、若松城衆大將以下數十人被打了、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年九月五日裏

敵兵剛強大乘院尋尊爪刀ヲ順永ニ與フ

順永等生駒邊ニ陣ス

遊佐越中守譽田平等三箇ニ

御書趣畏承仰候了、抑今度神戸題目、言語道斷候、御懇被仰出候、畏入存候、○以上ハ、既ニ十二日ノ條ニ收メタリ、就中一昨日河州草賀事、河内衆申合罷越候之處、思外敵人ゑたゝりに仕候、過半者令迷惑候、雖然得勝候事、誠以冥慮之至、大慶仕候、依之子細被仰出候事過分之至、忝畏入存候、御爪刀拜領、殊名物祝着畏入候、隨分秘藏可仕候、委細尙光秀可申入候、此旨可然候樣洩御披露所仰候、恐々謹言、

七月廿二日　順永(花押)

御中

〔經覺私要鈔〕七十七

七月廿日辛卯、霽炎旱勝事云々

一、筒井罷向河内云々、畠山(政長)右衞門佐方遊佐五郎河内三个ト云所ニ取陣在之、然ニ若井(江)衆畠山尾張方沙汰トシテ、可責落之由申之間、大和衆少々相語、筒井自身罷向了、甲五百計云々、十市以下語同道云々、先イコマ邊ニ取陣之由有風聞者也、

廿一日壬辰、天曇雨下

一、河内事、自京都右衞門佐方遊佐越中、譽田、平三頭、甲千計罷下之間、三ケヘ雖罷

向、無痛儀之間、筒井等者徒罷歸云々、可尋實説、

一、後聞、三ヶへ押寄大和（衆脱カ）捨楯以下云々、其次第いゝ樣故哉不審、

廿九日庚子、霽

依菅田語古市（胤榮）出陣云々、至長井邊（大和添上郡）處、依有止使、卽時罷歸云々、

八月十二日壬子

一、古市自越智罷歸云々、

○大内氏ノ兵、山城椿井城ヲ取リシコト、六月十二日ノ條ニ、遊佐五郎河内ニ入リ、所在ヲ放火セシコト、同月二十二日ノ條ニ見エタリ、

至リ遊佐五郎ヲ援ク

大和衆兵器ヲ棄テヽ走ル

古市胤榮長井ニ陣シ卽チ引去ル

二十一日、壬辰、疱瘡ヲ患給フ、依テ伊勢大神宮、及ビ大和七大寺ニ命ジテ祈禳セシメ、又、妙觀院有賀ヲ宮中ニ召シ、護摩ヲ修シテ之ヲ禱ラシム、

〔親長卿記〕　二　七月十六日、晴、主上今日有御不豫、夏、流風事歟、

廿一日、陰入夜雨下、主上日々有御發氣、大略流風疱瘡歟、予被召御前、種々有御閑談、每日醫師（爲房卿）參仕、

今日廣亞相等參會、予示云、御不例事無御祈禱事、（主上御祈療事御不受云々）於私内々中堂藥師、（七八人參詣）、元三大師等參詣可然歟、廣亞相尤可然、可相計人數云々、藥師參

醫師爲房

御祈禱ヲ斥ケラル

諸卿私ニ藥師及ビ元三大師

詣（法性寺）爲保朝臣、此外人々召進代官、其人數事可注云々、予執筆、新大納言（勸修寺）教秀、廣橋大納言綱光、予、源中納言（庭田）雅行、右兵衞督（飛鳥井）雅康、（後名）小川坊城等各一人可召進、元三大師（唐橋）菅原在數、自身、中御門中納言（松木宗綱）代可進云々、廣亞相命云、万卷心經各定人數讀誦可然歟、予申云、尤可然、早可書人數云々、卽予書之、（人數及數十人、安禪寺殿、久我通尙前右府已下也、）

廿三日、晴、御不豫同篇、中堂藥師並元三參詣無爲還向了、進上御撫物了、

一万卷心經各讀誦畢、予三百卷也、早旦行水誦之、

廿四日、陰雨時々、爲御不豫御祈有護摩、阿闍梨妙觀院僧都也、於此師跡有例歟如何、於寢殿有此事、自武家申沙汰云々、

〔宗賢卿記〕　乙　七月廿二日、參内裏、天子聊御惱、爲赤疹云々、按察卿（前權中納言親長）出來（於上殿）云、万卷心經讀誦事、明日（廿三日）予三百卷可令讀誦之由被命之、領狀申畢、公卿以下（久我通尙前右府、日野前内府、勸光）亞相、黃門、相公、散位已下、殿上人兩局中、各百二百三百卷宛被仰之云々、

廿三日、讀誦心經三百卷、申廿露寺親長（〇本書赤疹ト爲セドモ、今親長卿記、經覺私要鈔等ニ從フ、）

万卷心經讀誦

義政護摩修法ヲ勸メ奉ル

等ニ詣ス

〔内宮引付〕

御教書

御不豫御祈事、自來廿八日一七ケ日、殊抽寶祚長久之精誠、宜呈天下升平之感應之旨、可令下知神宮給之由、天氣所候也、仍上啓如件、

七月廿二日　　右少辨政顯（勘修寺）

謹上　頭中將殿

下知狀

——旨、御教書案文獻之、仍可被下知兩宮之狀如件、

七月廿五日　　神祇大副判（藤波秀忠）

大司御館

傳達狀

御不豫御祈事、御教書並祭主下知如此、仍獻覽之、早可令存知給候、恐々謹言、

八月二日　　大宮司判（荒木田）

謹上　內官長殿

注進狀

——氏長

皇太神宮神主

依御教書注進、御不豫御祈一七ケ日、殊抽精誠仔細事、

右得去月廿二日御教書並次第施行、謹所請如件、者任被仰下之旨、禰宜等一七ケ日殊抽御祈禱之精誠者也、仍注進如件、以解、

文明二年（三カ）八月日　　大內人正六位上荒木田神主定治 上

禰宜正四位下荒木田神主氏經九人同前

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　八月七日

一、成就院ニ參申、主上去月末ヨリ御惱也、一切奏聞無之之由、綱光（廣橋）卿申下云々、

閏八月十三日

一、中御門（宣胤）下向、京都儀迷惑之由云々、

〔經覺私要鈔〕七十七　八月三日癸卯、旦小雨

京都御奉書重藝取進之、只今在京云々、兩通同時到來了、（○中略、一通ハ祈雨ノコトニカヽル、本月四日ノ條ニ收メタリ、）

御不豫御祈事、自來廿八日、殊抽寶祚長久之精誠、宜呈一天代平之感應之由、可令下知寺門並七大寺給之由、被仰下旨、可被申入寺務樣旨所候也、恐々謹言

七月末ヨリ奏聞ヲ停メラル

文明三年七月二十一日

七月（廿カ）十二日　刑部卿忠弘奉

大進法橋御房

於正文者遣供目代了、至七大寺者、寫案文各々別當所へ可遣之由、仰繼舜了、

〔華頂要略〕三十七門下傳院家四　妙觀院坊領江州高島郡比叡山庄同州志賀郡小櫻本、

祐ヵ奉仕尊應准后鷲尾大納言隆遠卿猶子有賀僧正　（文明）同三年七月廿四日、依主上御不例、於宮中修護摩、武家申沙汰云、

〔續史愚抄〕卅九後土御門院上　八月大一日辛丑、宮中護摩結願歟、親長卿記、

○京都疱瘡流布、左少辨烏丸季光等卒去ノコト、便宜左ニ合敍ス、

烏丸季光卒去

〔親長卿記〕二　七月十日、晴、今夕藏人左少辨季光（廿二歳、烏丸儀同入道次男、左衛門督益光弟也、）死去了、自去八日所勞也、心樣穩便、不便々々、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　七月十四日

一、烏丸辨季光他界、日野內府息七歳兒家德云々、入滅、武者小路息他界、大略（マヽ）餓死云々、烏丸大納言息女入滅、

〔經覺私要鈔〕七十七　七月十四日乙酉、今日夕立甘雨云々、

京都疱瘡流布

昨日（條兼良）太閤御物語云、京都ニハ包瘡（疱以下同シ）以外事也、烏丸弁季光、武者小路弁種光（息脫カ）日野先內府（勝光）息十三歳者、皆以依此包瘡逝去云々、田舍ニモ繁昌歟、隨而衆人令怖畏云々、仍令披見舊記之處、寛仁四年胞（疱）瘡之時、聖主（後一條院）御夢被御覽、麻子瘡之種我作、此七文字ヲ書テ可付背、麻草鬼物畏之云々、仙院召予（師遠記歟）令問子細、申不知之由、仰云、瘡字不得御意給、若草字歟、予申云、尤可然、聲同之時通用、所謂左傳假借之字是也、又仰云、麻草鬼物畏之云々、然則麻子草之種我作ト云コソ、爲鬼物可畏如何、件事尤然、全不及事也、記錄可書之、此分舊記在之間、其マヽ寫置者也、仍少々書之、少者共ニ遣了、

〔烏丸家譜〕資任

- 益光（元光氏）
- 季光（母五條贈大納言菅原爲清卿女）
  - 文安五年月日生、累進侍從文章博士正五位上左少辨、文明三年七月七日（十）卒、（廿四歳、○コノ次ニ四弟アレドモ略ス、）
  - 女子

朝倉孝景。斯波義廉ノ部將甲斐左京亮ト、越前ニ戰ヒテ敗績ス、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　八月五日

一、去月廿一日、於越前國甲斐朝倉合戰、朝倉方打負了、朝倉方以外小勢也、朝倉彈正孝景ハ、稱國司立ヱホシ狩衣等ニテ成殿上人、緩怠振舞無是非、然之間國輩悉以背之、希代儀也云々、今度一天下亂ハ孝景之所行、蒙天罰風情之由及其沙汰、

孝景敗績ノ理由　天下ノ亂ハ孝景ノ所行

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年七月二十四日裏

一、越前之儀朝倉成敵候條顯現之由、今月六日ヨ西方京ヘ自國注進、實説候、○五月二十一日ノ條ヲ參看スベシ、甲斐左京亮者上下二百人計ヨテ、自西方可被下候、分候、乍去延引候事もあるゑく候、○中略、全文ハ五月二十一日ノ條ニ收メタリ、

甲斐左京亮京都ヨリ越前ニ下ラントス

六月十一日　大納言律師御房　兼雅

○孝景、越前守護職ト爲リシコト、五月二十一日ノ條ニ見ヱタリ、又甲斐左京亮ト鯖江新莊ニ戰フコト、八月二十四日ノ條ニ見ユ、

足利成氏。茂木知行ノ敵ニ黨セザルヲ褒シ、那須越後守ト共ニ其城ヲ固守セシム、

結城城ヲ固守ス

〔茂木文書〕三　○羽後

凌遠路申上之條御悦喜候、殊近所者共大略與敵之處、越後守（那須）同心仁於于今致御方候哉、忠節至誠無比類候、千葉介（千葉孝胤）無二補佐申之條、先以御心安候、近日被調時宜、自此口可有御兵義候、其間事越後守在所相拘候樣可廻武略候、結城要害堅固相踏候由被聞召候、事々相談□（此カ）者可然候、謹言、

（文明三年ナラン）七月廿一日　茂木式部大夫殿（知行）

○成氏、古河ヲ棄テ千葉ニ走リシコト、六月二十四日ノ條ニ見ヱタリ、

古河ヲ復スルコト、四年是春ノ條ニ見ユ、

島津立久、禁榜ヲ龍雲寺ニ掲グ、

〔舊記雜錄〕卅九　正文在市來（薩藩日置郡）龍雲寺

制札

一、寺門前殺生人不通之事、

一、所山之材木二葉迄、寺家可爲興行者也、餘城構可用事、

一、寺修造時者、地頭面々可致奔走事、

文明三年七月二十一日

一、奴婢於出入者、不可論之事、

一、雖爲江潮(湖乎)、四个所住侶之僧、能々可撰之事、

仍爲後證之留狀如件、

文明三年七月廿一日　立久御判

上書　龍雲禪寺留狀

〔島津國史〕十一　節山公(立久、大岳公之子也、幼字安房丸、稱又三郎、名紋修理亮、任陸奥守、法名節山玄忠、龍雲寺殿、)文

明三年辛卯秋七月二十一日、公立龍雲寺禁牌、(據節山公舊記、)

二十三日、(甲午)、野田泰忠、西兵ト山城勝龍寺ニ戰フ、

〔(別本)前田家所藏文書〕

野田彈正忠泰忠軍忠事、○(中略、全文ハ應仁元年正月十五日ノ條ニ收メタリ、)

一、(文明)三年七月廿三日、於(山城乙訓郡)勝龍寺合戰仕、○(中略)

右所々忠節大概注進如件、

文明六年三月日　判

一見了

○泰忠、西軍ト西岡粟生ニ戰ヒシコト、六月十二日ノ條ニ見エタリ、

〔附錄〕

〔廿一口方評定引付〕(四)○(山城)　同七日○(此條五月二十五日ト、八月十六日ノ間ニアリ、同ノ字指ス所ヲ知ラズ、)

一、南小路散所申、畠山殿構之堀夫並新衞(齋藤)門方(ヨリ)勝龍寺陣夫等被懸候、地下迷惑之至候、爲寺家免除之由可預御了簡云々、衆議云、當時之儀何難(トモ)及御了簡、地下可致侘事之由可申云々、

二十七日、(戊戌)、本願寺兼壽(蓮如)越前ニ遊化シ、是日、坊舍ヲ吉崎ニ建ツ、

〔蓮如文〕○(原書名無シ)　文明第三初夏上旬ノコロヨリ、江州志賀郡大津三井寺南別所邊ヨリ、ナニトナク不圖シノビイデ、越前加賀諸所ヲ經廻(越前坂井郡)セシメヲハリヌ、ヨテ當國細呂宜郷內吉崎トイフコノ在所スグレテオモシロキアヒダ、年來虎狼ノスミナレシ、コノ山中ヲヒキタイラゲテ、七月廿七日ヨリカタノゴトク一宇ヲ建立シテ、昨日今日トスギユクホドニ、ハヤ三年ノ春秋ハヨクリケリ、サルホドニ道俗男女群集セシムトイヘドモ、サラニナニヘントモナキ體ナルアヒダ、當年ヨリ諸人ノ出入ヲトヾムルコヽロハ、コノ在所ニ居住セシムル根元ハ、ナニコトゾナレハ、ソモ〳〵人界ノ生ヲウケテ、アヒガタキ佛法ニスデニアヘル身ガ、イタヅラニムナシク捺落ニ

掘夫陣夫

越前加賀ヲ經廻シテ吉崎ニ至ル

堂舍ヲ建立ス

信仰ナキ雜輩ノ出入ヲ禁ズ

シヅマンハ、マコトニモテアサマシキコトニハアラズヤ、シカルアヒダ念佛ノ信心ヲ決定シテ、極樂ノ往生ヲトゲントオモハザラン人々ハ、ナニシニコノ在所ヘ來集センコトカナフベカラザルヨシノ成敗ヲクハヘヲハリヌ、コレヒトヘニ名聞利養ヲ本トセズ、タヾ後生菩提ヲコトヽスルガユヘナリ、シカレバ見聞ノ諸人偏執ヲナスコトナカレ、アナカシコ〳〵、

加賀越中越前ノ門徒來集スル屋舍一二百ニ及ブ

文明五年九月日

〔蓮如文〕

○帖外一原書名ナシ　ソモ〳〵コノ兩三年ノアヒダニヲヒテ、アルヒハ宮方、アルヒハ禪律ノ聖導等ニイタルマデ、マフシ沙汰スル次第ハナニコトゾトイヘバ、所詮越前國加賀國（加賀江沼郡長江）（瀬越）サカヒナガヱ、セコヱノ近所ニ、細呂宜ノ鄉ノ內吉崎トヤランイヒテ、ヒトツノソビヱタル山アリ、ソノ頂上ヲヒキクヅシテ屋敷トナシテ、一閣ヲ建立ストキコヘシガ、イクホドナクシテウチツヾキ、加賀越中越前ノ三ケ國ノウチノカノ門徒ノ面々ヨリアヒテ、他屋ト號シテイラカヲナラベ、家ヲツクリシホドニ、イマハハヤ一二百間ノムネカズモアリヌラントゾオボヘケリ、アルヒハ馬場大路ヲトホシテ、南大門北大門トテ、南北ノソノナアリ、サレバコノ兩三ケ國ノウチニヲヒテ、ヲソラグハカヽル要害モヨク、オモシロキ在所ヨモアラジトゾオボヘハンベリ、サルホドニコノ山中ニ經廻ノ道俗男女、ソノカズイク千萬トイフコトナシ、シカレバコレヒトヘニ末代イマノトキノツミフカキ老少男女ニヲヒテ、スヽメキカシムルヲモムキハ、ナニノワヅラヒモナク、タヾ一心一向ニ彌陀如來ヲヒシトタノミタテマツリテ、念佛マフスベシトスヽメシムルバカリナリ、コレサラニ諸人ノ我慢偏執ヲナスベキヤウニナシ、アラ〳〵殊勝ノ本願ヤ、マコトニイマノトキ機ニカナヒタル彌陀ノ願力ナレバ、イヨ〳〵タフトムヘシ信ズベシ、アナカシコ〳〵、

吉崎ノ形勝

文明五年八月二日

〔堅田本福寺舊記〕

○近江原題堅田記（近江滋賀郡堅田）

一、文明第三曆、賀州吉崎殿ヘ信證院（兼壽）殿樣御下向候、其時西浦法西道場（トカ）ヘ夜ニ入御出ヲナサル、法西ハ大野ニ入シコトシテ、其子五郎二郎ハカリアル所ヘ、法住、與二郎殿、與太郎、九郎二郎、兵衞太郎ナント御供申ス、五郎二郎申スハ、モシコヽモトニ御坊御コンリウアラハ、コノ地歸進可申ト申ニ、山門ノカタヲ御ランセラレテ、○本福寺跡書ニハ、扇ニテサヽセラレトアリ、アレカチカイホトニトオホセケル、サテ賀州ヘ法住モ御供

法西道場ニ入ル

門徒法住等隨行ス

浄賢

申サル丶、路次御ミチスカラ打下（マ）オカヤハ、法住門徒海津桶屋浄賢法住門徒ニテ、チイサク御座ヲ法住料足五貫文御下アリ、御新造ヲツクリ、上様ヲ入タテマツリ、御コシヲヤスメラルヽ、コレノミナラス桶屋屋敷廿貫ニテ賣（買カ）得ノ内、堅田川村方上乗ニテ拾貫文、法住拾貫文、兩方ヨリイタシテ、北國方ノ御一家衆御宿ト、法住ヨリ御耳ニ入テ相サタメタマフ、カノ桶屋カミスリテ法名浄賢トイフ、サテ法住御ヲクリタテマツリ、ノホリタマヒテ、其後吉崎殿ヘ法住マイラレケルニキコシメサレ、ソノマヽタヒノ躰、ソノマヽオモシロイソ、イソカウ〳〵勝事ト、オソヤ〳〵トウ法住ニアハウモノヲト仰ケル、妙住尼モマイラレタリ、北國カタ御同行タチノ上様ノ御意ノヨキヲウラヤマシカラレストイフコトナシ、ナヲ〻〻其後兩三度御ミマイヲナシ、罷下ラレタリトカヤ、

兼壽近松ヲ去ル

金森ニ至ル

〔堅田本福寺舊記〕（四原題明宗日記）

〇近江　吉崎御下向之夏

文明三年四月上旬ノ頃、聖人ノ御舊跡ユカシク思召サレテ、程モナク近松（近江滋賀郡）ヲ忍ヒ出玉ヒヌ、御門徒申シトヽメ申サレシホトニ、京都近江御經回アリ、サレ𪜈北地御下向ノ御志在テ、ツヒニ金森（栗太郡）ヨリ道西、與治郎、與太郎、九郎治郎御供申シ、夜ニ入テ堅田ニ御渡リ候テ、若狭ヲ經テ越前ニ入ル若狭ヲ經テ越前ニ入ル、在シテ吉崎ト云處ニ一宇御建立アリテ、マス〳〵御繁昌也、

吉崎建立

〔蓮如上人遺德記〕

文明第三辛卯ノ暦初夏上旬ノコロ、大津ノ小坊ヲ忍出テ、北邦ニ趣キタマフ、シカレハ國郡ノ男女崇重ノ心ヲハコヒ、捨邪歸正ノ類ヒ、敬信モトモ專ニシテ、カシコニ群集ス、ソレツラ〻〻往年ノ事ヲ案スルニ、抑（源空）空聖人ノ御時、聖道ノ諸宗ミナ眞宗ニ歸シケレハ、弘興ヲ猜テ、南北ノ學徒無實ノ奏事ヲ以テ、忽焉トシテ淨土ノ元祖黑谷聖人ヲ南海ノ遠境ニ配シ、祖（親鸞）師聖人モ同ク北陸ノ遙鄕ニ配セラル、サレハ御詞ニノタマハク、大師聖人（源空）モシ流刑ニ處セラレタマハスハ、ワレマタ配所ニ趣ンヤ若我配所ニオモムカスンハ、何ニヨリテカ邊鄙ノ群類ヲ化セン、コレナヲ師教ノ恩致ナリトイヘリ、コレニ依テ門葉モ熾ナル事、オホクハ北邦ニアリ、實ニ文明第三ノ御下向ハ、偏ニ眞宗繁昌ノ先蹤ナリ、

若狭ヲ經テ越前ニ入ル

アルトキ所々巡見ノ砌、越前ノ國坂北郡吉崎ト云處ニ居ヲシメハヤト思召テ、既ニ同キ初秋下旬第七日ヨリ、始テ一閣ヲ建立シタマヘリ、シカレハ貴賤緇素ヲ論セス門葉ニ列リ、禪室ニ近ツク類ヒアケテカソフヘカラス、

朝倉孝景ト吉崎道場

御山ト稱ス

是ヨリシテ一流ノ宗儀昌ニシテ、自他宗ヲエラハス歸伏スルコト、風ニ靡ク草ノ如シ、文明第七ノ暦、所々歴覽ノオリフシ、舊寺ノ事ナレハ再覲大切ナリトテ、加州賀北ノカタホトリ二俣ノ松扉ニ立寄、シハラク足ヲ憩ヒ、安慰ノタメニ石ヲ立樹ヲ植タマフ、ソノ庭ノ形今ニノコレリ、遺跡尤モ慕フヘキモノヲヤ、

〔加越鬪諍記〕一　賀越鬪爭起之事

爰ニ前越前國主武衞時代畢テ、文明三年ヨリ以來、景行天皇ノ苗裔、日本ノ將軍ノ後胤朝倉彈正左衞門尉日下部ノ朝臣孝景英林寺當國草創ノ時、本願寺上人吉崎ト云在所ヲ被請、子息一人下テ道場ヲ建立シ、（兼壽ノ子息ヲ吉崎ニ下スコト他ニ所見ナシ、）御山ト號ス、國々ノ人民參詣恭敬スルコト、誠ニ京都鎌倉ニ不異、其外中郷ニ超照寺、又和田一房主勝嚴寺、宇坂ノ房村々ニ寺舍ヲ建立メ繁昌セリ、是則後代ノ禍トソ成ケル、（上略下略）

〔鷺森舊事記〕乾　山科本願寺事

洛陽大谷本願寺、寛正六年乙酉正月八日、山門ノ爲ニ燒ほろぼされ、寺務蓮如上人園城寺の院内近松に忍ひかくれを給ひ、文明三年に越前吉崎に一宇を建立し給ひ、（下略、七年八月二十一日ノコトニカヽル、）

○是ヨリ先、延暦寺衆徒、兼壽ノ東山大谷ノ坊舍ヲ襲フ、兼壽難ヲ避ケテ近江栗本ニ逃レ、尋デ堅田ニ到リシコト、寛正六年正月十日ノ條ニ見エタリ、コノ後、兼壽吉崎ヨリ河内出口ニ幽捿スルコト、文明七年八月是月ノ條ニ見ユ、又兼壽、吉崎止住中ノ行歴等ニ關スルモノハ、便宜ニヨリテ左ニ收錄ス、

報恩講

女人ヲ教誡ス

〔專光寺文書〕（加賀）

抑今度一七ヶ日報恩講のあひさふおいて、多屋内方をはしめおのの人も、大略信心を決定し給へるよしきこへ侯り、めてたく本望これにすぎ侯らす、さりとてはらはせまゝうちすて侯へは、信心をうせ侯歟し、細々ふ信心乃ミそ浅ましくへ、彌陀乃法水をなゝせといへる事あるけふ侯、それにはて女人の身を、十方三世の諸佛ふもをそられさる身ふて侯を、阿彌陀如來あれハこそ、かさしけれくもたすけはし〳〵侯へ、そのゆへハ女人乃身をいゝは眞實心ふありたりといふとも、うさゝひは心ハふゝくして、又物ふんとのいまはしくおもふ心をさらにうせかさくれはへ侯、をに在家の身

他力ノ信心

文明三年七月二十七日

は、世路につけ、又子絲(孫)なんとの事によりそへても、たゝ今生にのみふけりて、これふとにそやめに見えて、あされる人間界の老少不定のさかひとしりなから、たゝいま三途八難にしつまん事をは、つゆちりはかりも心にかけすして、いたつらにあかしくらすは、これつねの人のならひなり、あさましといふもおろかなり、これによりて一心一向に彌陀一佛の悲願に歸して、ふかくたのみたてまつりて、もろ〳〵の難行を修する心をすて、又諸神諸佛に追從まうす心をもみなうちすてゝ、さて彌陀如來と申は、かゝる我らことき(の)あさましき女人のためにおこし給へる本願なれは、まことに佛智の不思議と信して、我身はわろきいたつらものなりとおもひとりて、ふかく如來に歸入する心をもつへし、さてこの信する心も念する心も、彌陀如來の御方便よりおこさしむるものなりとおもふへし、かやうにこゝろうるを、すなはち他力の信心をえたる人とはいふなり、又このくらゐを、あるひは正定聚に住すとも、滅度にいたるとも、等正覺にいたるとも、彌勒にひとしとも申なり、又これを一念發起の往生さたまりたる人とも申すなり、かくのことく心えてのうへの稱名念佛は、彌陀如來の我らか往生をやすくさ

一切ノ諸神ヲ疎略ニスヘカラズ

多屋内方ニ與フ

さめ給へる、その御うれしさの御恩を報しまうしてたてまつる念佛なりとこゝろうへきものなり、あなかしこ〳〵、

これにつゐて、まつ當流のおきてをもよく〳〵まもらせ給ふへし、そのゆへは、あひかまへていまのことく信心のとほりを心へ給はゝ、身中にふかくおさめおきて、他宗他人に對して、そのふるまひをみせすして、又信心のやうをもかたるへからす、一切の諸神なんとをもわか信せぬまてなり、おろかにおもふへからす、かくのことく信心のかたも、そのふるまひもよき人をは、聖人もよく心へたる信心の行者なりとおほせられたり、たゝふかくこゝろをは佛法にとゝむへきなり、あなかしこ〳〵、

文明第五十二月八日、これをかきて當山の多屋内方へまいらせ候、このほかなほなほ不審の事候はゝ、かさねてとはせたまふへく候、

所送寒暑五十八歳(兼壽)(花押)

のちの代のしるしのためにかきおきしのりのことの葉かたみともなれ

○本文蓮如上人文ニ收ムルモノニ同ジ、

〔蓮如上人文〕サンヌル文明第四ノ暦彌生中半ノコロカトオボエハンベ

文明三年七月二十七日

東北七ケ國ヨリ門徒來集ス

信心ヲ旨トス

リシニ、サモアリヌラントミエツル女姓一二人、オトコナンドアヒ具シタルヒトゝ〻、コノ山ノコトヲ沙汰シマウシケルハ、ソモ〻〻コノコロ吉崎ノ山上ニ一宇ノ坊舍ヲタテラレテ、言語道斷オモシロキ在所カナトマウシサフラフ、ナカニモコトニ加賀越中能登越後信濃出羽奥州七ケ國ヨリカノ門下中、コノ當山ヘ道俗男女參詣ヲイタシ、群集セシムルヨシ、ソノキコエカクレナシ、コレ末代ノ不思議ナリ、タヾゴトトモオボエハンベラズ、サリナガラカノ門徒ノ面〻ニハ、サテモ念佛法門ヲバナニトスヽメラレサフラフヤラン、トリワケ信心トイフコトヲム子トヲシヘラレサフラフヨシ、ヒトゝ〻マウシ候ナルハ、イカヤウナルコトニテ候ヤラン、クハシクキヽマイラセテ、ワレラモコノ罪業深重ノアサマシキ女人ノ身ヲモチテサフラヘバ、ソノ信心トヤランヲキヽワケマイラセテ、往生ヲ子ガヒタク候ヨシヲ、カノ山中ノヒトニタヅ子マウシテサフラヘバ、シメシタマヘルヲモムキハ、ナニノヤウモナク、タヾワガ身ハ十惡五逆五障三從ノアサマシキモノゾトオモヒテ、フカク阿彌陀如來ハカヽル機ヲタスケマシマス御スガタナリトコヽロエマイラセテ、フタコヽロナク彌陀ヲタノミタテマツリテ、タスケタマヘトオモフコヽロノ一念ヲコルトキ、カタジケナクモ如來ハ八萬四千ノ光明ヲハナチテ、ソノ身ヲ攝取シタマフナリ、コレヲ彌陀如來ノ念佛ノ行者ヲ攝取シタマフトイヘルハコノコトナリ、攝取不捨トイフハ、オサメトリテステタマハズトイフコヽロナリ、コノコヽロヲ信心ヲエタル人トハマウスナリ、サテコノウヘニハ、子テモサメテモタテモ平テモ、南无阿彌陀佛トマウス念佛ハ、彌陀ニハヤタスケラレマイラセツルカタジケナサノ彌陀ノ御恩ヲ、南无阿彌陀佛トトナヘテ報ジマウス念佛ナリトコヽロウベキナリト、子ンゴロニカタリタマヒシカバ、コノ女人タチソノホカノヒトタチマウサレケルハ、マコトニワレラガ根機ニカナヒタル彌陀如來ノ本願ニテマシ〻〻候ヲモ、イマヽデ信ジマイラセサフラハヌコトノアサマシサ、マウスバカリモサフラハズ、イマヨリノチハ一向ニ彌陀ヲタノミマイラセテ、フタコヽロナク、一念ニワガ往生ハ如來ノカタヨリ御タスケアリケリト信ジタテマツリテ、ソノノチノ念佛ハ佛恩報謝ノ稱名ナリトコヽロエ候ベキナリ、カヽル不思議ノ宿緣ニアヒマイラセテ、殊勝ノ法ヲキヽマイラセ候コトノアリガタサタウトサ、ナカ〻

念佛ハ佛恩報謝

々マウスバカリモナクオボエハンベルナリ、イマハハヤイトママウスナリトテ、ナミダヲウカメテミナ々々カヘリニケリ、アナカシコ〳〵、

文明五年八月十二日

〔蓮如上人文〕 帖外

文明第三初秋仲旬之比、加州或山中邊ニヲヒテ、人アマタ會合シテ申スヤウ、近比佛法讃嘆コトノホカワロキヨシヲマウシアヘリ、ソノナカニ俗ノ一人アリケルガ申スヤウ、去比南北ノ念佛ノ大坊主モチタル人ニ對シテ、法文問答シタルヨシマウシテカクコソカタリハンベリケリ、俗人イハク、當流ノ大坊主達ハイカヤウニコヽロネヲ御モチアリテ、ソノ門徒中ノ面々ヲバ御勸化候哉ラン、御コヽロモトナク候、委細仰セカフムリタク存ジ候、答テ云、當流聖人ノ御勸化ノ次第ハ、我等モ大坊主一分ニテ候ヘトモ、巨細ハヨクモ存知セス候、サリナガラオホヨソ先師ナンドノ申シオキ候ヲモムキハ、タヽ念佛ダニモ申セバ、タスカリ候トバカリウケタマハリヲキ候ガ、近比ハヤウガマシク信心トヤランヲ具セズハ、往生ハ不可ト若輩ノ申サレ候ガ、不審ニコソ候ヘ、俗問テイハク、ソノ信心トハイカヤウナル事ヲ申シ候哉、答テイハク、マヅ我等ガコヽロエヲキ候

大坊主達ヲ誡ム

分ハ、彌陀如來ニ歸シタテマツリテ、朝夕念佛シ、佛ケ御タスケ候ヘトダニモ申シサフラヘバ、往生ハ一定トコヽロエテコソ候ヘ、ソノホカハ大坊主ヲハモチテ、我等モ候ヘドモ、委細ハ存知セズ候、俗問テイハク、サテハ已前仰カフリ候分ハモテノホカ、此間我等聽聞ツカマツリ候ニハ、オホキニ相違シテ候、マヅ大坊主分ニテ御ワタリ候ヘドモ、更ニ聖人一流ノ安心ノ次第ハ御存知ナク候、我等ガ事ハママコトニ俗體ノ身ニテ候ヘドモ、申シ候フコトバヲモゲニモトオホシメシヨリ候ハヾ、聽聞ツカマツリ候分ハ、マウシイルベキニテ候、坊主答テイハク、マコトニモテ貴方ハ俗體ノ身ナガラ、カヽル殊勝ノ事ヲ申サレ候モノカナ、委細御カタリ候ヘ、聽聞スベク候、俗答テイハク、如法出物ナルヤウニ存シサフラヘドモ、カクノコトク仰カウフリ候間、聽聞ツカマツリ候ヲモムキ、大概マウシイレベク候、我等カ事ハ奉公ノ身ニテ候間、ツネニ在京ナトモツカマツリ候間、東山殿（兼壽）ヘモ細々マイリ候テ、聽問ツカマツル分ヲハ、心底ヲノコサズカタリ申スベク候、御心ヲシヅメラレキコシメサルベク候、マヅ當流御勸化ノヲモムキハ、信心ヲモチテ本トセラレ候、ソノユヘハモロ々々ノ雜行ヲステヽ、一心ニ彌陀如

弟子ノ物ヲ坊主ニ貽ルヲ誡ム

來ノ本願ハ、カヽルアサマシキ我等ヲタスケマシマス不思議ノ願力ナリト、一向ニフタコヽロナキカタヲ信心決定ノ行者トハ申シ候ナリ、サ候トキハ、行往(住カ)座臥ノ稱名モ、自身ノ往生ノ業トハオモフマシキ事ニテ候、彌陀他力ノ御恩ヲ報ジ申ス念佛ナリト心得ベキニテ候、次ニ坊主樣ノ仰カウフリ候信心ノ人ト御沙汰候ハ、タヾ弟子ノ方ヨリ坊主ヘ細々ニ音信ヲ申シ、又物ヲマイラセ候ヲ信心ノ人ト仰ラレ候、オホキナル相違ニテ候、ヨクヽヽ此次第ヲ御心得アルベク候、サレバ當世ハミナヽヽカヤウノ事ヲ信心ノ人ト御沙汰候、モテノホカアヤマリニテ候、コノ子細ヲ御分別候テ、御門徒ノ面々ヲモ御勸化候ハヾ、御身モ往生ハ一定ニテ候、又御門徒中モミナ往生セラレ候ベキ事ウタカヒモナク候、是則マコトニ自信教人信、乃至大悲傳普化ノ釋文ニモ符合セリト申シ侍ベリシホドニ、大坊主モ殊勝ノオモヒヲナシ、解脫ノ衣ヲシボリ、歡喜ノナミダヲナガシ、改悔ノイロフカクシテ申ス樣、向後ハ我等ガ散在ノ小門徒ノ候ヲモ、貴方ヘ進ジヲクベキヨシ申シ侍ベリケリ、又ナニトオモヒイデラレケルヤラン、申サルヽヤウハ、アラアリカタヤ彌陀ノ大悲ハアマネケレドモ、信ズル機ヲ攝取シマシマスモノナリトオモヒイデヽ、カクコソ一首ハ申サレケリ、

月カケノイタラヌサトハナケレドモナガムル人ノコヽロニソスム

トイヘル心モイマコソオモヒアハセラレテ、アリガタクオボエハンベレトテ、コノ山中ヲカヘラントセシガ、オリフシ日クレケレバ、マタカヤウニコソクチスサミケリ、

ツクヽヽトヲモヒクラシテ入アヒノカネノヒヽキニ彌陀ゾコヒシキトウチナガメ、日クレヌレハ、足ハヤニコソカヘリニキ、アアナカシコ〳〵、

文明三年七月十六日

俗人ト坊主トノ問答

文明第三炎天ノコロ、賀州(河北)加ト郡五ケノ庄ノ内カトヨ、或片山邊ニ人十口ハカリアツマリ平テ申ケルハ、コノゴロ佛法ノ次第以外ワロキ由ヲ讃嘆シアヘリ、ソノナカニ勢タカク色クロキ俗人アリケルカカタリケルハ、一所ノ大坊主分タル人ニ對シテ、佛法ノ次第ヲ問答シケル由ヲ申テ、カクソカタリ侍リケリト云々、

件ノ俗人問テイハク、當流ノ大坊主達ハイカヤウニコヽロネヲモチテ、ソ

ノ門徒中ノ面々ヲハ御勸化候ヤラン御心モトナク候、クハシク存知仕候テ聽聞スベク候、大坊主答テイハク、佛法ノ御ヨウヲモチ、朝夕ヲマカリスキ候ヘドモ、一流ノ御勸化ノヤウモサラニ存知セズ候、タヾ手ツキノ坊主ヘ禮儀ヲモ申シ、又弟子ノ方ヨリ志ヲモイタシ候テ、念佛ダニ申シ候ヘバ、肝要トコヽロエタルマテニテコソ候ヘ、サ候間、一卷ノ聖教ヲモ所持候分モ候ハズ、アサマシキ身ニテ候、委細カタリ給フベク候、俗ノイハク、ソノ信心ト申スカタヲモサラ〳〵御存知ナク候ヤラン、答テイハク、我等ガ心得ヲキ候分ハ、彌陀ノ願力ニ歸シタテマツリテ、朝夕念佛ヲ申シ、佛ケ御タスケ候ヘトダニモ申候ヘハ、往生スルソト心得テコソ候ヘ、ソノホカハ信心トヤランモ、安心トヤランモ存ゼズ候、コレカワロク候ハヾ、御教化候ヘ、可聽聞候、俗イハク、サテハ大坊主分ニモ御座候ヘドモ、サラニ聖人一流ノ御安心ノ次第ヲハ御存知ナク候、我等ハ俗體ノ身ニテ、大坊主分ノ人ニ一流ノ信心ノヤフ申入候ハ、斟酌ノイタリニ候ヘドモ、四海ミナ兄弟ナリト御沙汰候ヘハ、カタノゴトク申入ベク候、坊主答テイハク、誠ニモツテ貴方ハ俗人ノ身ナガラ、カヽル殊勝ノ事ヲ申サレ候モノカナ、イヨ〳〵我等ハ大

俗人親鸞ノ教旨ヲ說ク

信心決定ノ人

坊主ニテハ候ヘドモ、イマサラアサマシクコソ存候ヘ、早々ウケ給リ候ヘシ、答テイハク、カクノゴトク御定ニ候アヒダ、如法出物ニ存ジ候ヘドモ、聽聞仕リ置キ候オモムキ大概申入ベク候、御心ヲシツメラレ候テキコシメサルベク候、マヅ聖人（親鸞）一流ノ御勸化ノオモムキハ、信心ヲモテ本トセラレ候、ソノユヘハモロ〳〵ノ雜行ヲナゲステヽ、一心ニ彌陀ニ歸命スレバ、不可思議ノ願力トシテ、佛ノカタヨリ往生定ヲ治定セシメ給フナリト、コノクラヰヲ一念發起入正定之聚トモ釋シタマヘリ、コノウヘニハ行住座臥ノ稱名念佛ハ、如來我往生ヲサタメ給フ御恩報盡ノ念佛ト心得ベキナリ、コレヲ信心決定ノ人トハ申ナリ、次坊主樣ノ信心ノ人ト御沙汰ノ候ハ、タヾ弟子ノカタヨリ細々ニ音信ヲモ申、又ナニヤランヲモマヒラセ候ヲ信心ノ人ト仰ラレ候、コレハ大ナル相違トソ存候、ヨク〳〵此次第ヲ御コヽロエ候テ、眞實ノ信心ヲ決定アルベキモノナリ、當時ハ大略カヤウノ人ヲ信心ノモノト仰ラレ候、アサマシキ事ニハアラズ候哉、此次第ヲヨク〳〵御分別候テ、御門徒ノ面々ヲモ御勸化候ハヾ、イヨ〳〵佛法御繁昌アルベク候アヒダ、御身モ往生ハ一定、又御門徒中モミナ往生決定セラレ候ベキコ

トウタガヒナク候、コレスナハチ自信教人信、難中轉更難、大悲傳普化、眞成報佛恩ノ釋文ニ符合候ベキ由申候處ニ、大ニ坊主悅テ、殊勝ノオモヒヲナシ、マコトニ佛在世ニアヒタテマツリタルコヽロシテ、解脫ノ法衣ヲシホリ、歡喜ノナミダヲナガシ、改悔懺悔ノコヽロイヨ〳〵フカクシテ申サレケルハ、向後我等ガ少門徒ヲモ貴方ヘ進シヲクベク候、ツネニ御勸化候テ、信心決定サセ給フベク候、我等モ自今已後ハ細々ニ參會ヲイタシ聽聞申テ、佛法讃嘆仕ルベク候、誠ニ同一念佛无別道故ノ釋文イマニオモヒアハセラレテアリカタク候トテ、此炎天ノアツサニヤ、扇ウチツカヒテホネオリサラニミエテ、コノ山中ヲゾカヘルトテ、マタタチカヘリ、フルキ事ナレドモ、カクゾ口スサミケル、

ウレシサヲムカシハ袖ニツヽミケリ、コヨヒハ身ニモアマリヌル哉

ト申システヽカヘリケリ、マコトニコノ坊主モ宿善ノ時イタルカトオホヘテ、佛法不思議ノ道理ナリ、

去文明第三之暦林鐘上旬比ヨリ、當年マデハスデニ三ケ年ノアヒダ、コノ

多屋ノ坊主等ヲ戒ムル

當山ニ居住セシムルコヽロザシハ、ヒトヘニ往生極樂ノタメニシテ、サラニ名聞利養ヲノゾマス、マタ榮花榮耀ヲコトヽセズ、タヾ越前加賀ノ多屋坊主達、當流ノ安心ヲモテサキトセラレズ、未決定ニシテ不信心ナルアヒダ、坊主一人コヽロエノトホリ、ヨク信心決定シタマハヾ、ソノスエ〳〵ノ門徒マデモ、コトヽ〳〵ク今度ノ一大事ノ往生ヲトグベキナリ、コレマコトニ自信教人信ノ釋義ニモアヒカナヒ、マタ聖人報恩謝德ニモナリナントオモフニヨリテ、今日マテ堪忍セシムルモノナリ、コトニコノ方トイフコトハ、冬キタレバソヾロニ山フクアラシモハゲシクテ、マタ海邊ノナミノウツヲトモタカクシテ、耳ニソビエテカマビスシ、マタソラニハトキ〳〵イカヅチナリテ、大雪ナンドニフリコメラレテ、冥〳〵タルテイタラク、マコトニ辛勞ナリ、コレラノ次第サラニモテナラハヌスマヤヲスルニヨリテ、年來ノ本病ノオ井物寒ニヲカサレテ、イタクヲコリテヒトシレズ迷惑至極ナリ、シカリトイヘドモ本望ノゴトク、面々各々ノ信心モ堅固ナラバ、ソレヲナクサミトオモフベキニ、ソノ信心ノカタハシカ〳〵トモナキアヒダ、コノ方ニイマヽデノ堪忍所詮ナキニヨリテ、當年正月ノコロヨリ、アナ

浪人出張ニヨリ防禦ニ日ヲ送ル

ガチニコレヲ思案セシムルトコロニ、窄人出張ノ儀ニツイテ、ソノヒマナク、アルヒハ要害、アルヒハ造作ナンドニ日ヲヲクリテ、スデニ春モサリ、夏モスギ、秋モハヤサリナントスルアヒダ、カクノゴトクイタヅラニ日月ヲヲクリナントスル條、マコトニ本意ニアラザルアヒダ、暫時トオモヒテ藤越前吉田郡島邊ヘマテ上洛セシムルトコロニ、多屋ノ面々歸住スベキヨシシキリニマフサルヽアヒダ、歸坊セシメヲハリヌ、シカルニイマノコトキンバ、冬ノ路次難義ナルウヘ、イノチヲカギリニコヽロナラズ越年スベキ歟ノトコロニ、ホドモナクハヤ聖人ノ御正忌モチカヅクアヒダ、マタ當年モコノ方ニヲイテ、報恩謝德ノ御イトナミヲイタスベキ歟ノアヒダ、マコトニ此國ニ兩三ケ年ノアヒダノ機緣フカクシテ、諸人ト同心ニ无二ノコヽロザシヌキイデヽ、カノ御ツトメヲイタスベキ條、眞實眞實不可思議ナリ、マコトニモテタフトムベシ、ヨロコブベシ、アナカシコ〳〵、

藤島ニ遊化ス

文明第五十月三日

藤島ヨリカヘリテ後、コヽロニウカムトヲリ書ヲク所ナリ、

親鸞ノ正忌ニ際シ門徒ヲ教誡ス

抑今月廿八日ハ、カタジケナクモ、聖人（親鸞）毎年ノ御正忌トシテ、イマニ退轉ナク、ソノ御勸化ヲウケシヤカラハ、イカナル卑劣ノモノマデモ、ソノ御恩ヲオモンジマフサヌヒトコレアルベカラズ、シカルニ予サンヌル文明第三ノ暦ナツノコロヨリ、江州志賀ノコホリ大津三井ノフモトヲ、カリソメナガライデシヨリコノカタ、コノ當山ニ幽栖ヲシメテ、當年文明第五ノ當月ノ御正忌ニイタルマデ存命セシメ、不思議ニ當國加州ノ同行中ニソノ緣アリテ、同心ノヨシミヲモテ、カタノコトク兩三ケ度マデ報恩謝德ノマコトヲイタスベキ條、ヨロコビテモナヲヨロコブベキハコノトキナリ、コレニヨリテ今月廿一日ノ夜ヨリ、聖人ノ知恩報德ノ御佛事ヲ、加賀越前ノ多屋ノ坊主タチノ沙汰トシテ勤仕マフサルヽニツイテ、マヅコヽロエラルベキヤウハ、イカニ大儀ノワヅライヲイタシテ、御佛事ヲマフサルトイフトモ、當流開山聖人ノスヽメマシマストコロノ眞實信心トイフコトヲ決定セシムル分ナクバ、ナニノ篇目モアルベカラズ、マコトニモテミヅニィリテアカヲチズナンドイヘル風情タルヘキ歟、ソノユヘハマヾ他力ノ大信心トイヘルコトヲ決定シテノウヘノ佛恩報盡トモ、師德報謝トモマフ

スベキコトナリ、ダヾヒトマネバカリノ體ハ、マコトニ所詮ナシ、シカリトイヘドモ、マタ今日マデモソノ信心ヲ決定セシムル分ナシトイフトモ、アヒカマヘテ明日ヨリ信心決定セシメバ、ソレコソマコトニ聖人ノ報恩謝德ニモアヒカナヒツベクオボエハンベレ、コノオモムキヲヨク〳〵コヽロエラレテ、コノ一七ケ日ノアヒダノ報恩講ノウチニヲイテ、信不信ノ次第分別アラバ、コレマコトニ自行化他ノ道理ナリ、別シテハ聖人ノ御素懷ニハフカクアヒカナフベキモノナリ、アナカシコ〳〵、

于時文明第五霜月廿一日書之、

五十地ニモアマルトシマデナガラヘテコノ霜月ニアフソウレシヤ、

三年マデイノチナガキモ霜月ノノリニアヒヌル身コソタフトキ

ノチノトシマタ霜月ニアハンコトイノチモシラヌワカ身ナリケリ

定　於眞宗行者中可停止子細事

眞宗行者ノ制法

一、諸神並佛菩薩等不可輕之事、

一、諸法諸宗全不可誹謗之事、

一、以我宗振舞對他宗不可難之事、

一、物忌事、就佛法之方雖無之、他宗並對公方堅可忌之事、

一、於本宗以无相承名言、恣佛法讃嘆旁不可然間事、

一、於念佛者、可專國守護地頭、不可輕之事、

一、以無智之身、對他宗任雅意、我宗之法儀、無其憚令讃嘆不可然事、

一、於自身未安心決定、聞人詞信心法門讃嘆不可然事、

一、念佛會合之時、不可食魚鳥事、

一、念佛集會之日、於酒失本性不可飲之事、

一、於念佛者中、恣博奕可停止之事、

右此十一ヶ條、於背此制法之儀者、堅衆中可退出者也、仍制法狀如件、

文明五年十一月

或人申サレケルハ、コノ一兩年ノ間、加賀越前ノ諸山寺ノ内ニアル碩學達ノ沙汰シマフサル、次第ハ、近比越前ノ國細呂宜鄉ノ内ニ吉崎ト申テ、國サカイニ一宇ヲカマヘラレテ、京都ヨリ念佛者ノ坊主下向アリテ、一切ノ

越前加賀ノ諸山寺ノ兩國ノ守護ニ訴ヘントスト風説

道俗男女ヲヱラバズアツメラレテ、末代今時ハ念佛ナラデハ成佛スベカラズトテ、諸宗モハヾカラズスヽメラルヽコトサカンナリトキコヘタリ、コレ言語同斷ノクハダテナリ、タヾシ諸宗モ我宗モイマハ天下一同ノ儀ニテアヒスタリタリトイヘドモ、佛説ナレバムナシカラザルガユヘニ、コノ子細ヲモテ兩國ノ守護ヘ訴訟スベキヨシ、内々人ノマフスナルアヒダ、アハレコノヲモムキヲカノ吉崎ヘ告シラセタマヒ候テ、斟酌モ候ヘカシトオモフナリ、我等モ貴方ニ等閑モナキ間、ヒソカニマフスナリト、此子細ヲ當山中ノ多屋ノ内ニ、モノニコヽロエタル人ニカタリ、シバ々々申サレケルハ、マコトニモテ兩國ノ諸山寺ノ碩學達申スムネ道理至極ナリ、我等モ吉崎モ最初ヨリソノ心中ニテアリシカドモ、コノ在所アマリニスグレテオモシロキ間、タヾ一年半年トオモフホドニ、イマニ在國セリ、誠ニカノ吉崎ハナマジイニ京人ノ身ナルガユヘニ、ナラハヌスマイヲセラレテ、不相應ナル子細コレオホシトイヘドモ、カノ多屋ノ面々抑留アルニヨリテ、今日マデノ堪忍（マヽ）トリサラニ庶幾セシムル分ハナシ、コレニヨリテ道俗男女イク千万トイフカズヲシラズ、群集セシムルアヒダ、カノ吉崎モタレ々

諸人ノ群集ヲ謝絶ス

兼壽一時藤島ニ往ク

々モ今ノ時分シカルベカラザルヨシ申テ、コトニ兩國ノ守護方ノキコヘトイヒ、マタ平泉寺豐原ソノ外諸山寺ノ内ノ碩學達モサソウヘナシニオモヒタマフラント、朝夕ソノハヾカリアルニヨリテ、當文明四年正月時分ヨリ、諸人群集シカルベカラザル由ノ成敗ヲクハヘラレシハ、ソノカクレナシ、コレシカシナガラ兩守護諸寺諸山ヲオモンゼシ心中ナリ、シカリトイヘドモソノノチ道俗男女ソノ成敗ニカヽハラズシテ、カヘテマフスヤウハ、ソレ彌陀如來ノ本願ハ、マサシク今ノ時ノカヽル機ヲスクヒタマフ要法ナレバ、諸人出入ヲ停止アルトキハ、マコトニ彌陀如來ノ御慈悲ニモフカクアヒソムキタマフベキヨシヲ申スアヒダ、チカラナクソノマヽウチヲカレツルナリ、コレサラニ吉崎ノ心中ニ發起セラルヽトコロニアラズ、タヾ彌陀如來ノ大慈大悲ノチカヒノ、アマネク末代イマノ機ニカフラシムル佛智ノ不思議ナリトオボヘハンベルモノナリ、サラニモテ我々カハカラヒトモオモヒワケヌ爲體ナリ、コレニヨリテアマリニ道俗男女群集セシムル間、ヨロヅ退屈ノヨシ申シテ、カノ吉崎モ近日花洛ニカヘルベキ心中ニオモヒタノミタマフアヒダ、マツ去ヌル秋ノコロ、暫時ニ藤島邊

又吉崎ニ還ル

ヘ上洛セラルヽトコロニ、多屋ノ面々抑留アルニヨリテ、マヅ當年中ハ此方ニ居住スベキヨシマフサルヽトコロナリ、アナカシコ〳〵、

文明五年十二月日

越前加賀ヲ經廻ス

山地ヲ開拓シテ堂舍ヲ建立ス

夫文明第三ノ天五月中旬ノコロ、江州志賀ノコホリ大津三井寺ノフモト南別所チカマツヲ風度オモヒタチテ、コノ方ニオヒテ居住スベキ覺悟ニオヨバズ、越前加賀ノ兩國ヲ經廻シテ、ソレヨリノボリ當國細呂宜ノ鄕吉崎トイヘル在所ニイタリテヲモシロキアヒダ、マコトニ虎狼野干ノスミカノ大山ヲヒキタイラゲ、一宇ヲムスビテ居住セシムルホドニ當國加州ノ門下ノトモガラモヤマヲクヅシ、マタシバツイヂヲツキナンドシテ、イヘヲワレモ〳〵トツクルアヒダ、ホドモナク一年二年トスクルマヽ、文明第三ノ暦ナツノコロヨリ、當年マデハスデニ四年ナリ、シカレドモ田舍ノコトナレバ、一年ニ一度ヅヽハ小家ナンドハ燒失ス、イマダコノ坊ニカギリテ火難ノ義ナカリシカドモ、今度ハマコトニ時尅到來ナリケルカ、當年文明第六三月二十八日酉ノ尅トオボヘシニ、南大門ノ多屋ヨリ火事イデヽ、北ノ大門ニウツリテヤケシホドニ、已上南北ノ多屋ハ九ツナリ、本坊ヲノハヘテハソノカズ十ナリ、ミナミ風ニマカセテヤケシホドニ、トキノマニ灰燼トナレリ、マコトニアサマシトイフモナカ〻〻コトノハモナカリケリ、夫人間ハナニゴトモハヤコレナリ、コトニ三界无安猶如火宅トイヘルモ、イマコソ身ニハシラレタリ、コレニヨリテコノ界ニ有无不定ノサカヒナレバ、イカナル家イカナルタカラナリトモ、ヒサシクハモチタモツベキハ彌陀ノ淨土ナリ、イマ一時モトクコヽロウベキハ念佛ノ安心ナリ、サレバ身體ハ芭蕉ノゴトシ、カゼニシタガヒテヤブレヤスシ、カヽルウキヨニノミ執心フカクシテ、无常ニコヽロヲフカクトヾムルハ、アサマシキコトニアラズヤ、イソギ信心ヲ決定シテ、極樂ニマヒルベキ身ニナリナバ、コレコソ眞實〻〻ナガキ世ノタカラヲマフケ、ナガキ生ヲエテヤケモウセモセズ安養ノ淨土ニマイリテ、イノチハ无量无遍ニシテ、オヒセズ、死セザルタノシミヲウケテ、アマサヘマタ穢國ニタチカヘリテ、神通自在ヲモテコヽロザストコロノ六親眷族ヲコヽロニマカセテタスクベキモノナリ、コレスナハチ還來穢國度人天トイヘル釋文ノコヽロコレナリ、アナカシ

火災ニ就イテ門徒ヲ教誡ス

本坊多屋大門火災ニ罹ル

コ〳〵、

文明六年九月日

〔山科連署記〕本　一、佛法ヒロマリ申スニツイテ、山ヨリ法敵出來リ、ソノトキ御開山樣御影大津ヘ御座候、其後北國ヘ御下向ナサレ候テ、越前吉崎殿御建立候テヨリ、種々御法流盛リニナリ、諸國渴仰申シ候テ參集申サレ候、其後安藝ノ法眼カ惡行ニヨリ、吉崎御退キ御上洛アリテ、河州出口殿ヘ御出候、其後山科殿御建立候、

下間蓮宗ノ惡行ニ河內出口ニ移ル

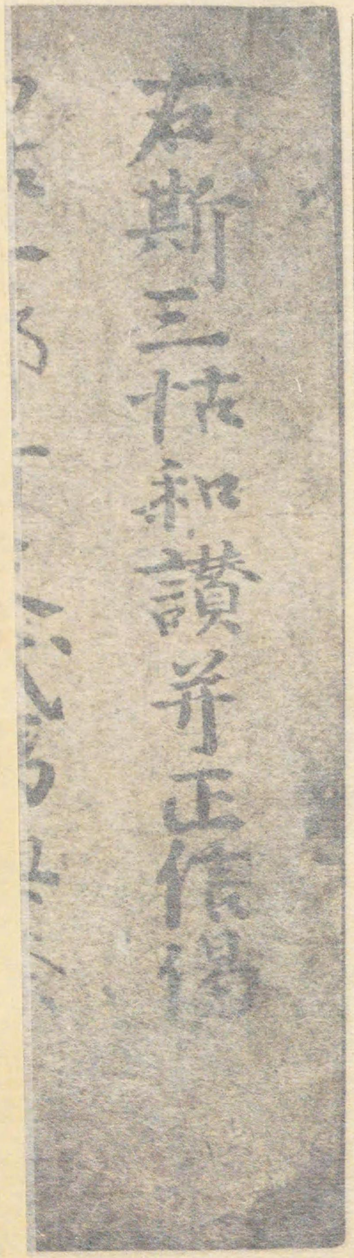
〔驚森舊事記〕乾　山科本願寺事

○略上　寺務蓮如上人園城寺の院內近松より忍ひかくれを給ひ、文明三年より越前吉崎より一字茂建立し給ひ候るよ、同七年下間安藝法眼三業（法名ハ蓮宗）惡逆より、よりて、八月廿一日上人吉崎を御退去ありて、若州小濱へ渡海、亦丹波にさひよ河州出口村といふ處より越て、をそらく滯留を給ふ、

〔反古裏〕○略上　御一門加州へ下國アリシハ、信證院（兼壽）ノ御代ヨリ始マレリ、本ヨリ越前國吉崎ノ御坊ハ、御本寺ノ靈場トシテ、御留主ニ御同宿ヲ仰付ラル、カネテハ願成就院（光助）法印カサネテ御下向ヲナサレ、御住持アルヘキ御有果サズ

兼壽ノ後光助吉崎ニ下向セントシテ

和讃並正信偈版本與書　山城眞宗大谷大學所藏　原大



コ〳〵、

文明六年九月日

〔山科連署記〕本　一、佛法ヒロマリ申スニツイテ、山ヨリ法敵出來リ、ソノトキ御開山樣御影大津ヘ御座候、其後北國ヘ御下向ナサレ候テ、越前吉崎殿御建立候テヨリ、種々御法流盛リニナリ、諸國渇仰申シ候テ參集申サレ候、其後安藝ノ法眼カ惡行ニヨリ、吉崎御退キ御上洛アリテ、河州出口殿ヘ御出候、其後山科殿御建立候、

〔驚森舊事記〕乾　山科本願寺事

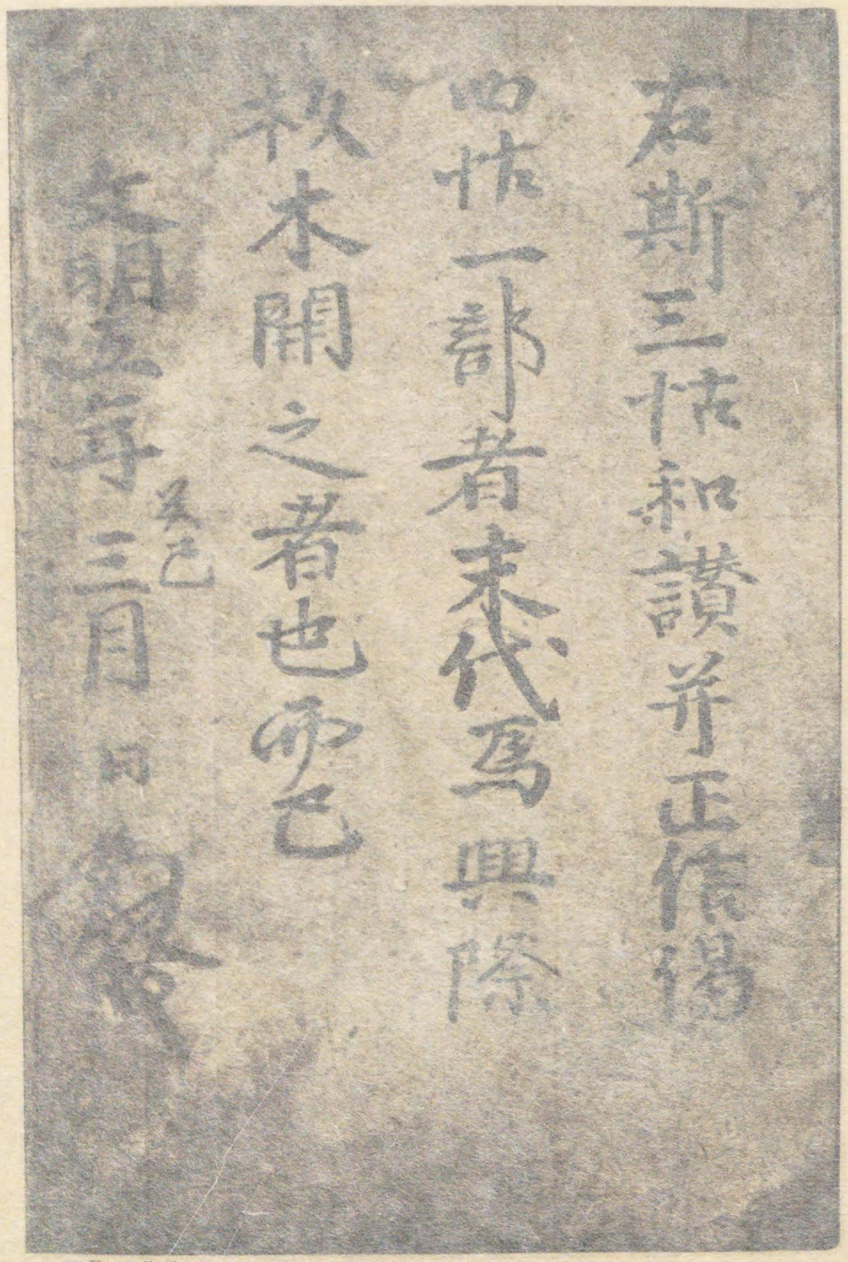
○上略寺務蓮如上人園城寺の院内近松より忍ひかくしを給ひ、文明三年より越前吉崎より一字宓建立し給ひ々るより、同七年下間安藝法眼三業（法名蓮宗）の惡逆より、八月廿一日上人吉崎を御退去ありて、若州小濱へ渡海、亦丹波にさひよ河州出口村といふ處より越て、をそらく滯留を給ふ、

〔反古裏〕○上略御一門加州へ下國アリシハ、信證院（兼壽）ノ御代ヨリ始マレリ、本ヨリ越前國吉崎ノ御坊ハ、御本寺ノ靈場トシテ、御留主ニ御同宿ヲ仰付ラル、カネテハ願成就院（光助）法印カサネテ御下向ヲナサレ、御住持アルヘキ御有果サズ

下間蓮宗ノ惡行ニ河内出口ニ移ル

兼壽ノ後光助吉崎ニ下向セントシテ

和讃並正信偈版本奥書　山城真宗大谷大學所藏　原大



三條西家寫

コ〈、

文明六年九月日

〔山科連署記〕本　一佛法ヒロマリ申スニツイテ山ヨリ法敵出來リ、ソノトキ御開山樣御影大津ヘ御座候、其後北國ヘ御下向ナサレ候テ、越前吉崎殿御建立候テヨリ、種々御法流盛リニナリ、諸國渇仰申シ候テ參集申サレ候、其後安藝ノ法眼カ惡行ニヨリ、吉崎御退キ御上洛アリテ、河州出口殿ヘ御出候、其後山科殿御建立候、

（下間蓮宗ノ惡行ニ河内出口ニ移ル）

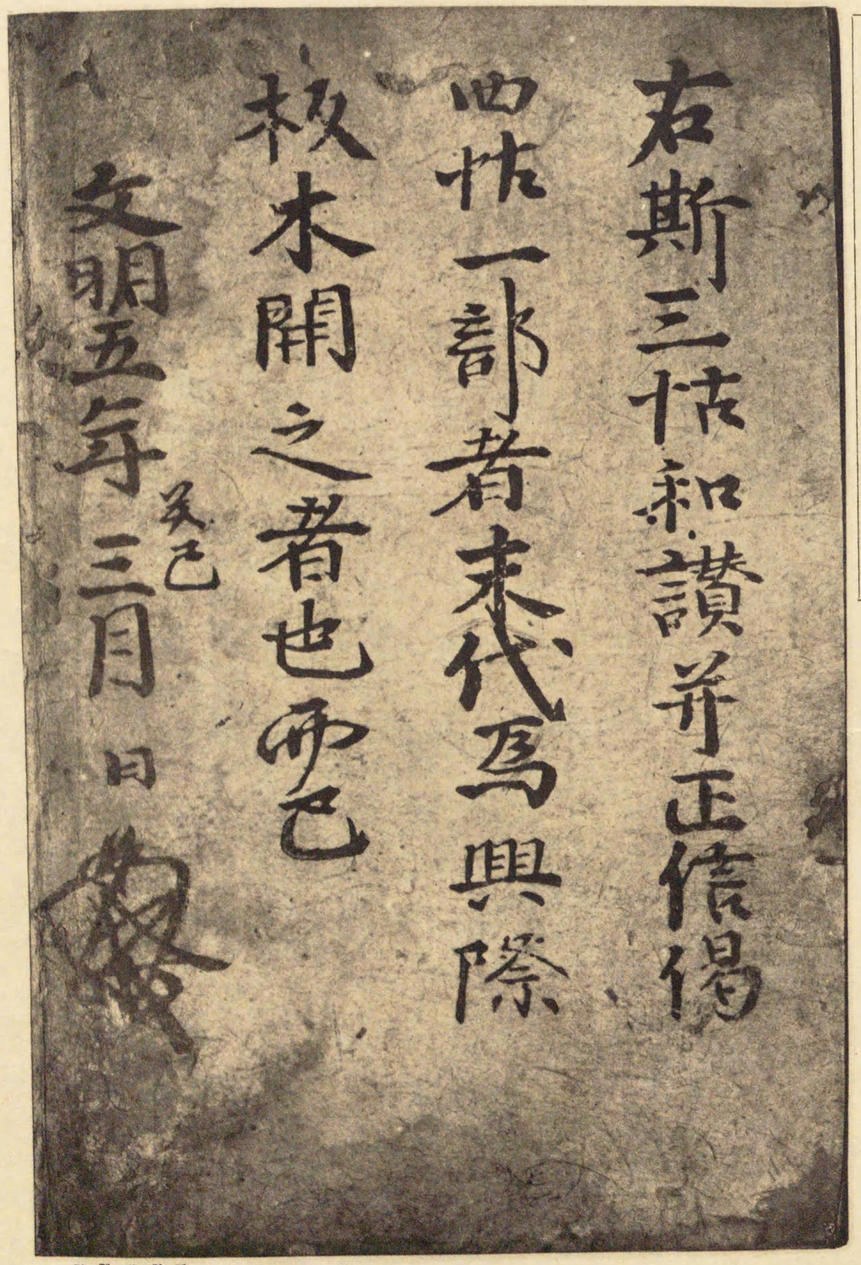
〔驚森舊事記〕乾　山科本願寺事

○上略寺務遵如上人園城寺の院内近松ゟ忍ひかくゝ給ひ、文明三年ゟ越前吉崎ゟ一宇茲建立し給ひ、同七年下間安藝法眼三業（法名蓮宗）の惡逆ゟ、よりて、八月廿一日上人吉崎を御退去ありて、若州小濱へ渡海、赤丹波ゟ、ひゝ河州出口村といふ處ゟ越て、ゝゝらく滯留ゟ給ふ、

〔反古裏〕○上略御一門加州へ下國アリシハ、信證院（兼壽）ノ御代ヨリ始マレリ、本ヨリ越前國吉崎ノ御坊ハ、御本寺ノ靈場トシテ、御留主ニ御同宿ヲ仰付ラル、カネテハ願成（光助）就院法印カサネテ御下向ヲナサレ、御住持アルヘキ御有

（兼壽ノ後光助吉崎ニ下向セントシテ果サズ）

和讃並正信偈版本奥書　山城眞宗大谷大學所藏　原大



右斯三帖和讃并正信偈
四帖一部者末代爲興隆
板木開之者也而已
文明五年　癸巳　三月　日

三桑社製版

和讃正信偈ヲ開版ス

正信偈和讃ヲ以テ六時禮讃ニ代ユ

吉崎道場火ク

增ニテ、遵誓モ御同心アルヘキ旨仰ラレシカ、文明十五年五月廿九日、四十二歳、大津ニテ御遷化アリ、御影ハ出口光善寺ニノコシ給フ、

〔和讃並正信偈〕（眞宗大谷大學所藏）

（奥書）右斯三帖和讃並正信偈四帖一部者、末代爲興（隆）際、板木開之者也而已、

文明五年癸巳三月日　（花押）

〔參考〕

〔大谷本願寺通紀〕（二世宗主傳二）　第八宗主蓮如諱兼壽、童名布袋丸、後曰幸亭丸、（略）中（文明）三年四月遊北地、七月於越前吉崎山（在坂北郡細呂宜郷）創梵宇、七州（加賀、能登、越中、越後、信濃、出羽、陸奥）緇素翕然奔湊、諸寺主各營多屋而居焉、（諸末寺主、於本山及別院側搆寄寓舍、都名多屋、）傳時越前覇主朝倉敏景（稱彈正左衛門尉、法名英林宗雄、）歸師最厚、外護道化云、明年正月師顧他門嫉忌、且慮雜衆濫入、禁諸徒來謁、（一云、五年以來禁之、）雖爾嚮慕競赴、遂不能制、五年三月梓行正信偈和讃、舊來吾門課誦用六時禮讃、師乃以正信偈念佛和讃代之、遂成永式、別行印布蓋由此而設也、（案、三首引式亦自此始、引者引聲念佛之引也、闍陀引聲念誦、佛制禁之、但隨方有開、出毘那耶雜事第六、）八月修彼岸會、（別著勸章、敍其由、）十一月設法制十一條、（載在帖外勸章第二、）六年正月設法制三條、三月二十八日吉崎殿宇火、事出倉卒、本向坊了顯自刎腹以

腹籠聖教

藏祖書全之、（祖書祖師親書、廣文類聚第四證券也、世稱腹籠聖教、）七年七月設法制六條、八月由下問遵宗

富樫政親ノ難

（稱安藝法眼、越前淺水人、）謀不軌、而有富樫政親（稱介次郎、加賀守護、）之難、（一作朝倉恒景冠吉崎、經景敏景之弟、）師素懷退去之志尚矣、爲衆所請留、荏苒累年、至是飄然汎舟、發吉崎、至若狹小濱、歷丹波山路、暫居攝州名鹽（廣根、）而駐錫於富田、尋遷河內出口、創寺號光善寺、（○下略）

富田駐錫

〔大谷本願寺通紀〕四　吉崎別院記（去福井別院七里）

吉崎山在越前坂井郡細呂宜鄉、（越前北界海畔也、吉崎村半屬加賀江沼郡、兩州各置番所、）高數丈、周數十町、三方臨水、佳勝可愛、山上夷坦、隴田居多、有五叉松、老著扶疎、世稱御花松、傳

御花松腰掛石

遵宗主所栽、又有見玉尼塚、兩古松存焉、西邊有巨石、稱御腰掛石、舊寺基等未詳孰處、山下有吉崎村、民家凡三百戶云、文明三年七月、遵宗主創寺山上、六年二月火、七年八月宗主辭去、寺亦罹難、然考顯誓所記、寺基無恙、留守監之、（反古裏云、）

吉崎道場

（越前國吉崎御坊爲御本寺靈場、御留主御同宿被仰付、兼願成就院法印、重御下向、可有御住持、有增而、蓮誓亦可有御同心旨被仰、文明十五年御遷化云々、）由是文明之末、及超勝寺實顯等作亂而方廢耳、（又云、吉崎由實顯等謀反退轉、院宇尙存可知、）刻耳云々、案北國太平記一、十二、永正三年七月、超勝（一作場）寺等冠朝倉家、（兼壽朝倉孝景ニ賴ルヲ）眞景乃毀吉崎道等、此與舊記合、

〔三州志〕（鑑囊餘考五）

今夏五月、（文明三年）僧遵如（親鸞ヨリ八世）江州大津ヨリ北國ニ來リ、既而移基北莊、靈跡尙荒、秋七月越前吉崎ヲ、（越賀ノ界疆也、越前吉崎、加賀吉崎ト、一名ニシテ兩國ニ分附ス、）國主朝倉彈正左衞門敏景（一作繁景、初名孝景、）ニ乞取シテ、一道場ヲ建立、諸民群詣ス、而ノ遵如愈行脚ノ僧トナリ、北州ヲ回歷ノ、宗教ヲ勸布ス、茲ニ富樫小三郎泰高（一作安高、樫蕭春ノ二男也、）富樫泰高吉崎道場建立ノ施主トナル

幸塚ニ在城シ、（城在能美郡、今江城ト一存ス、）富樫次郎政親ト善ラス、（政親ハ成春ノ子也、身ノ長六尺、力十人ヲ兼ヌ、勇悍拔群ト云、（富田）按スルニ、文安四年、加賀ノ守護ヲ泰高成春相爭ヒ、各半國ヲ領セシヨリ以來不和ナルナラン、）遵如ヲ御幸塚ニ迎ヘテ留錫セシメ、且泰高ハカノ吉崎道場建立ノ施主ヲモナシ、本願門派ニ左袒ス、政親ハ所緣アルヲ以テ、專修門派ニ左袒ス、（一說ニ、這政親ノ父成春ノ時ニ在リ、成春ノ女ハ高田專修ノ妻也、然ルニ本願門黨土賊ヲ勾引シ、不意ニ成春ノ館ヲ圍ム、成春如何トモスルコト能ハス、時ニ同族富樫泰高土賊ニ乞テ、成春ヲシテ館ヲ去シム、是ヨリ成春山代（江沼）ニ蟄居ス、或云、越前豐原ヘ蟄居スト、其後成春ハ山代ニテ卒ス、其子八歲也、是加州守護ノ一人ナレハ、襲封アラシメント、國民是ヲ野々市ノ館ヘ迎ヘ、朝倉家ニ因テ、將軍ヘ拜謁ナサシメ、富樫介ニ任ス、是卽チ政親也ト云、）故ニ本願門徒政親ヲ怨ミ、賀能越ノ門黨ヘ移牒ノ寇ヲ起ス、

本願寺門派專修寺門派

〔勝興寺系圖〕（○中越）　中興遵如上人　本願寺第八世御留主職卽存如上人ノ嫡ナリ、（諱兼壽、信證院ト號ス、○中略）文明三年（五十七才）初夏上旬、近松ノ坊ヲ出テ、北國ニ下向シ玉フ、其ユヘンハ、存如上人ノ舍弟宣祐（法名如乘）律師、加賀國二俣本泉寺ヲ開基シ、寬正元年正月廿六日、四十九歲ニテ寂ス、コレニヨリテ遵如上人ノ次男遵乘ヲ二俣ノ坊ニ住持セシム、故ニソノ所緣ニヨリ北

國ヘ下向シ玉ヒ、マツ加賀國二俣ノ坊ニ着シ玉ヒ、ソレヨリ越中ノ國ヲ經廻シ玉ヒ、ツ井ニ利波郡蟹谷庄内土山ニ於テ一宇ヲ建立シ玉フ、文明三年五月二日ト云々、土山御坊トハコレナリ、則チ一宗相傳ノ法義ヲ弘宣シ玉ヒ、餘閑ニ庭砌ヲハラヒ、石ヲ立テ樹ヲウヘテ、シハラク足ヲ憩ヒ玉フ、〇下略

越中ノ土山御坊

本光坊了顯

〔本向寺記錄〕〇前越　五代本光坊了顯　此了顯代ニ、大谷村（越前吉田郡）ヨリ同國坂井郡吉崎ヘ移住仕候、文明六年三月廿八日、吉崎之御坊回祿之時、蓮如上人高祖御眞筆之御本書八卷之内、五之卷〇頭書ニ「五之卷トアルハ誤リ也、近年本山集覽會ノ節、駝ト手ニ取請ケ拜見候處、信ノ卷ニ相違無之候、併卷物ニ非ス、トジ本ニテ上下合本ニ候也」トアリ、ヲ御机ニ御置、御拜覽被遊候節、俄之炎上故、御取落被遊候、因茲事外御歎キ被成候、然ル處本光坊了顯其御書可奉取出由申、火中ヘ飛入申候、左右ヨリ物ニ狂歎トテ押留候、本光坊刀ヲ以左右之袖ヲ切駈入申、御本書奉取候得共、餘リ煙滿塞リ出申事不叶、御座舗二間過、柱之根ニ坐シ燒死申候、火事終テ、蓮如上人直ニ御下知被遊、以水殘火ヲ消、本光坊坐シタル疊共ニ取出御覽被遊候得ハ、腹切腸ヲ摑出、其跡ヘ彼御書卷ヲ胸板迄押込、目ヲ見出、左右之手ヲ以腹ヲ抱燒死居申候、其時上人御涙ト共ニ御手ヲ以本光坊カ面ヲ御摩仰ニ曰、我爲乍云、一切衆生安心決得之心得難有ト、御聲ヲ擧テ御歎キ被遊候、其時開シ眼閉申候ト申傳候、上人向後我弟也ト御意被成、御自身も御燒香勤行被遊候、葬送儀式御連枝御葬送之御作法、毛頭無相違樣被遊候由ニ御座候、北州腹籠之法門ト申候ハ、御本書第五之卷則本光坊ゟ腹ヨリ出ル故名付申候ト古老之口傳委細別傳御座候、

吉崎浦

〔越前國名所〕一、吉崎浦　南ニ一向宗蓮如上人境地ゐり、東西百三十間、南北七十三間、海岸高サ廿五間、先年〇大谷本願寺通紀ニ據レバ、延寶五年ノコトニカ、ル、兩本願寺爭論之義ニ付、公儀ヨリ破却被仰出、

二十八日、己亥、是夜、歲星太白ト合フ、尋デ、賀茂社及ビ伊勢大神宮、大和七大寺ニ命ジテ、災ヲ禳ハシム、幕府モ亦之ヲ命ズ、

〔親長卿記〕二　七月廿八日、晴、今夜戌刻有二星合、歲星與太白也、重變也、可慎々々、土御門有宣朝臣去夜分注進、在盛卿（賀茂）今夜分注進也、安賀兩人注進不同如何、今夜變勿論之由各有沙汰、

土御門有宣賀茂在盛注進二人其觀異ニ測ヲス

八月七日、晴、入夜新大納言（勸修寺）教秀奉到來、就變言（書脫カ）公武御祈事、可下知賀茂下上社云々、

八日、風雨甚晩晴、御祈事、依風雨不及下知、
九日、晴、御祈事、今日下知之、

〔内宮引付〕

就變異之儀、於内外宮可被致公武之御祈、――精誠之由、被仰下候也、恐々謹言、

八月二日　□綱
祭主三位殿（藤波秀忠）

御教書

――由事、御教書案文献之、可被下知兩宮之狀如件、

八月二日　神祇大副在判（藤波秀忠）
大司御館

祭主下知狀

就――事、御教書並祭主下知如此、仍献覽之、可令存知給候、恐々謹言、

八月廿七日　大宮司（荒木田）
謹上　内官長殿　大宮司氏長

二星合、公武御祈、自來八日一七ヶ日可抽精誠之旨、可被下知内外宮禰宜等給之由、被仰下候也、謹言、

十月二日　判
祭主三位殿

――旨、可被下知内外之由、被仰下候也、仍狀如件、

十月四日　神祇大副判
大司御館

二星合公武御祈禱事、御教書並祭主下知如此、仍献覽之、可令存知給候、恐々謹言、

十月廿六日　大宮司判
謹上　内官長殿　――氏長

〔經覺私要鈔〕七十

文明三年七月二十八日

八月十六日丙辰、晴曇不定

早旦自京都(變)反異御祈禱事被仰之間、則遣供目代、(正文)又寫之遣七大寺之別當了、

廿二日甲戌、天曇

一、綸旨之(マヽ)寫之、遣七大寺別當之處、(東北院俊)圓(修南院)光(憲北戒)壇(院元)請(雅)書ヲ出ダサズ、(禪)師不及返事、緩怠之至也、(以上八月十六日ノ條ニモ收ム、)去十六日變異御祈事被仰出之間、同相觸之處、其も彼三人不及請文、重疊之狼藉也、有所存歟如何、

綸旨寫ヲ七大寺ニ致ス

東北院俊圓修南院光憲北戒壇院元雅請書ヲ出ダサズ

經覺之ヲ憤慨ス

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　閏八月九日

去月就赤腹之所勞、七大寺御祈禱事、綸旨被成之、(以上八月十六日ノ條ニモ收ム、)又二星合流星御祈、同自武家被仰出云々、同安位寺(經覺)殿御物語也、

八月大辛丑盡朔

三日、癸卯、義政。夫人日野氏ト和セズ、是日、細川勝元ノ新第ニ移ル、尋デ室町第ニ還ル、

勝元新第ヲ義政ニ進ム

日野氏小川御所ニ移ル

日野氏還ル

〔宗賢卿記〕乙　七月廿八日、

有御所望云々、

去比御臺与聊有御問答事等、仍御臺御方出室町御所、居住給北御所、(御臺母儀御座所也。)

八月大三日、室町殿渡御管領新造亭、(御出以前御臺還御室町殿、主人(上カ)御對面、但猶不和云々、)今夜少々進太刀云々、

公家武家各太刀ヲ獻ズ

四日、今朝公武之輩少々進太刀云々、(小川坊城)晩頭日野(柳原)大納言資綱、源中納言(庭田)雅行、(武者小路)中納言資世、民部卿(白川三位忠富卿、)俊名(故中納言俊顯卿猶子童形也、)予(大藏卿、)前官務長興(小槻)宿禰(左大史)等、(各直垂、)同道之參室町殿新造御所、有御對面、各進太刀畢、

義政室町第ニ還ル

六日、室町殿還御室町御亭、

義政退隱セントス

〔親長卿記〕二　七月廿一日、

陰、入夜雨下、(略)○中(略)爲御不豫時節、(○御不豫ノコトヲ七月二十四日ニ本條アリ、)武家又諸篇御退窮之間、可有御隱居之由近日有仰、已一兩日及事急、

旁以披露不可叶、但有機嫌者可奏聞之由返答、

参内談廣亞相（廣橋綱光）、同予（議）儀、先可相宥之由可仰武家奉行云々、尤可然之由仰了、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　八月七日

一、定清擬講來、對面、雜掌重藝注進、室町殿可有御隱居之由及御沙汰之間、毎事天下御沙汰事不及披露、隨而寺訴事無是非云々、又昨日烏丸儀（資任、西響）同三司入道方より太閤（一條兼良）ニ申入分、此事大略治定、御臺ハ北少路新造ニ遷給、御中不和故也、北小路殿ハ公武不可立入、可及嚴密御沙汰之由御下知了、公方ハ細川之新殿ニ遷給、御隱居用云々、凡希代事云々、

甘露寺親長廣橋綱光ト議シ之ヲ止メントス

烏丸資任一條兼良ニ報ズ

閏八月十五日

一、中御門中納言（宣胤）被來、色々物語、（○中略、天皇御遁世ノ思食ノコトニカヽル、四月六日ノ條ニ收メタリ、）室町殿ハ御臺ヶ御中不和勿論云々、日野前内府（勝光）ヶ公方御臺御中同不和、西方新主御座之間、行末可爲如何哉、（○西軍、小倉宮ノ王子ヲ奉ズルコト二十六日ノ條ニ見ユ、）

日野勝光義政夫人ト協ハズ

廿二日

一、御臺御身上事色々口遊、主上内々密通事在之故、公方ヶ主上御中不和歟云々、希有事也、千萬雜說云々、

天皇義政ト御不和トノ說

〔經覺私要鈔〕七十七　八月十六日丙辰、晴曇不定

又室町殿自御隱居所御還住候、御臺同被歸參申、（○上下略、全文ハ十六日ノ條ニ收ム、）

〔國華餘芳〕美濃高橋善太郎氏藏

一、定而被及聞召候哉、東御所樣、去月比をり京兆之新造へ御成候て御隱居候、御出家あはへきよし候へ共、それをハとりとゝめ被申候ゝる、御臺樣ハ北小路殿の御さとへ御うつり候、主上樣ハ大原へ臨行ゝるへきにて候を、自大閤樣舊院の御年忌一回候ハてハ、不吉の例よて候由御意見候間無其儀候、然間主上樣と若君ハゝり室町殿ニ者御座候、公武奉公奉行人已下人數を分付らゝ候由承及候、

一、東將軍樣も、更ニ此亂世御庶幾候ゝぬ事現前候哉、かさ〳〵御進退事、如踏薄氷御遠慮肝要ニ候、併おこのものゝいさめよ御付候てハ、賢聖のこゝひ御渡候ましく候、さても和歌所の御人數、是又人をこそ撰もてきさる事よて候らめ、かさ〳〵平仁の御身もちよてゝ口惜次第ゝるへく候、（○上下略、本月七日ノ條ニ改ム、文明三年）八月十九日

天皇大原ヘ行幸アラセラレントシテ給フ

一條兼良諫止シ奉ル

姉小路殿（基綱）御陣　八々御中

○コノ後、義政、再ビ勝元ノ第ニ赴キテ、又還ルコト、閏八月二十九日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔狂雲集〕敬上　天子堦下

大德寺宗純詩ヲ賦シテ時事ヲ諷ス

財寶米錢朝敵基、風流兒女莫相思、扶桑國裡安危苦、傍有忠臣心亂絲、

又

乾坤海內起烟塵、昨夜東風逼四隣、禍復美人身上事、榮華可悔馬嵬春、

幕府、近江守護京極孫童子丸ニ命ジ、石清水八幡宮領近江岸本郷ヲ八幡宮雜掌ニ交付セシム、

〔石清水文書〕六、辻村豐德外四氏所藏

（端裏書）「小田刈御奉書案　文明三　爲脩」

石清水八幡宮領江州岸本郷事、度々雖被仰、于今難澁、太不可然、速可被沙汰渡下地於社家雜掌之由候也、仍執達如件、

文明三　八月三日　（飯尾新左衛門）爲脩　在判

（京極孫童子丸）守護　重連　在判

南都殊ニ大風

七日、丁未、大和大風雨、屋舍ヲ破ル、

〔經覺私要鈔〕七十七　七月十二日癸未、霽

一、蛇西ノ柴墻ニ上了、大雨之先兆歟、

八月七日丁未、自旦雨下風吹、及日中大風吹了、所々舍屋破損云々、自申下刻霽、

八日戊申、

今日風以外大風也、下所吹破了、南都ハ殊大風也云々、

閏八月十四日甲申、雨、土曜辰巳時

日々雨爲世上珍事云々、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　八月八日、雨下、大風

一、千若丸爲神事罷出了、去六月廿五日より祇候、大風大雨時分退出、迷惑察遣了、

廿一日、十八日雨下

一、十九日大雨下、三方入土□云々、窪城春藤得渡參申、

〔親長卿記〕　二　八月八日、風雨甚、晩晴、○山城風雨ノコト、便宜合收ス、

飛驒國司姉小路基綱、三木久頼ト戰フ、久頼敗死ス、尋デ、同國守護京極孫童子丸、兵ヲ出シテ基綱ヲ擊シトス、

〔國華餘芳〕　美濃　高橋善太郎氏藏

基綱入國ニ就キ援ヲ土岐成頼ニ請フ

美濃ノ兵飛驒出軍ヲ命ゼラルル

堅守シテ動クナカレ

尙々其方事、相構々々、御ゐたまり候ハヽ、可然候、不然ハ當國勢出陣一定候、更□□申候て死さくも不存候間、不殘心中きと申入候、御同心可爲本望候、此趣權佐殿へも御傳達可然候哉、

態捧書狀候、抑就御入國事、連々自守護方（土岐成頼）合力事雖被申候、色々致難澁候之處ニ、去七日依三木（久頼カ）討死仕候、自京極殿（孫童子丸）節々出陣事承候、殊自江州一勢可罷立候段必定候、然者當國勢事も、爲上意堅可被仰出候旨其聞候、言語同斷次第候、

一、貴殿樣御事、多年申承之間、不殘心中申入候、所詮先此まゝにて御要害を被踏候て、事を御をこし候ハヽ、ゐゐのと御入候ハヽ、可然候、然者當國勢の事も色々申述候て出陣旨可遲々候、更參會申候て、自他命を捨事ニすゐを候、其上天下の作法連々如申入候、計々（マヽ）あハせをして德とり候へき儀までよて候歟、正〳〵く見るゐなへ落入爲體よて候哉、其樣の御事も、恐ゐのら一國を悉きり御ゐたまゐのへ候とも、更本ハあるまゝく候、又いゐのやうの儀も可出來候歟、只御本領を無相違始終御知行候て、天下の落居を御覽〳〵合候ハんをる事可然候哉、今度三木間事も御高名をさる事にて候へとも、恐ゐのらやう〳〵事を御をこ〳〵候哉と無勿體候、但是非共ニ御生涯を被捨、此時御進退を可被決之儀、御あてゐいの其子細も候ハヽ、不及申入候、當國勢罷立候へき事旁非本意候間、內々案內を申入候、このまゝ先御ゐたまり候ハヽ、涯分江州邊之事申合候て、囘計略候て見候へく候歟、御報ニ可示給候哉、○中略、義政、細川勝元ノ新第ニ移ルコトニカヽル、三日ノ條ニ收メタリ、

仕合ヲシテ德ヲ取ルガ天下ノ作法

領邑ヲ全フシテ形勢ヲ窺フベシ

死ヲ期シテ進退ヲ決セントナラバ何ヲカ言ハン

飛鳥井雅親ノ爲メニ歌會ヲ催ス

飛州出陣ノ催促

一、去七日より數日、飛鳥井大納（雅親）言殿これよ御入候、御うゐさのミ候つる、於度々一讀致興行候了、あハれ〳〵皆々御一所ニ候て、うちとけて御物語申述候ハんと申出事よて候、ゐハらくもこれよとゝめ可申よて候つれ共、飛州出陣事色々催促ニよて、事さハゐ〳〵く候とて御歸候、これさへ其樣の御うさて〳〵さにてゐそ候へきと存より候之間、心中を申入候、

世乃中のちゃふみちをハ知人ゝゝゝ行末ゝゝゝと迷ふらん

爲恐〳〵不少候、此御報草次さ〳〵に可致覺悟候、くれ〳〵愚慮ニ御同心候ハヽ、涯分無爲無事の計略をいさ〳〵可進ニ候、此由可得御意候、恐惶謹言、

（文明三年）八月十九日　　妙椿

姉小路殿御陣

八々御中

○齋藤妙椿、東將武田國信ヲ山城如意嶽ニ攻メシコト、三月二十一日ノ條ニ見エタリ、京極政高、基綱ヲ逐ヒ、飛驒ヲ取ルコト、五年十月十一日ノ條ニ見ユ、

十一日、辛亥、崇德院奉納千句連歌、

〔新撰菟玖波集〕二十發句下　文明三年八月十一日、崇德院奉納ノ千句ゝ、

すみのゝる月ハ去らミ紫雲もなし　慈照院入道贈太政大臣

十四日、甲寅、大外記押小路師著、駕輿丁等ノ課役ヲ督徵ス、依テ駕輿丁等番役ヲ免ゼラレンコトヲ請フ、

親長廣橋綱光ト議シ催促ヲ停メシム

師著聽カズ

女房奉書幕府ノ意旨ニ依ラシトス

〔親長卿記〕二　八月六日、晴、駕輿丁等申、（押小路）師著朝臣米穀課役事、可致沙汰之由及催促之間、可止番役之由申之、奏聞、

八日、風雨甚、晩晴、一昨日奏聞駕輿丁叉、談廣橋亞相（綱光）、可然之樣可申沙汰之由有仰、廣亞相去月廿九日付件申狀、其時予談之、申云、可被申武家、可被經御沙汰之間、先可止催促之由可有御下知歟之由談了、仍今日予以奉書仰師著朝臣了、其案在別、

十四日、晴、駕輿丁課役事、雖仰師著朝臣、不可止催促之由申之、仍奏聞、駕輿丁等可止番役云々、

一日申入候、駕輿丁うせうの事、武家へ申され候て、御はさをへられ候ハんするゝと、まつ使をひのせ候へと申つけ候へとも、あなゝ候まゝきよ〳〵師著朝臣申候ほとふ、いゝふも候やうよとのよちやうらに申つけ候へと、おのうへゝのよちやうハとうゝめ候て、一向甲乙人よな〳〵候へきと申きり候、このほとも、ひろた〳〵の大納言いろ〳〵さんゝう候て、入魂〳〵候へとも、外記もせうういん〳〵候ハぬまて候、このうへハいのんとせられ候へきやらん、一さん御ささにをよひ候ハてハをくハに（とゝのカ）、甲乙人ふなり候てハ去のるへのらに、御申狀候ハヽ、よ〳〵御心候て御ゆろう、ゝ（くカ）

駕輿丁等懸課役之間、自今日申暇可止駕輿丁之號云々、奏聞、可止駕輿丁之條不可然、所詮永享度駕輿丁等致其沙汰之由師著朝臣分明申之、是一、ゑのと可止駕輿丁之號之由思切歟、是又一、不云權門勢家之被官、可懸氣之由、今度被成武家下知了、如其不云權門被官相懸歟、先有殘輩者、駕輿丁等事可被經御沙汰之間、可引使之由被仰之處、不承引之條若緩怠歟、猶可尋實否於駕輿丁云々、退出、召寄雅久仰含、今夜相尋、明日可申云々、申合廣亞相並長橋局等了、

（マヽ）（丁脫カ）（イ待）（壬生）

廿二日、晴、駕輿丁等被懸課役之間、自今日申暇可止駕輿丁之號云々、奏聞、可止駕輿丁之條不可然、所詮永享度駕輿丁等致其沙汰之由師著朝臣分明申之、是一、ゑのと可止駕輿丁之號之由思切歟、是又一、不云權門勢家之被官、可懸氣之由、今度被成武家下知了、如其不云權門被官相懸歟、先有殘輩者、駕輿丁等事可被經御沙汰之間、可引使之由被仰之處、不承引之條若緩怠歟、猶可尋實否於駕輿丁云々、退出、召寄雅久仰含、今夜相尋、明日可申云々、申合廣亞相並長橋局等了、

廿三日、雅久示送云、已前三个條不能左右、權門被官人相殘云々、及晩參內、下姿、可參師著朝臣之由、雖仰、稱歡樂之由不參、

○駕輿丁、賀茂氏人ト、賀茂新關勘過ノ事ヲ爭ヒシコト、二年十一月三日ノ條ニ見エタリ、

十五日、乙卯、石清水放生會延引、

〈續史愚抄〉廿九後土御門院上　八月十五日乙卯、放生會延引、秘抄、

〈放生會上卿已下歷名〉文明三年、大會延引、

○石清水放生會追行ノコト、四年十一月十八日ノ條ニ見ユ、

十六日、丙辰、麻疹、赤痢、疱瘡ノ諸疫流行ス、義政、及ビ夫人日野氏等之ヲ患フ、是日、大和七大寺ニ命ジテ祈禳セシム、

〈經覺私要鈔〉七十七　八月十二日壬子

藥師圖繪

今日流布所勞ハシカ腹等ハシカ令倍增、老若多令逝去之間、爲靜之有藥師圖繪、別會五師實心、七僧等可尋記、勸此坊中、用途少事遣圖繪所了、

十三日癸丑、霽

一、經胤語云、山田宗朝赤痢所勞以外間、自古市遣人尋之云々、

山田宗朝赤痢

一、覺朝以狀申送云、禪定院（政覺）僧正ハモカサ、禪公ハ腹ヲ被下之由申給了、以外事歟、驚入之由返答了、

禪定院政覺疱瘡　禪公赤痢

十四日甲寅、霽

今朝辰刻、鬼神耳目不聞時也、病ヲ問ニ吉也云々、仍拂曉遣印盛、僧正師弟サカノ事尋遣了、歸來云、僧正ハ熱氣計ニテ無殊事云々、禪公ハ熱氣上ニ赤痢所勞以外也、ヒル十度計、夜モ十度計云々、夜前藥モ未無其減云々、驚入者也、

死人ノ數長谷二百人　龍田百餘人　奈良六百人

一、林教語云、長谷ニハ二百人計依此所勞逝去云々、又龍田ニハ庭弱里也ト云トモ百餘人死云々、先代未聞事歟、奈良中ニハ老若六百人計不覺云々、匪直事歟、

肉豆救散

一、自覺朝方申給云、禪定院僧正熱氣既散云々、心安者也、次禪師御房腹ハ肉豆救散ヲ清賢法橋調進、被服用間、シホリケ止、度數減云々、是又心安者也、

隨心院嚴寶赤痢

一、隨心院嚴寶僧正モ、自一昨日赤痢也、今日ハ猶不快云々、以外事也、

足利義尙疾ム　義政夫妻赤痢

十六日丙辰、晴曇不定

○上略、變異祈禳ノコトニカヽル、七月二十八日ノ條ニ收メタリ、

御座候、又室町殿自御隱居所御還住候、御臺同被歸參申、○義政、及ビ夫人ノ室町第ニ歸リシコト、本月三日ノ條ニアリ、然兩所共流布病御腹下候、又邪氣御座候、自所々御祈禱のミよて候、進卷數者可然之由存云々、

一、經胤上名(奈)良間、罷向禪定院、可相尋師弟所勞之由仰付了、歸來云、僧正者發(熱カ)サメテ未快云々、禪公者腹ハ無子細、然而食事一向不叶云々、以外事也、

十七日丁巳

一、禪定院僧正、並禪公腹事、次第本腹由、尊譽律師申給了、

一、上北面良鎭、舞專子、千代壽、自去十四日赤痢病出之、今日未刻死去云々、不便々々

十八日戊午、天曇、申刻大雨下、廿雨云々、

一、春阿來申云、僧正所勞昨日ハ以外大事處、召醫師竹坊被尋問出藥了、仍今朝減氣云々、

十九日己未、霽

一、小入道自曉小赤痢由申之、

廿日庚申、天曇、小雨

綸旨

大般若經唯識論ヲ開講セシム

被成綸旨

今秋赤痢之流布無分尊卑、近日蒼生之病患不論花夷者歟、早撰定吉曜、令開講大般若經、並唯識論、以除病之時爲結願之日、殊可凝丹祈旨、可令下知滿寺給之由、天氣所候也、仍言上如件、政顯誠恐謹言、

右少弁(勘修寺)政顯奉

八月十六日

進上　興福寺別當前大僧正御房政所

禮紙ニ

追言上

請案文

先例

七大寺同可令下知給候、未拜賀之間白紙候也、重誠恐謹言、

御請案文

今秋赤痢之流布不分尊卑、蒼生之病患不論花夷者歟、早撰定吉曜、令開講大般若經、並唯識論、以除病之時爲結願之日、殊可凝丹祈之由、早令下知滿寺、可致御祈禱之懇祈之由、可令奏聞賜之狀如件、

八月廿日　　前大僧正經覺　請文

右少弁殿

追申

承保四年胞瘡（疱）流行、於大極殿千僧御讀經、七大寺分被讀仁王經、寛治七八兩年共以令病時於當寺大般若經被讀之、又天永四年二月上旬、別可致懇祈之由被仰下了、任度々先例、可消除流布病患之由、嚴密可申付也、

則七大寺並寺門へ遣正文、至七大寺遣案文了、

廿一日癸酉、霽

一、小入道腹自一昨日赤痢病出間、昨日清賢法橋藥肉豆具以下令服用之處、夜部及五十度下痢之間珍事也、仍畑藥自今朝令服了、然及夕藥故歟、事外得減云々、神妙、

廿二日甲戌、天曇

一、爲除病事、於高緣有百万反念佛（百万反念佛）、眞俗相交云々、

一、綸旨（ママ）之寫之、遣大七寺（七大）別當之處、俊圓僧正（東北院）、光憲僧正（修南）、元雅（北戒壇院）禪師不及返事、緩怠之至也、去十六日變異御祈事被仰出之間、同相觸之處、其も彼三人不及請文、重疊之狼藉也、有所存歟如何、（○七月二十六日、變異祈禱ノ條ニモ收メタリ、）

病事御祈也、

一、覺朝來、僧正並禪公腹大略本復（復下同）云々、目出々々、

廿三日乙亥、霽

被成綸旨御返事、以供目代狀申之間、付雜掌、

一、小入道於腹雖得減、又出物沙汰之云々、世上人大略沙汰之間、爲其人數歟可眉目哉、

一、依妻室母件病（今月四日死去云々）逝去之間、覺朝可籠居之由申暇了、

閏八月二日壬申、大雨、月曜申時

一、今日畑狀在之、古市（胤榮）自昨夕違例、例（古市胤榮ヲカ）歟、

一、世上サカ、赤痢、ハウサウ共以猶珍事、人多以死去云々、不便々々、

四日甲戌雨、水曜巳子時、

一、古市所勞未散云々、件流布物歟云々、又經(畑)胤も□痢計會云々、

六日丙子、自今夕屬霽了、金曜刁酉時

○上略古市ハ、自陣令歡樂之間、令乘輿罷歸云々、流布所勞歟之由申之、

一、山田宗朝依赤痢病、昨日五日逝去云々、古市事殊無如在者也、云不便云力

落者可惜者歟、

宗朝ハ古市胤榮ノ股肱

七日丁丑、天曇、土曜辰巳時

遣松若於古市、違例樣相尋了、得少減之由返答、可然々々、

十日庚辰、雨、霽曇不定、火曜卯戌時

一、古市違例無分明之減由申間、今朝遣松若相尋了、然以長田家則、今度畑事

陣ヘ相伴、万事粉骨悅存候、又所勞事連々蒙仰候、被入御意條畏存由申間、

違例樣委細相尋了、今明流布所勞歟由存之處、無出現之儀、然者本腹歟之

由、雖相尋(マヽ)合〻以下不快之間難意得云々、但於醫師者さゝ勿論之由申

云々、

畑經胤赤痢

十五日乙酉、霽

一、西京北院去九日依赤痢所勞死去云々、北面林教シウト也、

西京北院某赤痢

廿日庚寅、霽

一、勝觀房云、古市所勞事、依松井藥次第本複、今日飯ヲ食云々目出々々、

松井藥

廿三日癸巳、霽、月曜申時也

一、昨日林教來申云、西京北院去月九日(衍カ)依赤痢卒去了云々、五十六歳也、林教

シウトの間、可籠居之由申暇間、不可有子細之由仰了、

廿四日甲午、霽、火曜卯戌時

一、松若自昨夕風氣云々、件さゝ歟、

尋尊麻疹

〔大乘院寺社雜事記〕四十七

八月十一日

一、自昨夕朦氣、近日世間流波(布脫カ)志賀所勞氣歟云々、

十二日

一、伏臥以外連述(マヽ)、以後亡(忘カ)前後畢、

廿一日、十八日雨下

一、十七日千代壽丸他界、十三、舜□息子也、不便々々、腹□

閏八月四日、雨下

古市朔日よりハシカ所勞、陣中迷惑云々、○上下略、胤榮出陣ノコトハ、二十七日ノ條ニ見ユ、

五日

一、今日辰刻山田他界、四十九歳云々、爲古市力落不可過之、近年山内ハ悉皆山田成進退者也、今度數日腹所勞云々、

宗朝ノ勢力

八日、雨下

一、アカ井御所、並姫君、ハシカ御違例云々、

一、於極樂坊万陀ラ堂百万反初之、今度腹ハシカノ所勞、死去者不知其數、彼訪且又爲祈禱云々、聖十五口請定、藥師寺之北院入滅了、

百万反念佛ヲ極樂坊ニ修ス

九日、雨下

去月就赤腹之所勞、七大寺御祈禱事綸旨被成之、○中略、二星合ノコトニカヽル、七月二十八日ノ條ニ收メタリ、同安位寺殿（經覺）御物語也、

九月四日、小雨下

一、長柄今日入滅、腹所勞云々、訓英俄下向于田舍云々、

長柄某赤痢死去義政一行三禮心經ヲ吉社

〔宗賢卿記〕乙　八月廿五日、今月十日比歟、室町殿（義政）令書寫一行三禮心經給、

是世間流布赤疹御祈也、御書寫功畢、不及供養被奉納日吉社大宮云々、可被納元三大師之由思食之處、青蓮院門主（尊應）被申意見如此云々、

ニ納メテ疫ヲ祈ル

廿六日、近日號送赤疹、ハシカ云々、構中町々有囃物以下風流等、每夕有之、

麻疹送リト稱シテ風流ヲナス

閏八月七日、今日號送赤疹構中之地下人等、取別結構之風流囃物作山等有之、又作老尼躰、或乘舟、或乘車、以金欄以下飾之、山伏之負花傘並甲冑人以下五六十人渡路頭者也、武將管領以下諸大名悉見物之、或於屋上構棧敷、或於家内垂簾見之、其躰如祇園會三條四條棧敷、於室町殿御門前致種々儀畢、至御靈社事畢、一八日、自今日於安樂光院被開心經、嵯峨心經堂之經大覺寺門跡被出之、嵯峨天皇勅筆云々、赤疹流布之間、諸人爲令頂戴之及此沙汰也、七ケ日云々、依勅命被開之、

義政以下諸大名見物祇園會ノ如シ

嵯峨天皇宸筆心經ヲ開ク

後日聞之、此箱中心經三卷被納之、一卷嵯峨天皇勅筆、弘法大師願供養、一卷後光嚴院勅筆、一卷後花園院勅筆、三靈院准后僧正義賢、願供養、箱銘如此般若心經箱、大覺寺、以上八字、以貝入之畢、

廿二日、嵯峨心經今日被納之云々、

〔親長卿記〕二　八月十二日、晴、小生流布歡樂、

廿日、晴、勘解由小路前中納言來、小生歡樂訪之、小生今日少減、

後八月六日、晴、稱送疱瘡之惡神之由、珍尼公出來之由、兒女等稱之、不可、所々有囃物、每日夏也、

疱瘡神ヲ送ル

七日、晴、今日町送疱瘡之惡神、有難物、室町殿御前、北小路殿御前等可渡之或仁構棧敷招請之間罷向了、見物不相應了(イ也)種々有難物、○疱瘡流布ノコト、七月二十一日ノ條ニモ見エタリ、

〔和漢合運圖〕坤　文明三辛卯、天下赤疹人多死、○假名年代記、會津舊事雜考同ジ、

〔密宗年表〕下　(文明三年)今年天下多病赤疹而死者、然山徒無變、山史、○高野春秋同ジ、

〔越智家譜傳〕○大和　二十八代家榮　文明三年春、○秋ノ誤リ、亦(赤カ)疹流行、多死者、爲之讀法華經千部、

畠山義就、權ニ山城社寺本所領ヲ收メテ其租ヲ徵セントス、東寺自ヲ徵シテ之ヲ納レント請フ、

〔廿一口方評定引付〕四○山城　八月十六日

一、自(畠山義就)右衞門助殿、當國所々寺領當年悉可借用之由、越中(遊佐)以折紙相觸之、其故者、河内紀伊國无正躰之間、不限當寺々社本所領悉如此云々、迷惑之次第也、但當寺事者、爲異于他之在所之間、不混自餘之在所、堅可有佗事也、且爲伽藍安全、且爲寺領无爲、於不動堂一七ケ日夜不斷護摩可有懃仕、卅口所役六人預役之、每日戌時皆參、慈救呪有之、仰夏衆可鳴時之具、開白十八日戌時、結願廿五日酉時也、支具事預等雖致訴訟、先規之間一座別廿文也、初中後三ヶ度、就大佛供餅菓子等備也、支具五十文(加增)宛也、廿一口方可致奉行云々、

河内紀伊正體ナキヲ以テ當國ノ租ヲ借ル

東寺修法シテ寺領ノ安全ヲ祈ル

閏八月八日

一、寄進下地可有注進之由、越中以折紙堅申通、披露之處ニ於佛事田者爲名主作職之間、不可有注進、但以前注進所殘寶莊嚴院敷地、每月十一日湯田渙(マヽ)殿等令注進、此外者无之由明日以雜掌可申云々、

寄進地ヲ注進スベシ

一、今度寺領可致半濟之由申事、一寺滅亡重事不過之間、此間鎭守西院ニテ一七ケ日祈禱有之、其外聖天供佛乘院懃修、猶於不動堂千座コマ可有懃行、支具料事、公文所納所乘觀乘圓等ニ可致秘計之由、植松奉行相共可申付云々、

寺領ヲ半濟ニスベシ

千座護摩勤修

支具料事、雖申付、難叶、秘計之由申間、不事行也、

同廿九日

一、昨日金勝院、原永兩人、畠山左衞門助殿罷出、寺領事本所名主共以半濟之儀爲寺家取立、進納申之樣預御入魂者、悅喜可申、不然者長日諸堂懃行佛餉燈油等令退轉、且者可爲一寺滅亡之條、迷惑之由□捧目安□縱入魂雖

寺家ヨリ徵納セント請フ

申難事行之間、斟酌之由再三返事畢、但以良照房雖申、如是承事候之間、廻思案可有了簡之由返事之通披露畢、

九月五日

一、寺領事、自左衞門助殿守護方入魂之處、无承引、以前自寺家年貢注進釐曲之間不可叶云々、所々寺領之內水田植松兩所本所名主有之、於名主分者不申注進、雖然於于今者、本所名主共、以半濟之儀取立、可致進納之由、以目安申間、重而可有入魂之由返事之通披露畢、

同十二日

一、寺領事、左衞門助殿召齋藤新衞門色々雖被仰、不事行、此上者不及力、但自國有音信者二三千疋之間、左衞門助殿訪可進之由被申之通、以內之平新左衞門物語之由、良照申通披露畢、

同廿七日

一、寺領名主分半濟、可有寺納事、就隅田佗事申通粗披露畢、

十月十日

一、譽田召年預之間罷向之處、申云、諸坊領之事御佗事之通致披露之間、半分免申、殘半濟分爲寺家取立可有進納之由申通披露之、各坊領所持之衆指出令沙汰、可有禮節之由可申云々、

名主分半濟寺納

十八日、戊午、御靈祭ヲ停ム、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　七月十八日

一、今日京都之御靈祭也、依天下大亂近年無之、三十个日神事也、

〔續史愚抄〕卅九後土御門院上　八月十八日戊午、無御靈祭、親長卿記追

足利成氏、下總香取神社ニ、社領同國小野、織幡、葛原等ノ地ヲ還付シ、尋デ、戰捷ヲ祈ラシム、

〔香取文書〕舊大禰宜家所藏二

香取神領下總國小野村、織幡村、葛原村等事、當知行人仁能々有御尋、社家江可被還付候、其間事者可相待申候、謹言、

文明三年八月六日　（足利成氏）（花押）

（朱書）「文明三年」

香取大禰宜（胤房）殿

香取神領所々事、如前々被返付候、至神事等、無沙汰之儀不可有之候、謹言、

（同上）「文明三」八月十八日　香取大禰宜殿　（同上）（花押）

（ハリカミ）文明三年辛卯八月十九日

就當國仁被立御簓候、彌屬御本意候之樣、可致御祈禱之精誠候、然者當社江一所可有御寄進候、謹言、

成氏土地寄進ヲ約シテ戰勝ヲ祈ラシム

八月十九日　香取大禰宜殿　（同上）（花押）

香取御神領下總國葛原、小野、織幡所々事、任代々證文旨、御知行不可有相違候也、此上者天下御祈禱、並御祭禮不可有御退轉狀如件、

千葉孝胤神領ヲ安堵ス

享德二年

享德廿年　八月廿七日　香取大禰宜殿　（千葉）孝胤（花押）

○成氏、古河ヲ逃レ千葉孝胤ニ身ヲ寄セシコト、六月二十四日ノ條ニ見エタリ、

二十日、庚申、〔親長卿記〕二　八月廿日、晴、北斗院澄元來、攝州潮（川邊郡）江庄事、藥師寺一（與脫カ）寄子可致代官云々、雖申付高安入道、藥師寺依不渡、不致年貢、然者可申付之由返答、追可申左右、飯尾賀州爲信來、潮江妻先可止催促之由申了、此間藥師寺不渡之間、伺了（マヽ）上意以件奉行申管領之故也、後八月四日、雨下、廣亞相（廣橋綱光）命云、泉涌寺領事、無入手之事者可辭退、又有知行之實者、於半分者可寺納云々、六日、晴、泉涌寺領事、山科七郷散在、尾州毛受等可辭退之由申了、於潮江者先可引置之由申了、

高安入道ニ代官ヲ命ズ藥師寺之ヲ承認セズ

二十一日、辛酉、〔佐々木文書〕一　○周防　尼子清定、伯耆ノ西兵ト、境松ニ戰フ、去八月廿一日於伯州境松、馳合敵令合戰、敵數十人討捕、由承候、尤感悅至候、殊被官二十餘人被疵、條神妙至候、彌可被抽戰功候也、恐々謹言、

文明三年　十二月十一日　（京極）政高（花押）

尼子刑部少輔(清定)殿

○伯耆ノ西兵、出雲美保關ヲ侵スコト、閏八月十六日ノ條ニ見ユ、

勝春、幕府ノ旨ニ任セ、石清水八幡宮領播磨繼莊ノ地ヲ、大山崎神人ニ交付ス、

〔離宮八幡宮文書〕二〇山城

八幡宮領播州餝東郡繼庄事、任御奉書遵行旨、可被沙汰渡大山崎神人者也、仍狀如件、

文明參　　勝春(花押)

八月廿一日

高見兵庫助殿

中村左京亮殿

二十四日、甲子、朝倉孝景、甲斐左京亮ト、越前鯖江、及ビ新莊ニ戰フ、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　閏八月十六日

一、去月廿日餘比、甲斐朝倉合戰、

〔日下部系圖〕(朝倉)敏景(後敏景、後孝景、小太郎、孫右衛門、○別本日下部系圖、コノ次ニ彈正左衛門尉トアリ、又敏景ヲ繁景ニ作ル、)

文明三年八月廿四日(越前今立郡)鯖江並新庄合戰、御感狀三通、

○孝景、左京亮ト戰ヒ、敗績セシコト七月二十一日ノ條ニ見エタリ、左京亮、戰敗レテ加賀ニ奔ルコト、四年八月六日ノ條ニ見ユ、

二十五日、乙丑、木津ノ兵、大內氏ノ兵ヲ殺ス、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　八月廿五日

一、今日於法花寺(山城相樂郡)邊臼井黨打止、木津衆所行歟云々、雜說可注重之(重可注カ)、大內披(被)官人云々、

九月廿一日

一、今日筒井罷上、率人勢、木津事物云故云々、但甲少々遣木津、其餘夜中引退了、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　文明三年八月廿八日裏

料足事被仰下候、只今事何とも不及了簡候、私所用候、只今十方雖致計略候、物云彼是候、不意用候、又木津邊事、十一日二日御勢付候て可被責候由□□□□此旨度々物云候ても、此方一人も不落來候處、今度若物忿事出來者、必可來候由申候間迷惑仕候、誠今日以參上御質物御申出候、心中樣

文明三年八月二十五日

木津邊出兵ノ噂

候、更以非如在之儀候、大□傳借不叶候て、珍事折節適御用事候、不進上候、
非緩怠分之由、可然様可預御披露候、恐々謹言、

八月九日　□

御番衆御房

○大内氏ノ兵、木津ヲ攻メシコト、四月二十一日ノ條ニ、木津ノ兵、西兵ヲ稲八妻城ニ攻メテ之ヲ取リシコト、六月是月ノ條ニ見エタリ、

二十六日、丙寅、西軍ノ諸將、小倉宮ノ王子ヲ迎ヘテ主トナス、是日、王子上洛、北野松梅院ニ入ラセラル、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七　閏八月九日、雨下

一、安位寺（經覺）殿入御、寶壽院御訪爲被申、太閤（一條兼良）云々、京都西方ニ新主上被申取立云々、十二三歳、此間（十八歳云々）越智（大和高市郡）畠坂寺ニ御座、經古市（去廿六日云々）御上洛、北野松梅院ニ入御、但其邊爲御用心不可然之間、山名入道之妹比丘尼寺安山院ニ遷御、後村上院之御末云々、先日女房躰ニテ、御輿ニテ、古市ヲ御通條分明也云々、安位寺殿仰也、自京都顯阿ミ罷下、同前ニ相語者也、小倉宮御息也云々、御父、並御弟御座云々、

十七日

畠坂ヨリ上洛

安山院ニ移リ給フ

後村上院ノ裔ト稱ス

一、南朝御上洛事、西方諸大名沙汰也、持誓院（齋藤妙椿）法印者不可然旨申云々、

齋藤妙椿王子ノ上洛ヲ不可トス

九月三日、小雨下

足利義視王子ニ謁セズ

一、南主北野御參詣云々、夜御衣等自山名方進之、今出河（義視）殿未無御參會儀云々、四條殿一向奉公云々、

義視新主擁立ニ同心セズ

八日

一、西方新主ハ小倉宮御息、十八歳成給、今出川殿ハ御同心無之云々、自餘大名悉以同心、御禮等申入之、御器用云々、春圓大説云々、

吉野南都衆等請文ヲ上ル

十六日

一、筒井律師來、對面、○中略、順永社參ノコトニカヽル、年末雜載神社ノ條ニ收ム、筒井相語、新主方仁御請申入方々請文等取之、吉野一山返事、南都衆内少々、其外諸國輩也、年號各別ニ被立之、○二年三月八日ノ條參看、八月御請共在之、又二宮御座之由在所見云々、

別ニ年號ヲ建ツ

廿一日

一、去十日頃歟、西方ヱ廻文等取之、一圓春圓大所行、子細露顯在之、迷惑餘令逐電云々、但古市邊ニ隱居云々、○廻文ヲ叡覽ニ備ヘシコト、二、年十二月六日ノ條ニ見エタリ、

春圓西方ヘノ廻文ヲ取ル

〔經覺私要鈔〕七十七　閏八月七日丁丑、天曇、土曜辰巳時

一、或者語云、南方可爲王人被上洛、只今北野松梅院御座云々、爲事實者以外事也、彌兩方大名諍不可止前表也、此躰者自壷坂御出云々、

廿日庚寅、霽

一、內府（鷹司政平）樣御物語云、南帝（只今京都御出王）二條家門（二條家ニ移リ更ニ內裏ニ遷御セラレントノ說）ニ御移、自其可成內裏御移云々、

九月五日甲辰

榮清（春圓大）來、南帝事等子細演說了、去晦日自京罷下、直越智ヘ令下向、今日罷上云々、

〔大乘院日記目錄〕三

八月廿六日、南主御上洛云々、西方御座、但小倉宮御末、岡崎前門主御息歟云々、法躰御事也云々、

○王子、越智家榮ノ大和壷坂第ニ入リ給ヒシコト、二年五月十一日ノ條ニ見エタリ、

〔附錄〕

〔大乘院寺社雜事記〕四十七

閏八月十三日

一、中御門（宣胤）下向、京都之儀迷惑之由云々、自冷泉殿書狀到來、子息事申給之、理覺院之弟子（十七歲、十一歲、）又兩人在之、

九月廿四日

一、中御門今日上洛了、

二十七日、丁卯、布施播磨守、萬歲某ヲ大和ニ攻ム、古市胤榮等、萬歲ヲ援ク、

〔大乘院寺社雜事記〕四十七

八月廿八日、雨下

一、布施昨日より罷出及合戰放火、万歲難義也、今日古市（榮胤）爲合力出陣云々、布施近所ニハ竹木等一切無之、雖令出頭、陣屋小屋等惣而不可叶、万歲事不責落者、中々不可叶事之由、先日古市相語物也、万歲在所外ニハ竹木等如形も不可有之云々、誠布施出頭之勝負ハ、可依万歲之儀也云々、布施（播磨守）ハ兩畠山ニ無等閑子細有之、雖何邊自河內國無合力儀者、出頭又不可叶云々、

閏八月四日、雨下

一、昨日南陣無心元之間、古市以下方遣書狀、返事今日到來、布施出頭、大略無爲云々、爲万歲迷惑云々、古市朔日ヨリハシカ所勞、陣中迷惑云々、八田依落馬一向不出陣、越智（家榮）是又不出陣、珍事云々、如今者万歲、高田、越智、古市可失面目云々、○麻疹流布ノコトハ、十六日ノ條ニ見エタリ、

布施方ハ箸尾　楢原　俱志羅　十市　筒井　前高田

布施ハ兩畠山ト懇親河內ノ助力ニ依ル

布施出頭

萬歲迷惑

布施方

文明三年八月二十七日

越智方ハ万歳　八田　飯高　古市　吐田　小泉
當高田

六日

一、布施今朝七時分陣拂、河内ヱ引退了、希有次第也、則古市以下歸陣了、

七日

一、古市歸陣珍重之由、以堯善仰遣之、畏入云々、

〔經覺私要鈔〕（中務丞）七十七　八月廿七日己卯、霽、水曜、時巳子

今日布施、高田、本館罷出云々、仍自越智方（家榮）押寄、布施鄉内放火大燒云々、始終之儀如何、但高田者不入本館、布施同所在之云々、甲貳百計在之云々、

廿八日戊辰、旦雨、自巳刻霽、木曜、時午丑

一、古市出陣、爲万歳合力也、畑（經胤）同罷出了、知音方樣少々申之、古市同道云々、

廿九日己巳、雨、金曜、刁酉時

自陣申送云、布施者上山ニ自身ハ陣取候、手物共ヲ三畫、細井戸邊ヘ出之之間、越智万歳勢合戰ヲ沙汰之間打負候テ、如元其勢ハ引上之間、布施領内悉燒拂、苅田ヲ沙汰畢、先以目出之由申云々、

越智萬歳ノ兵布施氏ヲ破ル

兵ヲ出ダシテ布施越智家榮鄉内ニ放火ス

卅日庚午、土曜、辰巳時、自夜大雨下

一、遣狀於畑所了、陣儀先以無爲云々、目出申遣了、

閏八月二日壬申、大雨、月曜、申時

畑陣ヘ七鄉人夫四人替ニ遣了、

三日癸酉、旦大雨、自申刻止了、火曜、卯時

七鄉傳馬替（川上味曾屋五郎次郎）出之間、遣畑方了、

四日甲戌、雨、水曜、巳子時

七鄉傳馬召遣之處、合戰之樣難事行之間、徒在陣事也、仍先馬者不可入之間、返遣之由經胤申給了、

六日丙子、自昨夕屬霽了、金曜、刁酉時

古市成阿午刻來申云、布施ハ夜前陣取ヲハツシテ忍出之間、万歳方ニハ不存知處、越智人ヲ上ニテ（マヽ）時ヲ作時、令万歳方（長田家則）よも存知、陣拂ヲサヘ沙汰ニテ令退陣之間、越智勢罷向燒拂由、自筑前方申送云々、神妙、則申下刻古市以下歸來云々、畑同古市ハ自陣令歡樂之間、令乘輿罷歸云々、流布所勞歟之由申之、〇古市疾病ノコト、十六日ノ條ニ收メタリ、

萬歳ハ布施ノ退却ヲ知ラズ

布施河内ヨリ出陣

〔大乘院日記目錄〕三　八月廿八日、布施自河内出陣云々、

後八月六日、布施引退云々、比興事也、

○細川勝元、奉書ヲ興福寺ニ與ヘ、布施、高田ヲ還住セシメシコト七月四日ノ條ニ見エタリ、楢原某、河内ノ援兵ヲ以テ、吐田某ト戰フコト、七年五月二十三日ノ條ニ、布施、萬歲ト戰ヒ、敗績スルコト、同年六月二日ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔經覺私要鈔〕七十七　閏八月十日庚辰、雨、霽曇不定、火曜卯戌時

一、畑向平清水云々、

十三日癸未、雨、不思儀(議)天氣也、金曜刁酉時

一、去十日經胤向平清水、今夕入夜罷歸云々、

廿日庚寅、霽

一、申下刻片山彌三郎先歸來了、

廿四日甲午、霽、火曜卯戌時

一、片山越河内之由申之、七郷人夫事申間、一人召遣了、

二十八日、戊辰、前左近衛權中將西大路隆範ヲ參議ニ任ズ、

〔公卿補任〕四十二　文明十五年　非參議從三位藤隆範(西大路)卿任參議云々、

綾小路俊量左近衛權中將ニ任ズ

敍從三位ノ條ニ、「元左近權中將、不經藏人頭」トアリ、

〔宗賢卿記〕乙　八月廿八日、從三位藤隆範卿任參議云々、

廣橋兼顯右中辨トナル

○綾小路俊量以下ノ任官ハ、本日ノコトニアラザレドモ、便宜左ニ附收ス、

〔公卿補任〕四十三　文明十五年　非參議從三位源俊量(綾小路)、卅三、寛正六年八月六日右近少將、○中略、同(文明)三年九月廿日轉任左近衛權中將、

勸修寺政顯右少辨トナル

〔宗賢卿記〕乙　八月廿日、○中略、御生母藤原氏准后宣下ノコトニカヽル、閏八月十日ノ條ニ收ム、權右中辨兼顯今日轉右中、○下略、上ニ同ジ、

〔辨官補任〕下　文明三辛卯　右中辨正五位上藤兼顯(廣橋)　八廿九轉藏、

柳原尙光文章博士ヲ兼ヌ

權右中辨正五位上同兼顯　藏、八廿九轉正、○宗賢卿記ニハ三十日トセリ、

右少辨從五位上同政顯(勸修寺)、十八、八廿九任、元右兵衛佐、去之、同日補五位藏人、前權中納言敎秀卿男、母故前中納言雅永卿女、

左中辨從四位上藤尙光(柳原)　頭、四十一敍正四位下、九六兼文章博士、